

萩圃顧錄

山本勉弥著

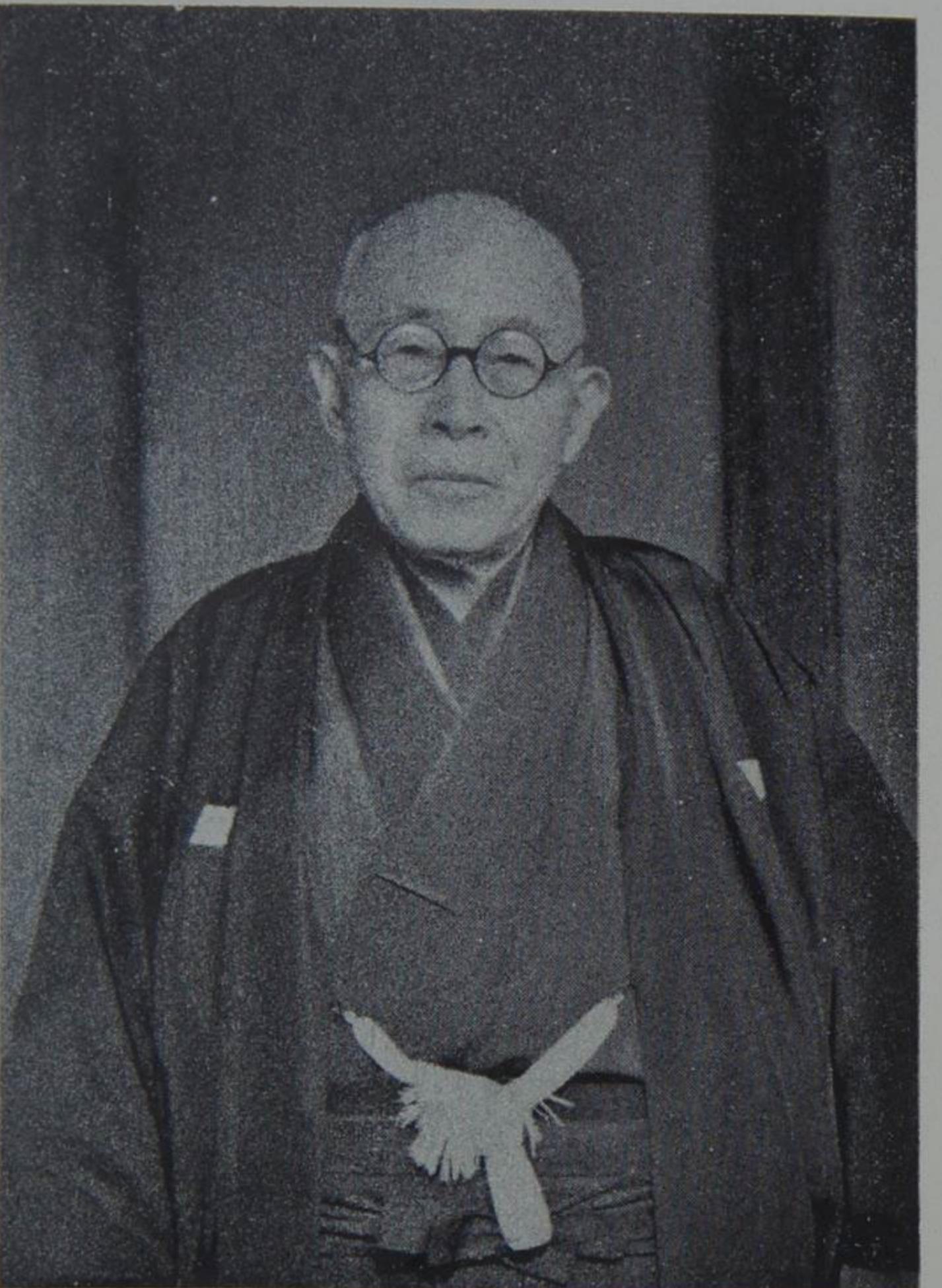


萩文化叢書第十卷

有志氏寄贈

森文山叢書第十卷

有志
氏寄贈



影近弥勉本山

序

○山本勉弥先生は今回更に「萩回憶錄」を上梓されまして、茲に逐次發刊の「萩文化叢書」も第十卷を數うるに至りました。眞に地方文化進展のため慶祝に堪えない次第であります。

先生はその序文にも述べていられますように、年少氣銳のころから詩文に親まれ、事に觸れ機に當り、常に感懷を託して多くの文章詩歌を遺されました。而してそれは丹念克明に保存されて、今回本誌上に發表されたのであります。

これらの作品は天衣無縫簡潔素朴で、隨所に人間善意の微笑を湛えています。また一方これはその時時の萩の市政史であり、風物史であり、人物史でありまして、作品を通して先生の人格に觸れ、先生をめぐる諸先輩を知り、萩市史の諸斷片を想起することが出来るのであります。

一篇中には、また宗教倫理面に亘る文章があり、先生日常の修養研鑽の跡

が窺れますか、これまた尊い文字であります。

時代的變革を経ました今日に於きましても、これらはその誠実眞摯な態度と共に青少年に資すること少くないことを信するものであります。

特に「萩町長林勇輔氏退職の經緯」「萩上水道鉄管問題」「鉄管問題の余波」の三部篇は、当時の萩市政史の重要な記録で興味津津たるものがあります。二十余年前の登場人物は已に半ば故人でありますか、何れも当時の躍如たる面影は眼前に見えるようであります。

これらの文章は何れも客觀的報告的態度に書かれたものであります、獨斷的主張や一方的な解釋に偏したような跡がなくて微笑ましい記録であります。

最後に私の感激いたしましたことは、鉄管問題の余波は先生から政治活動の基盤を奪い去つてしましましたので、先生は一時怏怏失意の思いをされましたが、俄然心機一転萩の瓦の研究に没頭され。爾來相次いで陶磁器、碑石の探査となり、萩史実の研究となりまして、そこに生彩ある生命を發揮されました。

ましたことは眞に尊いことで、純潔高雅な先生の人格の而らしめた所と感歎するものであります。

先生は青春時代から常に鬪志満滿として、何か人生にその足跡を遺したいと念願されました。そしてその念願は誇大妄想的な動機や一時的昂奮の結果や俗惡不逞な野望などから發したものではなく、實に先生の創造的意欲と理想主義に依つたものであります。

この念願は、先生の一生を通じて燃焼しつづけ、春風秋雨孜孜として、史料の蒐集に、詩文の構成に、一日の怠りもなかつたのであります。

全篇を通じて一片の驕激傲慢の跡もなく、常に純潔を持して所信の上に一途邁進されました態度は後進の深く学ぶべき点であります。

昭和三十三年九月

自序

萩文化叢書も第十巻として本書を刊行し得るに至つた。これで叢書が完成したわけではないが準叢書萩電争議実録、郡司一族の業績を加ふれば十二冊を算し、どうやら叢書の名を冠しても、許される程度のものとなつた。

余は尙數冊を追加したいと念願しては居るが、近來老境に入り、些か健康に自信が持てない氣がするので、一應叢書完成記念として本書を上梓することとした。

余は明治四十三年萩に歸着して以來、本業の他物好きにも種々の方面に頭を出し、稍々成功に近い事柄もあつたが、大失敗に終はつたこともあつた。兎も角危い世渡りをしながら、戦災にも遭はず、長壽に恵まれて、今日あるを得たのは、全く仏天の加護と神助に依ること、深く感銘して居る次第である。余は元來詞藻豊かな文学者ではないが、中学時代の宮井と云ふ国語の先生などの感化に因り、下手な和歌を早くより試みて居た。俳句も特別の師匠に近侍したことはないが、友人と共に數種の会合を催して居たこと也有つた。是等の吟詠は事に当り物に觸れて試みたものが多く、身邊雜錄や満鮮の風物など、共に、殆んど日記の意味が多いのである。芸術的低調を咎めることなくこの点御諒承御笑覽を願へれば幸である。

佛教に関する論策諸先輩に対する讃嘆なども、余にとつては捨て難い思ひ出である。

余が熱烈な社会運動に対しては多くの人の批判は免れざるものと覺悟はして居るも自警会の青年諸君に與へた修養目標などを御覽願へば、余としては平生の信條に従つて行動を敢てしたまでで、感情に囚はれ一時のぼせあがつた結果ではないことが御諒解出来ると思ふ。

余の如き地方の小人物が敢えて自己を顧るの小著を發刊することは、誠におこがましきことであるも、永く誤解の種子を招く恐れのある事は自ら辯解して置くの要があり、余としては多少の意義を感じて居るものである。

老來忘却の衰徵著く、寸前にしたること、寸後にするべき事さへわきまへぬこ

とすらある。況んや數十年を経過した事柄は記録を見てかかる成行もあつたかと、自ら物珍らしく感することがある。本著は親戚知己に余を見返へしていたゞく他に、過ぎし己れの行動を己れに教ゆる感を抱くのである。自画自讃は慎しむべきことゝ知りながら、些か巻頭に迂言を誌した。

端果 昭和三十三年九月

四
七

卷之三

三

凡例

春

桜咲く向ふが岸のよし経と
牛若山はやがて名乗らむ

夏

夏川に涼しき月を賞づるなり
牛若山は裳裾ぬらして

秋

たち並ぶ天狗か峯もけおされて
紅葉色濃き牛若の山

冬

いはげなき牛若山は雪深み
鳥帽子が嶽の袖にかかるる

牛若山辨慶滝と契りしは

思い金郷出合なるらむ

剣さえ取りて立ちたる諸人の

真心うつせ筆の穂さきに
血は湧きて止むにやまれぬ若人の

雄々しき心書きつらねてよ

祝萩新報創刊 大正十四年三月

天地の理り説くと云ひはすれど

たゞ口の端ぞ筆の穂さきぞ
祖師逝きて三千歳法の燈火は

時事偶感

昭和三年十二月

劍さえ取りて立ちたる諸人の

真心うつせ筆の穂さきに
血は湧きて止むにやまれぬ若人の

雄々しき心書きつらねてよ

時事偶感

昭和十四年三月

昭和九年五月

憂きことの通り来れども法の城
心しづかに君や護れる

世の幸をたゞ一すぢに祈りつゝ

遍路の旅を樂める君

錦着て帰りましけり里人は

いつまで仰ぐ君のいさをし

石の上に行ひます日もありし

塵の浮き世を遠く離れて

打ては鳴る鐘の響の高らかに

破邪の剣をとりて立たれし

瓦三首

昭和十一年六月

ふとした動機に因りて、余が考古の癖は「萩の瓦」と云ふ題目
に向つて、去る二月より擡頭し始めた。昨年来些か不遇の環境
にある身にとつてはふさはしいものか。瓦三首をつくる。

捨てられて草に埋る古事を

瓦の上に知るぞ嬉しき

野に山に打ち捨てられし古瓦

おのづから珠は光らむ塵の世に

瓦と共に捨てらるゝとも

和歌二題

昭和十一年九月

うら咲の百合一花となりにけり

庭前小景

二

枯草をだに焼かんすべなし
法の道説けども闇やおはすらむ

政事へと選ばれてゆく

新愁

昭和四年一月

汽車の内は暖かけれど照る月の
寒き思ひをいただけふかな

亡き父上が嘗て「興竹も千代の友とは思へども杖とたの
むは吾子なりけり」と書き置かれたるを思ひ出で
み供すら今はかなはず杖としそ

我を思ふとのたまひしかど

重なる愁

昭和四年四月

百日経ぬにみ親二人は逝きました
春とし云へど淋しからずや

授戒会のながき行事も終りたる夜大悲にかゝり絶ひし母
上を偲びまつりて

授戒会をおへし喜びそのままに

佛のみ座へかへるかこそ

神父

昭和四年十二月

伝道の聖業にたゞ生くるなり

清貨に居てゆかず娶らず

外典より育くまるれどみ佛の

教身に読む人の尊さ

八道彌七陸軍主計少將追憶五首

北の小庭に秋の通りて

古瓦

奈良の代の乙女の血潮通ふらむ

乳房に似たるうまし古瓦

法鼓廢刊に際して

昭和十三年五月

慈なき十年の我をかへり見る

法の鼓を打つ手とざめて

恥らひもまたいさゝかのほこりをも

打ち出したる法の鼓か

萩文化發刊にあたりて

昭和十三年五月

言あげの花によき実を結ばせて

人の期待にそむかじと思ふ

うづもれて隠れて幾世ふる里の

ふるごとを世に出さんとぞ思ふ

妻病み京大三浦博士に診を乞ふ

昭和十四年十月

病む妻を子等にまかして立いでぬ

秋雨けぶる京の夕暮

安政六年四月高杉晋作が盟友久

三

坂玄瑞に送りたる書簡を讀みて

昭和十四年十一月

奇しきまでやさしくなりぬ益良夫の
心ゆるせる友慕ひては

紀元二千六百年の紀元節の当日
萩市江向勤王館敷地内に於て行
はれたる遙拜所竣成式に參列し

て

昭和十五年二月

五十鈴川の石を貴く納めけり
その川水を打そゝぎつゝ
枝振もよくとゝのへて賜りぬ

いとゞかしこき庭の若松
天地をはらひ清めてみ惠を

石と松とにあほぐ今日かな

中村十郎君を憶ふ

昭和十五年二月

純情を画筆にのせて詩の國の
面影うつす君なりしかな
ともどちの厚き情を独居の
病の床に伏しおがみけむ

神戸に福本義亮氏の惜春莊を訪
ぬ

昭和十六年一月

画の彩をくりかへし見る

表彰記念盃にしるせる和歌

昭和二十一年二月

はからずも彰はされけり隠れたる
萩の古事現はしぬとて

三谷研山師先年中津江渡し場に
て壺底に雪舟焼と刻せる陶片を

拾ふ

昭和二十二年七月

陶窯の奇しきゆかりを河底に
秘めて残せる古壺の缺け

末田三枝氏がやまととべんや末
田みつ江の字句を入れたる和歌
を贈られたるかへし

昭和二十一年八月

敷島の道のしるべのみつ江とて
未たのもしくおほがるゝかな
山・との窯の盃贈るとして
鄙言をのべんやましけれども

身軀の違和は栄養失調ならで十
二指腸虫症なりし

昭和二十一年十二月

朝な夕な心の船を茅奴の海に
浮かべてあそぶ山の高樓

古里に遠く思ひをはせながら
陶の器を愛でませる君

香川政一先生追憶

昭和十七年九月

威におぢず世におもねらず古の
ますらだけをの面影ありしか

五十年をたゞ育英にさゝげけり
世の荒浪にもまれながらも

品川祠堂鎮座祭

昭和十八年十一月

注連張りて青竹結ひて新宮へ
いとおごそかに神靈迎ふる

戦時の一景女学校の鼓笛隊

昭和十九年一月

モンペイに足並そろへ勇ましき
樂奏しつゝ鍛笛隊行く

萩文化廢刊に際して

昭和十九年六月

大いなる潮の中を今日までも
船すゝめ得し幸をしづ思ふ

萩文化協会役員より祝還暦の画
帖を贈らる

昭和二十一年二月

嬉しさにときめきながら我を祝ふ

思ひきや虫わきて浮腫きつるとは
菜園いじりの過ぎやしぬらむ

久々に万年青はよき実結びたり
芽出度きことのあらむるしか

とく起きて万年青蒔きけり今日よき日

嫁ぎ行く娘の幸祈りつゝ
因れる万年青を贈り日出づる時
あれし男の子の生先祝ふ

昭和二十三年五月十六日

昭和二十四年九月

音立てゝ近づく亀は蓮田より
物云ひたげに我を見つむる

マ元帥のメツセージを見て
昭和二十三年七月

戦ひに破れし枷もやゝ解けて
春日を仰ぐ日の本の空

昭和二十四年元旦

朝床にふと阿武川を思ふ

昭和二十四年三月

阿武の川ひらけ行く世の陽を浴びて
亀瀬につどふ群千鳥かな

偶成虎一首

庚寅元旦

どことなく虎のうそぶき聞ゆなり
心の底の谿深きまゝ

清水口を過ぎ岩田博藏先生を偲ぶ

昭和二十六年九月

家の内に湧き出づる水のいさぎよく
心しづかに世をすゞしけむ

松陰の住ひし跡に家居して
世を嘆きたる時もありしか

兼田功君の医院新築祝ひに

昭和二十七年三月

(医師)いつくしむ思ひに燃えて病む人の
友とも師ともなるべかりけり

田中助一君の防長医学史上巻出 版を祝して

昭和二十七年四月

心して蒐め集めし文宝
梓にのばす今日のめでたさ

萩俳諧史の扉に記して某氏にお くる

昭和二十八年十月

県素空公爵に貝と共に差し出したるも、此處に掲げたるもの
とは少しく異れり。
燃えさかる我願望に天地の
感応ありて成れるこの書

偶成

昭和二十九年元旦

我が記念古稀古泉帖つくらばと
夕餉のあととの老の二人は
思ひ立ちけり年の始めに

平和なる縁言

昭和二十九年五月

今日もまた無事に過ぎぬと縁言す
夕餉のあととの老の二人は

兼田君が招宴の席上永楽金錢と 共に披露したるもの

昭和二十九年七月

拓本紙しめせば浮ぶ金糸の
匂ひ嬉しや若竹の窓

尊き姿一首

昭和三十年一月

つゝましく親のみ旨をかしこみて
行末契る二人尊し
雪の固屋者妻手袋頭巾して
鉢で小木截る姿尊し

中津江古畑の三戸萬槌氏が乞は るゝまゝ

昭和二十七年六月

古畑のふるきことゞも探らんと

いくたかび來し老ひぬれど我

表彰記念盃にしるせる

昭和二十七年七月

思ひきや文のいさきの積れりと
再び市よりほめられんとは

三度世にはめられてけり撫子の

よき実結ぶと云ふにあらねど

父上が旧詠「色はまだ見榮あり

とは思はねど携へ歸る撫子の花

「に對してよめる」

昭和二十七年十一月

軒の巢は梅雨の湿りに冒されて

堺堀となりて声の湧くなり

残る歯の根ゆるぎ初めぬ黄水瓜の

種子噛みたるに痛み覚えて

指月山海原かけて立つ虹の

色やうつれる浜の小貝に

五色貝とは余が恣に命名せるものなり。五色貝の歌は嘗て山

志都岐公園

昭和三十一年四月三日

花志都岐きらびやかにも歡樂の
逃ぐるすべなしあはれ雀子

梅雨

昭和三十一年六月

軒の巢は梅雨の湿りに冒されて
逃ぐるすべなしあはれ雀子

黄水瓜

昭和三十一年八月

残る歯の根ゆるぎ初めぬ黄水瓜の
種子噛みたるに痛み覚えて

和田涉氏の賀宴にて

昭和三十一年一月

七十路の翁と見えずわだかまる
思ひもなくて世をわたるより
かゞやける君がいさきをのしるしなる
石ぶみ仰ぐけふのめでたさ

増野純亮氏東京転住送別会席上

昭和三十一年十一月

心して行きませ今は武藏野も

花の都となるといへども

年頭述懐

昭和三十二年元旦

生先は見守り得ねど嬉しくも

曾孫さづかる年は来にけり

恙なく年迎へけり老てなほ

物の調べに倦むこともなく

年頭言志

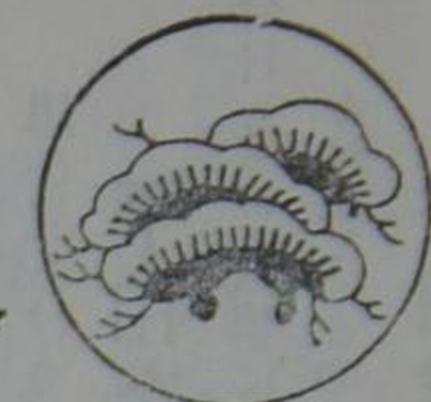
昭和三十三年

老いぬれど心の燈かたてゝ

好める道を照らしゆかなむ

曾孫抱くその喜びにおとろへも

心にかけず春を迎ふる



北汀俳句抄

冬五句

大正九年

惰氣醒ます師が一喝や玉霞

寒の水神鏡沈む淵とかや

風凍てゝ釣瓶きしるや山の宿

端座し居れば吹雪に明くる社殿かな

釣橋を行人渡るなり寒の月

長門峠初冬五句

陶窯の地相すべく初冬峠に入る

長 淵

大正十年

明け易き車窓や富士の巌かに

長門峠

探梅の鶯鳴すむ淵に来りけり

庭前小景

庭の石菖の紅葉となりにけり

若葉の書音

古瓦拓す書音の風の爽かに

暁鳥師来泊

雪の日の燈風呂や僧泊めて

途上即興

枯草に解き家の土を運びをり

堀内珍景

厨川山口図書館長の明倫図書館に於ける講話

昭和十二年一月

ストーブに達人の活語燃えさかる

水 仙

水仙花父の忌日に経を誦す

夏蜜柑籠の製作始まる

竹割るや夕風寒き裏の烟

堀内珍景

柵ぬけて逃げ行く豚や冬日和

県立萩図書館

古書探し書庫うす暗し霧冷え

某氏山口市宇野令より歸る

昭和十二年三月

囚はれの籠をとび立つ雲雀かな

勤王館地鎮祭

昭和十二年三月

砂に撒く五色の紙や春祭

水雨すや危崖に驚畏の声発す

岩固屋千疊敷

時雨るゝや岩固屋くぶる五人連

獅子岩

断崖の獅子木枯を吹き下す

天狗岩

ちぎれ飛ぶ寒雲高し天狗岩

滴り滝

新緑の滴り滝や朝朗ら

蟹瀬の滝

棧道の危きに賞づ滝若葉して

牛若山

幽淵奇瀑うす暗き崖青葉して

阿武川下り

杜鵑啼くや船に伝説の悲話をきく

藤 花

薰風や三溪の異趣見はるかす

藤浪の紫に小鮎釣る人や

短 夜

明け易き車窓や富士の巌かに

長門峠

探梅の鶯鳴すむ淵に来りけり

台灣より來れる近藤父子天津に向ふ

昭和十二年四月

山本博氏大井村にて元軍の碇石を発見す

強東風や元寇懨ぶ碇石

寒がれる南国人や花の朝

嶽山々頂にて尖り網笠茸を得

黒き茸獲つ春山の巖壁下

杉苗の畑に亀裂あり春旱

警笛ぞ春を狂へる夜半の風

住吉神社境内鶴塚亀塚

神城の鶴塚や藤原

川上村探古行

田植着の儘を案内や山の堂

善福寺

請ひて見る寺宝の古画や初夏の風

下上野にて古陶片を採收

夕若葉小川に泥手洗ひけり

萩港竣工の港祭

昭和十二年七月二日

変装がどよめきを練る夏の町

無花果

無花果や新涼を朝の皿に盛る

法鼓

第一卷 第一号

昭和三年三月二十六日

法鼓論策 はしがき

「法鼓」は萩佛教研究会が昭和三年三月創刊した月刊八頁の小機關誌である。萩佛教研究会は昭和二年七月岩田博蔵士井市之進田中真治八道弥七山本勉弥松田善衛の六氏が発起して作つた佛教研究の会で、次の主張の実現につとめた。

- 一、小なる宗派根性を排し、広く佛教の真生命を探求すること。
- 二、純眞な信仰を躬得し、生活の源泉たらしむること。
- 三、佛陀の精神を宣揚し、社会の浄化につとむること。
- この主張達成のため会員は活潑な活動を続け、萩の佛教界に大きな衝動を与へた。法鼓刊行十一ヶ年、その間余も諸友の驥尾に附して、諸名士より受けた訓諭、感得した経典の了解などを誌上に発表した。茲には其内より十八題を採録して当時の状況を追想する。

実踐躬行

愚鈍な性質を以て人に知られた般特比丘は「口を守り、意をおさ

は（一）勝てば怨まれ（二）負ければ熱中する（三）善友からは責められ（四）信用を失ふ（五）入獄の憂がある（六）盜心を起すようになる（七）六つの過失を挙げ、放蕩には（一）自身の不安（二）財産の不安（三）妻子の不安（四）世間の非難（五）苦痛に纏はれる（六）虚妄の言辞を弄するやうになると、六つの過失を挙げ、伎楽に迷ふには（一）舞は何處（二）歌は何（三）三昧線は（四）講談は（五）鼓は（六）太鼓は、など、常に心を奪はれ、家業は手につかず、財産は減るばかりと説き、悪友に親しむには（一）酒飲みになる（二）乱暴になる（三）虚言つまになる（四）他人の物を瞞着する（五）下品になる（六）好んで他人の過失を発くやうになると、六つの過失を挙げ、懶惰には（一）早いと云つて仕事をせず（二）遅いと云つてはまたしない（三）寒い（四）暑い（五）満腹だから（六）空腹だからと云つては仕事をしないやうにばかり理窟をつけると戒め説かれた。

此説法は頗る卑近な事柄を、列挙したにすぎないが、然し是を服務しさへすれば、容易く精神的、物質的の富を致すことが、出来るとと思ふ。

王政復古

昭和三年四月四日、海潮寺に於て、水上興基師は、無宗教者と有宗教者と題し、宗教の必要を高唱せられた。その内に小兒四五歳までは母親を頼りにし、八九歳までは父親を信頼し、十二三歳までは教師を最も尊信し、廿歳前後までは昔の偉人傑士を渴仰し、それ以上になると、完全なる人格者である神佛に帰依する、即ち

め、身に非を犯さず、かくの如く行ずるもの必ず度脱を得ん」の唯一偈を佛口より直接に再三授けられたのに感激し、懸命になつて、漸く暗誦することが出来た。佛は此の偈の義理に就て、身に三惡、口に四惡、意に三惡あるを説き、此の十惡業の起ると滅するとの所以をよく觀察すれば、三界の輪廻も、昇天の樂も、墮地獄の苦も、涅槃の悟も、皆こゝに縁由するを知るに到るべしと、妙法を説き聞かせられ、さすがの愚鈍比丘も、豁然として心が開け、阿羅漢の悟を得た。

愚鈍な比丘を輕蔑して居つた波斯匿王その他の人が、同比丘の現はした神通力を驚嘆し、唯一偈しか知らぬ比丘が、如何にして得道したかを佛に尋ねられた。そこで佛は、学は必ずしも多きを要しない、是を行ふのが最上である。般特はその義をよく解し、その精神をよく躬得して、身も口も意も、皆清淨なるを得たのだと答へられた。釈尊の教は陽明學と全じく、知行合一、実踐躬行にある。

損財の六患

釈尊は財産を蕩尽する左の六つを、損財の六患と名づけられた。

- 一、酒を嗜むこと
- 二、博奕
- 三、放蕩
- 四、伎楽に迷ふこと
- 五、悪友と交はること
- 六、懶惰

飲酒には（一）富の消費（二）病氣（三）瞋恚争鬭（四）世間の不評判（五）怒りがちになる（六）智慧の減退の六つの過失を挙げ、博奕に

宗教心を起こし始めると云はれた。人間の智識が向上するに従ひその慾望が漸次に向上するのは自然の傾向であり、單に人間同士の間に、行はるゝ道徳律のみでは、不満足を感じ、遂に絶対者を対手として、凡ての行動の規準を定め、金剛不壞の信念を樹立せんとするに至るのである。

死と云ふものを真面目に、考へさせらるゝ老人達に、宗教が必要であることは勿論であるが、人格完成と云ふ、宗教本来の目的より考へれば、活動能力の減少した老人よりは、青壯年の者に尙必要で、寧る幼少年時代より、正しき宗教的信念を植ゑ、宗教的情想を養ふことが更に必要である。

佛教は多くの宗教中、その教義の深奥、教相の整調等より考へ、最勝のものと考へる。此事は佛教に対する批難攻撃が、悉く当らぬと云ふことを話せば、略々諒解が出来ると思ふ。佛教は独善的であり、個人的であり、厭世的であり、消極的であり、非国家的大に善を行ふを勧める教であり、非国家的ななどは全然當らず尊王愛國の精神が漲つて居る。時代に適せぬどころか、大に興国の氣風を振作し、我邦の現状に對しては、最も適応した教である以上の如く吾人には、宗教と云ふものが必要であり、宗教の内では佛教が、最勝であるとする、次には如何なる方法を以て、佛教を知るかと云ふことが問題となる。多くの人は各宗各派の御祖師

様方を通して、仏教を見るのが普通である。ある程度までは、此方法が結構であり、又ある種の人々には、是が最良の道であるかも知れぬ。然しこれはどうしても仏教の一小部分を見ることがなり、従つて前述の批難攻撃が生じ易くなる。私は此見方よりは釈尊の真意を伝へて居る所の、諸經典によりて、広く公正に、お姿も精神も福寿円満な釈尊を、直接に見てゆくことが、最も必要であると信じます。即ち仏教の真意を覺らんとするものは、須く先づ釈尊に帰れ、釈尊に帰れと、絶叫するものであります。明治維新的政状を、説明する言葉を用ひますれば、王政復古であります。現在佛教界の状況は各宗聯立し、恰も封建時代、群雄割拠の状態であります。木村師の演題にもある通り、釈尊はまた覚王と申し上げます。この王様の宗教復古が必要なのであります。かかる見方をしてこそ始めて、仏教の真意の尊さ、偉大さが明かにされ、教化能力の萎弱衰退せる仏教が、茲に更生し得ると思ふのであります。

日本は仏教國であると云ふ、成程尊い多くの經典がよく保存せられ、又多くの寺院僧侶がありはするが、肝心の教義の不統一な事を考へると誠に外國に対しても、恥かしい思ひがする。井上円了博士は約三十年前己に、最新研究通仏教と云ふ書物の序に左の詩を寄せられ、仏教各派の態度に就て警告を与へて居る。

法門八万四千中

自有眞如一理通

各派相争昔時事

從今何得不和同

佛教界のことを、眞面目に考ふるものは、誰しも同感のことゝ思

余は先日樺牛高山博士著世界歴史譚第一編釈迦を通読した。さすがに文壇の雄である博士の文章、文彩燦爛として面白く、多くの奇蹟を以て終始する釈迦一代の事蹟を、実際に遠からしめず描写する手際は敬服の他はない。本誌に父子の再会と題し、成道後の釈尊が父淨飯王と面会する一節を載録したが、是を以てその大体を推知することが出来ると思ふ。淨飯王や故郷の人々は名声天に蟲く佛陀の帰國であるから、如何にその行列服装が堂々として華美であるかを想像して居つた。然るに帰り来るゝを眺むれば、一枚一鉢の見すばらしい乞食姿、あれが何不自由なく暮された悉達多太子の成れの果かと氣の毒な思ひをなし、又自分達も大なる失望を感じ、終に忿怒の情をも起こしたが、近づいてその端麗莊嚴、慈悲と智慧の光に輝く顔容を見上るに及んで、今更ながらその大徳に威圧され、不平不満どころか隨喜の涙を流すに到つた。かくて釈尊は父王及びヤスダラ妃等を教化せられたのである。

外観的には釈尊は故郷へ櫛轍を見せに帰つたのである。然し内面的には心の内に較ぶべくもない立派な錦を持つて居られ、是によりて父王王妃の煩惱を断ち、譬ふべくもない大功德を現はされたのである。

故郷に錦を飾ると云ふことは高位高官、身には錦繡をまとひ、物質的資材の豊かなを誇ると云ふ有様であるが、若し心の珠が外形にふさはしからず、その光がにぶれば、猢猻にして冠すと云ふ言葉通りになるのである。つらく觀するに現代人は滔々として此の渾流となるのではなからうか。釈尊が郷閑入の状況により、

ふ。私は仏教々学に關する智識は、浅薄であるから斷言を憚るが先輩の言に従ふと、普通仏教を大乗小乘と別つも小乘にも、大乗の精神が説かれてあり、此二つには判然と區別がつけられないと言ふことである。實際現実の人生を救済する活教訓は、寧ろ大乗心醉論者が輕蔑する小乘教即阿含經に、属するお經に多く見らるゝのである。釈尊が一代に説かれた一切藏經の間に、一貫せる教義が整然として存するのは、自明の理である。かく申すと諸君の内には、お前は多くの經典を普遍的に見て行けと云ふが、八万四千の一切經は、吾々凡人が一生かゝつても読みきれぬではないかと、云はるゝ方があらうと思ふ。若しかゝる論者の云ふ通り、仏教が難解のものであるならば、仏教は人間の精神を徒に消耗する文明の害物であると、私も云ふに躊躇をせぬ。然し近來研究方法が巧妙になり、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の五大部に属するお經にも、その代表的のものが抽出せられ、是によりてその大略が容易に、通覽せらるゝ様になり、更に少しく詳しく述べて良書も出版されてある。吾々は仏教はしかし難解のものでないと堅く信する。

私共は昨年の七月、萩仏教研会を起し、各宗の人々が僧俗とも相寄り、毎月一回会合を催し、三月よりは法鼓と云ふ機關紙を発行して居る。私の所論に疑問を持つ方、或は平瀬、八道両閣下及吾々をお信じ下さるゝ方で、吾々と意見の交換を希望せらるゝ方は進んで例会に出席さるゝことを希望する。

明治維新の發祥地である萩地に於て、而かも釈尊降誕と言ふ宗教界の最も記念すべき日に、以上の如く、仏教の王政復古を高唱し得たと言ふことは、眞に私の欣快とする所である。

故郷に錦を飾る

凡俗の者の愚見と、聖者の智見とが如何に雲泥の差があるかを見せつけられ、感慨に堪へぬものがある。実力を養へ、仏性を磨き出せ、在家の者のみでない、所謂僧籍にある人々も金闌を捨てゝ黒衣に返れ、祖師は紙子の九十年ではないか。

勤勉貯蓄

釈尊の教は本会創立趣意にもある如く、社会各般のことを細大漏らさず論述してるので、一部の人士が考へて居る如く、現実の社会に迂なるものではない。譬へば吾人に日常純益所得を四分之一を貯蓄する所か、日々の経費に追はれながらも、尙酒煙草は止められず、心の欲する所に従つて愉楽を趁ふの有様であつて、一朝事あれば生活の破綻を来たすのが当然である。

自己の生活が安定する様克己勉励、進んで社会に貢献する事は釈尊の教でなければならぬ。善根を供養することに努めずして、徒に法悦に酔ひ、自己満足を念とし、棚から牡丹餅式のうまい事を考へて居るが如きは、断じて仏徒の心得でない。

警

鐘

今日一般佛教界のこと云ふに忍びず、在家佛教唱道の河口師等は勿論、彼の南天棒老師すら佛教界の現状に憂想をつかし、どうしても革命ぢや、根底から改造せねば、真風を挙揚することは思ひもよらぬぞと、叫ばれて居る。

萩町今地延一氏は半年前神さりゆく愛児に因縁づけられて、熱心なる佛教信者となり、今又慈母を失はれて益々その道に精進せられつゝあるが、佛教界の現状に義憤を発せられ、大英断を以て古来の風習を打破し、慈母の葬儀万般は僧侶の手を借らず、同信者と共に自己が懇ろに読經供養して莊嚴に儀式を終了す。かくして節し得たる費用を以て、東京より懇々名士を招聘、講演会を開催する等大法宣布に努力せられしは、萩地人士の熟知せらるゝ処にして、本誌に掲載せる同氏の一文はその立場を辯明せるものに外ならず。同氏と同一信念に安住し居られたる母堂は同氏の心からの供養に就ては、地下に微笑を禁じ給はぬものあらむ。

大凡そ佛教徒とし死者のあるときは、必ず自分達の手を経るものと堅く信じて居つた僧侶達は、茲にしかも頗る篤信者より僧侶をぬきにして、葬式法事の出来ると云ふことを、如実に見せつけられては、意外の衝動を感じたことであらう。

然れど余をして見せしむれば、将来に対する建設的準備に着手せずして、今日直に寺院を破壊するを目的とするが如き行動を敢てするは些か早計に失す。幾多の警告があるにも却らず、少しも覚醒せないのは勿論僧侶の罪なるも、その茲に到らしめたるは、満足はせぬながらも現状を默認して、寺院を支持する門徒の無自覚に帰せなければならない。門徒が葬式や法要以外に本来の使命である精神的活動を要望すれば、僧侶としても發奮せざるを得なく

なる。目下の急務は寺院撲滅より寧ろ門徒をして佛教をよく諒解し、その崇重すべきを知らしむるにある。かくして共同的の説教所、葬儀場、墓地の建設等と相待ちて、佛教界が漸次に改善せらるゝと信ずる。

以上の如く論難すと雖、氏が今回とりたる思ひ切つたる行動は病膏肓に入つて度し難き佛教界にとりて、自他を啓発する意味に於て、止むを得ざる警鐘として敬意を表せざるを得ない。僧侶が生活を保障さるゝのに油斷をし、仏祖が眞意の宣伝に努めず、安閑として居るならば、同氏に共鳴する者が増加するに相違なく、自業自得とは云ひながら、自家存立の糧道が絶たるゝことになり、寺院佛教が滅亡する機運を醸成するのである。時は昭和維新僧侶諸君の猛省を促す。

婦人の奮起を望む

世人佛教をして因循姑息、厭世悲觀の教なりとし、その婦人觀は男子に比して劣等、済度し難きものと思為するものあり。何ぞ知らん。佛教は輪宝を理想し、獅子を理想し、頗る剛健の志氣を鼓舞する教にして、婦人に対しては、男子とは方面を異にする各自の天職あり、相互に尊敬すべき対等のものなりとなすを。釈尊は八歳の龍女が即身成仏を説くなど、此の主張を到る処に高調せられたり。彼の月上女經に於ける月上女は父雜摩居士が城中の貴公子連より脅嚇せられ、子女の行末を思ふの余り、憂愁に沈みたる際「慈心は毒杖に害せられざる處、水火も亦復漂然せじ」と剛毅なる意氣を歌ふて、力強き信仰を告白し、自ら進んで難局打開の衡に當り、端正花の如く、快活なる容姿を以て「我が身を觀よ、

真金の火色を帶ぶるが如し」と大衆に呼びかけながら、劉曉たる音楽、天女の如き妙舞、清朗なる讃歌を以て、欲火に燃ゆる貴公子達の心情を清淨ならしめ、以て仏陀の膝下へと導き行くが如き現代に於ても斯の如き教養豊かにして、志操堅固なる婦人の出現を要望せざるものあらざるべし。

現代婦人として仏教即釈迦の教義に親しみ、仏陀大慈悲の手に抱かるゝは婦人自身の為めにも、社会改善の為めにも最も必要にして、真婦人の資格としても必須条件なるを思はしむ。本会創立二周年其間熱心なる会員は、著るしく斯教に関する知見を広からしめ、法鼓誌上教義宣伝に微力を尽し來り、今復た本婦人号を発刊して、些か報恩の誠を致さんとす。然れども前途尚遼遠、同志諸君殊に婦人の奮励により、理想の聖教をして益々その威力を發揮し、社会浄化の実を挙げしめられん事を希ふ。

戦争と軍人精神

戦争の慘害を痛感する世界大衆は平和愛好の念に燃ゆると雖、尙実際問題として戦争の避くべからざるを思ふ。従つて今や戦争と倫理、戦争と宗教の関係が盛んに講究せらるゝに到る。此時に当り我が佛教が是に対する見地を明かにするも亦無用の業にあらざるべし。佛教は單に自己の安心立命を説くのみならず、王道を教へ、或は鎮護國家の精神を発揚するなど、社会各般のこと細大漏らさず論述せらるゝは、既に本会各員の熟知せらるゝ所なり。大薩遮經王論品に於ては転輪聖王及其他小王が平生の心掛を説き、進んで戦争の非常時に處する心得を詳論するも、而も正義の戦を敢行するは、福あつて罪なしと断定し、戦争是認の態度を鮮明に

す。然れども徒に侵略を事とする無名の戦争を是認するに非ざるのみならず、戦に臨んでは先づ次の如き三種の慈悲心を起すべきを教ふ。

第一、反逆王は自ら慈悲心なく、人民が慘殺せらるゝことあるもその保護に任せず、故に我は武力を以て、之等非道の者を膺懲し人民の苦惱を救はざるべからず。

第二、手段を尽して逆王を降参せしめ、刀に刲ぬらずして平和の克復を計ること。

第三、方略を回らして逆王を生擒にし、以て戦争を終結せしむべし。

斯の如き大慈悲心の実現に努め、而して後に旗鼓堂々衆兵、馬兵車兵、歩兵の四種の兵衆を率る、配兵の法を巧みにして戦陣に臨む。部下の兵卒に対してもは平素より、次の如き軍人精神の養成に努む。

- 一、王の盛徳に対して卑怯の行をなすを恥づること。
- 二、王の威徳を畏敬すること。
- 三、仁義の軍に参加し居るを覺り、王の壯団に翼賛の意を表すること。

四、常に国王の鴻恩を思ひ、義勇奉公の精神を發揮すること。

斯の如き精神教育が徹底すれば、士氣自ら振ひ、兵衆は嚴重に任務を守り、倦怠の心の生ぜず、怯懦の行をなさず、勇猛に戦闘に従ひ、戦へば必ず勝つの結果を得べし。此際人命を損ずると云ふ軽微の罪科は存すべきも、其のが為め苦惱の応報を受くることなく、實際前述の慈悲心を有し居れば少罪すら受くることなく、否福あつて罪なしと、断言せらるゝなり。上述の如く正義の戦に對

する仏教の教義は誠によく我国の人情に融合一致せるを見る。即ち大和民族が精神文化の発達完成には仏教思想が寄与することの多く深きを思はしむ。

宗教的儀礼

阿ハツ教に於て釈尊は僧侶の行儀としての除髪、袈裟、鉄鉢に就て左の通り、説明をして居らるゝ。鬚髪を除くは貪愛の迷を棄てるを表し、この無飾好の形容は世の女子をして欲情を起さしめず自分も他に欲情を起さぬ為に行ふのであり、僧侶としては最も大切で、終身守るべき戒律である。袈裟は正しき勇猛軍の戦勝の旌旗であり、是を被る者は心の垢穢結縛を解脱して、世間の劣等なる欲念を捨てた旌表である。鉄鉢は応器と云つて、その人の食料に応ずるだけのものを得て、それ以上に貪ばり得ない為に設けられたるもので、道を修する人の用ゐるに適し、身の欲を約省して簡易なる生活をなし、而して非義は受けないと云ふのである。

斯の如く思ひをひそむれば儀礼が如何に有意義で、貴重なものであることがわかる。

先月本会の例会に於て八道大淵氏は熱心に信仰談を試みられ、その内に宗教的儀式即ち行者が白衣を被ること、合掌、仏前儀礼唱名念佛等の必要を体験を加へながら力説し、是によりて自己の精神を緊張し、又他人に対しても好影響を及ぼすもので、純真なる信仰を躰得するには必須のものであるとせられ、是に反して彼の僧侶にして美髪美髪を蓄ふるは、如何にも不似合で、不愉快なものであると痛言せられた。余も至極同感で数ヶ月前、帝都に於ける稀有の大葬儀に参列した際も、この感を深くしたのであつた

一世を導くの重責ある大導師にして、教祖釈尊の慈訓に負くは、如何なる惡因縁に依るか、自己が属する一宗派の開祖を信頼するの余り、それ以上更に深く広く、教祖の教義に親しまぬ結果ではないかと、憂うるのである。

不請の友

友人黒瀬三如君は昭和五年四月鶴見総持寺に参拝し、三松閣にて「禪の安心」と云ふ小冊子を求め、車中にて一読したるに、感ずる所多ければとて、同教の士に分たんとし、更に十数冊を注文し内五冊を小生宛送付せられた。喜びを分たんとする友の厚意に感激しながら、余は速刻通読した。此書は新井石禪師の御遺訓、御臨終の模様、熱心なる布教の御態度等を誌したものであつて、後輩を裨益すること些からず、約四年前萩地に當錫せられたる際、親しく高風に接したる余等は特に感慨の禁じ能はざるものがある。余は四月の例会に於て解脱と活動と題し、「仏教之精隨」に拠りて感想をお話し、その内不請の友に關し一言を費した。即ち向ふ

く飲んで帰つてしまつた。

禪師は更に雲洞庵の末寺中関係の深い十四ヶ寺の住職を招き「毎月一回の法話会を開いて欲しい、私は握飯を持つて行くから、少しも御世話はかけぬ。たゞ法話の聴衆を集めて欲しい」と依頼を致された。一同喜んで承諾するかと思ひきや、別室で相談をさせて呉れといひ、その結果「折角の御依頼であるが、御引受が出来ぬ」と云ふ。何故かといへば「法話の会を開いても、聴衆は集らぬにきまつて居る。総代世話人その他を特に案内すれば、寺のものいりで二升や三升の酒は飲まれてしまふ、徒らな物いりは困りますから」といふのであつた。

かようにすべては失敗に了つた。然し禪師は尙絶望されない。今度は少し調子をかへ、人を集めるのは町に限るとあつて、六日町にある会場を借り受け「印度哲学研究会」といふ名目で会員を募り、月金五両の会費を徴収することにしたが、是も成功せずに了つてしまつた。

禪師は尙屈せられぬ。六日町の弘長寺と云ふ時宗の寺を、席料壱円五十両で借り受け、三日三晩の連続講演会を開かれた。他宗僧侶の同情で精一杯聽講勧誘をして貰つたが、何の効果もない。しかし説教も「門つけ布教」も何等効を奏せず、仏教の話を承はらうとする人は、上田村にはなかつたのです。

禪師は役僚の言を聞き、寺の世話人全部を招待し、午餐を出しそれに因みて講話をされようとした。然しこの「押しかけ説教」も「門つけ布教」も何等効を奏せず、仏教の話を承はつても誰一人来ない。五時近くなつて漸く四人の世話人が顔を出ましたが、勿論講話をきく気があつて来たのではない。酒をたらふ

禪師は尙屈せられぬ。六日町の弘長寺と云ふ時宗の寺を、席料壱円五十両で借り受け、三日三晩の連続講演会を開かれた。他宗僧侶の同情で精一杯聽講勧誘をして貰つたが、何の効果もない。隨身の人々もすつかり失望してしまひ。「縁なき衆生は度し難し」と見切をつけたが、禪師ばかりはそれでも失望せられず、それのみか聴集の集まらぬのは、自分達が仏の子たる本分を全うせざつた。この連續講演会は不成功ながら月一回行ひ、六ヶ月に及んだ聴衆と云へばお婆さん達二三十人が漸く出来たのみで、禪師によりてみ仏の声をきく人が一人もなかつたのですが、禪語に「南山

に鼓を打てば、北山に舞をなす」と云ふ如く、偶々六日町へ来会して講演を聞いた眼科医の茨木政七氏は、その熱誠に感激し、我れ起つてその化を扶げんば、誰か敢てこれをなさんと、所謂「仮の一人子」の信念を発得し、全氏の住地塩沢町に於て有志を募り、百万手をつくして町第一の大寺長恩寺で禅師の大講演会を開き、始めて本堂より前庭まで聴衆を以て埋めると云ふ盛觀を呈したのであります。爾後到る處百千の渴仰者を集めざるなき道晉を得るに至られたのであります。

これは禅師の行動のたゞ片鱗を示されたのであるが、禅師が如何に仏子としての強き信念を持つて居られたか、使命に忠実で、本務に覚めて居られたかを拝察し、真に驚嘆する次第である。一時は何等効果の見るべきものがなかつたとしても、かゝる不撓不屈の精神は天下の耳目を衝動せしめずにはおかぬ。やがて遠からぬうちに一宗の管長となり、大陽真鑑禪師の徽号宣下の恩命を蒙れるは、誠に宜なるかなである。

尊き更生

本会の創立趣意書に、吾人は仏陀の全意識を表現する総合的仏教觀を要望すと述べ。本誌創刊号には、吾人の主張として、仏教々義の探索、真信仰を躰得して生活の源泉たらしむること、大法を宣揚して社会の浄化に努むることを挙げ。爾後四ヶ年吾等同人は微力を頼す、些か此理想に向つて進みつゝあつたものであります。

現代佛教界の革新の要あることは、從來諸名士より叫ばれて居りますが、その多くは自己の立場を擁護して、漫然一つの主張を述べる有様で、隔靴搔痒の憾みがあつたのであります。然るに近時

本会創立趣旨に照合して、頗る快心の事が二つあるのであります。一は宮沢英心氏の所論行動で、本誌に連載して居る通り、日蓮主義の旧教を脱出し、人間釈迦を信仰の対象とし、日々誦誦の經典としては仮遺教經を採用して居られます。二は新興仏教青年同盟の創立であります。是に関しては小高與吉氏が、先月例会で述べられた如く、從來の青年仏教連盟が更生したもので、一切經を依経とし、題目誦唱を廃して、その代りに南無釈迦牟尼ダーヤと唱ふることを申し合せ、本年秋尊降誕会を期して是を実行せんとするものであります。仏教を見るに釈尊を中心とすることは、宮沢氏と同様ですが、本尊としては一層洗練され、理想化されたる久遠の仏を念ずると云ふ所に相違があります。此二者とも万人を承服すべき新世界を創造せんとするもので、その理想のためには、六百年膠着したる思想の旧衣を脱し来れるもので、誠に敬服の他ありませぬ。両者は日蓮王義系統の人であります。但宗派の方々も斯の如く、自派に於ける欠点短所をかなぐり捨てゝ、眞に大法の為め、現代人救済の為めに、更生せらるゝならば、是等進みたる、新仏教する人々によりて、時代に適応したる仏教が確立し完成せらるゝに到ると思ふであります。

就職難、失業難、生活難と世相は益々陥悪に陥り、從來の如きボンヤリした考へでは、人間としての安心がつかなくななり、一般人特に青年の間にも、よき宗教を求むる氣配が漸々多くなつて來ました。將に伝道の秋、此好時期に仏教徒が徒に旧套になづめる説教儀礼を墨守し、居眠をして居つては、折角の宝珠も時代より棄捨せらるゝ事が、愈々明瞭であると思ひます。仏教は我執を去れよと教ゆる教であります。各宗本山を左右する教界の權威者諸師

よ、願くは猛省一番、世界に誇称すべき一大施の樹立に精進せられんことを。

國民更生運動

齊藤首相が最初の地方長官會議で、憂国的熱情を以て、國民の自力更生を高調し、非常時日本に處する國民の自覺を促し、依頼心を排撃し、弛廢の氣風を一掃せんと計られた。此考へが具躰化し國民更生運動と銘を打たれ、本月一日首相のラヂオ放送によりて天下に明宣せられた。その主意及綱領は別配の通りである。主張の緊要適切なるは勿論であるが、吾人はその意氣の壯なるに深甚の敬意を表するものである。

自力更生の標語に関しては、色々と批評があるが、兎も角各方面に影響があつた。一例を挙ぐれば真宗内の仏教濟世軍では、真宗の特徴である「他力本願」の字義を、此際簡明に説明表現する必要ありとし、種々討究したる結果、是は「無我之力」「仏力」「内省せられたる自己の力」の意味なれば、今後は時勢に適応すべく、是等明白なる文字を用ゆることとなつたと報ぜられて居る。真宗内に於て絶対他力の語を如何に解釈し、如何に用ゐ様とも、余等は餘り多くの関心をもたない。我等同人は人間釈迦を中心に仏教を強く正しく、現実に即したものと考へ、個人の更生と社會の完成を常に希ひつゝあるものであるから、吾々は平生の此主張を更に宣揚すべく一段の努力をなすことが、今回的大運動に参加する所以であると考へる。本運動の効果あるや否やは、運動の中心となる内務省や府県に於ける諸団体が、眞に自ら更生の意気燃えて、政治の净化、選舉の净化等を実行し、以て國民指導の大

任を果たし得るや否やに係る。同志諸君と共に勇奮を期する次第である。

運動の主意

國難日本の叫びを聽くこと久しう、しかも是が打開を見ざるに今や國を挙げて未曾有の難局に逢着、非常時をもつてするに至つた。だが我等國民は挙手、傍観して自滅を待つが如き意氣地なき民族ではない。新興日本の建設へ、これこそ九千万国民の意氣を躍動せしめ、不撓不屈の精神をいやが上にも挙揚高調せしむるものと信する。自ら内に燃ゆる旺盛の意氣、万人手を携へて進む共同の努力、これこそあらゆる難関を突破する唯一の原動力である。今窮迫せる時局に直面し、その匡救予算の実施と相併行し、この精神に基き、新に綱領を掲げて全國教化機關一齊に蹶起し、國民更生運動を敢行せんとするものである。

綱領

(イ)立憲忠君愛國の本旨に基き、公民としての自覺を喚起し、特に選舉の浄化、自治の確立に努むること
(ロ)依頼心を排除し、刻苦忍苦の修練に堪へ、自力更生の漸漸たる氣風を養はしむること
(ハ)産業の經營を改善し、消費の合理化を計り、以て新興生活の基本を確立せしむること
(ニ)社会連帶の意識を明かにし、共済力の美風を助長し、特に郷土聚落の振興に努むること
(ホ)弛緩頹廢の氣風を掃蕩し、緊張努力の精神を振起し、特に官公吏及び教育宗教に從事するものは自己の使命に鑑み、卒先奮起に努むること

（）経済生活の道徳的意義を明かにし、教化の運用をして国民の実生活に即せしむること。

男女青年諸君へ

近來教育家の間にも宗教々育の必要が叫ばれる様になりました。是は今までの方針では精神教育の上にあきたらぬ所があることを物語つて居ます。宗教と云へば、病弱者か老衰者に必要で、元気盛んに活動する者には必要であるかの如く考へられます。是は大なる誤りであります。社会的見地よりしても老衰者よりは、世務に貢献しつゝある青壯年者に宗教的信念の肝要なることは勿論であります。唯青年諸君は日々教へ込まるゝ学術技芸の多くに逐はれて、この方面を顧る暇が甚だ少いのであります。是は人間の価値を定むべき、徹底した心の修養がおろそかにさるゝわけで誠に不幸なことであります。宗教の内でも仏教は教義が最も深遠で、進取積極的であると吾々は考へ、興國の氣分が横溢する現下の我国に於て、青年諸君の信奉するに最も適して居ると信ずるものであります。仏教は死後の事や夢幻的の事に終始するのではなく、最も現世的で実践的なものであります。諸君此説に尙疑があるならば、一夕時をとつて大に語らふではありませぬか。

日本仏教の確立

明年の仏誕二千五百年を記念すべく色々の事業が提唱せられて居る。夫々好き思ひ付であるが、余は是等の内にても日本の仏教の確立を絶叫して居らるゝ井上哲次郎博士に深甚敬意を表する。是れ實に余等が持論として多年翹望し来つた事であり、是が幾分で

も成功の道を辿るならば、駄馬に鞭ち、縁の下の力持ちとなつて大にその計画を翼賛したい熱意に燃えて居るからである。是は大事業であり、一朝一夕にいかぬとしても、是非此機会に着手したいものである。同氏の意見大要は次の如し。

仏誕二千五百年を一紀元として、仏教の立場に一大革正を図り、日本の仏教を確立するといふことは、最も有意義な事業であり、また現代日本の実状から見て、最緊要事であると云つてよからう。

仏教の教理の深遠広大なることは、今更喋々を要さないが、何分二千年以上を経過した今日から見ると、その当時とは餘程社会の事情も異り、人類の知識も進歩して來てゐる。従つて今日の文化、今日の知識をもつて、仏教をもう一度見直してかゝらねばならぬ。若し私迦が今日に生きてゐたならば、仏教の立て方は決してあの通りではないに相違ない。その根本精神に於て變りはないにしても、その説き方、立て方、教化方法等はもつて現代に即した方法をとつたであらうことは、疑を要さぬ。

現時の如く日本が世界の檜舞台に上つて、やがて世界を指導する立場に進みつゝあるの時、恰も仏誕二千五百年祭を迎へるといふことは、なかなかに意義深いことであるから、我日本の仏教徒は、この際蹶然起つて日本を主とした日本の仏教の確立を図り、殖民地は云ふに及ばず、広く世界各国に對して布教宣伝すべきである。仏教徒をして單に印度をその発祥の靈地として慕はしむるのみでなく、今後は寧ろ日本を新仏教の興隆地と仰がしむるやうに、立場を変へなければならぬと思ふ。

宗団の窮況

宗団に於ける多年の因襲は何時の間にか、祖師の日常とその教義に遠ざかつて居る場合がある。そこで若き学徒は己が属する宗派の祖師が教法を正しく護持し、正しく宣伝せんとしても、宗団の現状はそれらの手足を縛つて自由の行動を許さない。見苦しい宗団でも、その宗団を離れては、生活出来ないことになつて居るので、革新分子が擡頭せんとしても、何時しか宗団の魔力によつて引摺られて行く。斯の如くして宗団内よりの革正は百年河清を待つが如しである。是はどうしても外部より刺激を与へて、覺醒せしむるより他に良き方法がない。その一としては、斯の如き封建的な宗団は政府の力によりて左右するのが最もよいと論ぜらるゝのである。即ち近来宗教思想とその表現に対する政府の監視が敏捷になつて來て居るが、尙教團の財政方面と行政方面に充分な監督が必要だと云ふのである。

その二としては信徒大衆が教義に目醒めて、その支出する淨財が果して宗教を活して居るか、或は反対に宗教家を地獄に落す所業となつて居るかを批判すべしと云ふのである。宗教は阿片なりとよく論ぜらるゝが、實際無批判な信徒の喜捨は、全く阿片的であると云はれても、辯解が出来まい。若し批判の結果、その淨財が罪悪を醸すこととなる場合は、断然としてその糧道を絶つべきである。是によりて見苦しき宗団は倒れ、宗教を喰ひ物にしつゝある一部の僧侶は困るが、眞の宗教は却つて蘇り、教義の宣揚と信仰に生くる僧侶は大に社会より認められ、尊敬せらるゝに到るであらう。斯の如きことを今更述ぶるのは、先般萩地にて宗団の

圧迫によりて、その自由意思自由行動を束縛せられた研學の僧侶があつたからである。

汎太仏青と県仏社業

本誌には第二回汎太平洋仏教青年大会と山口県仏教社会事業協会の記事を載録したり。汎太仏青は七月十七日より廿三日に到るまで東京及京都に於て開催せられ布哇、シャム、満洲国、カナダ、南洋、台湾、セイロン、印度大菩提会、マレー、ビルマ、印度ヒンズー教、印度大乘佛教、シンガポール、ジャバ、中華国、亜米利加、日本に於ける代表者六百名が会合し、仏教の人類的使命と現下の國際危局に當り、相互の親善理解に一大寄与をなす。その決議の如きも仏教の本質を宣言し、仏青の指導原理を決定し、正法の世界へと一路邁進するその勇姿、欣快に堪へず。更に世界平和、人類平等の大理想に向つて忌憚なき意見を發表し、聖蹟尊遷の意向を表明するなど、仏徒近來の痛快事にして、万丈の氣焰を吐くものなり。

是に比すれば県佛社業は県下僧侶の自覚に依り、会費制度を以て成立したりと雖、その事業の多くは門徒或は同情者の資金にたより、官憲の援護に待たんとし、其意氣の上がらざる、その規格の微々たる雲泥の差あるを思ふ。然れども從来進んで事業をなすに怯なりし一般僧侶を連繫して社会事業に精進せんとする、先づ是によりて協調の精神を發揮し県下佛教界の面目を新にせんとするものにして、漸進の一関を越ゆるものとして慶賀する所なり。志は須く大なるべく、理想はよろしく高遠なるべし。されども実行のそれに伴はざるあらんか、千万の宣言決議も畢竟無用の長物

のみ。一小社会事業と雖、その実施如何によりては、佛意宣揚は勿論、真に世道人心を裨益する処多かるべし。唯その志望の大きな如きして而も実踐の見るべきものなからんか、徒に世人の嘲笑を買ひ、僧侶が財の軽重を問はれんのみ。國際的熱情に燃ゆる有識の僧侶諸君も、地方に在つて直接民衆指導の責にある僧侶諸君も、共に目的貫徹に向つて邁進せられんことを。至嘱。至嘱。

全日本眞理運動

近來ラヂオの聖典講義や、新聞紙の宗教ページ等の影響で、宗教的氣分が頗る高まつて來た。そして是等の重要な役割をなしつゝある新進の仏教学者友松円諦、高神覚昇、梅原真隆等の発願によつて、全日本眞理運動社なるものが設立され、佛教思想を基調とする社会淨化の大運動が起される事となつた。事業の内容は種々あるが来年一月よりは「眞理」と称する雑誌を發行すると云ふ。我國佛教界の現状に厭き足らないと云ふことは、少しく心ある人の悉く考ふる處で、教義も釈尊主義の下に統一が出来ないだらうか、教化の方面にも新機軸が出せないだらうかと考ふる人はたゞに吾人のみではない。今回起つた友松氏等の全日本眞理運動は現代社会を佛教主義化する運動で、又佛教そのものを現代化するにあつて、實に本会設立の主義主張にピツタリ合ふものだ。吾人は斯の如き全國的運動の勃興を久しく翹望しつゝあつたので、誠に欣快に堪へない。

「法鼓」終刊に際して

昭和二年七月余等同志は、創立趣意書にもある通り、佛教を讚嘆

萩文化卷頭錄 はしがき

「法鼓」の廢刊とともに「萩文化」が發刊せられた。萩文化の母體である萩文化研究会は福田彦助、土井市之進、古屋武助、市川一郎、河内才三、津守馨、久芳庄二郎、山本勉弥の八氏が发起で河野通毅、山本、堀田断藏、河内、大村武一の五氏が世話人として發足した。後には河内、大村両氏の代りに田中助一氏が加はつた。萩文化に發表した余が調査研究事項の多くは、萩文化叢書の内に収録したが、茲には其以外のものゝ中より、主に卷頭に掲げた余の主張感想に関するものを摘録した。

萩文化研究会創立趣意書

防長精神の播籠たり、明治維新の發祥地たる萩地、豈に精神文化の世に伝ふべきものなからんや。三韓と相対し、長北の大河阿武の河口に占拠し、自然の港湾を形成せる萩地、豈に古代文化の探るべきものなからんや。暖流寒潮交々至つて魚族の豊富を誇る阿古の海、珍魚奇貝の採るべきものなからんや。斧鉛の跡到ること少き指月山、熔岩累々たる笠山、珍草異木の見るべきものなからんや。



尙人より惜しまるゝ時、同人の間に於て仏教々義宣伝の熱意の稍々下火になつた今日、又更に別な方面に希望が燃え盛つて「萩文化」を發刊せんとする今日、本誌を廢刊するのは將に天理に從ふもので、全く時を得たものであると思ふ。然し余等はかかる種類の小誌は萩に必要だと云ふのではない。余等が最早、統合得ないと云ふまである。萩には立派な仏教団もあり、又青年で、布教に熱心で、教界に尽さんとする有為の僧侶諸君も居らるゝのである。各寺院で絶えず行はるゝ講話の梗概だけを載するとしても、記事はあり餘る程あると思ふ。余等が唱道し來つた宗派宗教は祖師へ、仏教は釈尊へ帰れと云ふ意味のことが宣揚され、仏法報國が仏教團の諸君によつて実現され、機関誌發行にまで及ばれんことを希願して止まない。茲に本誌記事の總目次を添え、先づかゝる小誌としては芽出度く終を完うする此の際、多年本誌のため直接間接に恩恵を与へられた先輩及友人諸君に深甚の謝意を表します。

近時郷土研究の風潮は各地に普からんとし、史実を闡明する他、風俗、産業、博物或は考古の方面等一般文化の変遷発達の跡を探り、以て地方開發の資に供せんとする傾向あり。殊に萩地は伝統三百年、防長二州の政治的中権にして史蹟、名勝、天然記念物些からず。自ら他地方に比し、特異の郷土色を有す。斯く環境に恵

まるゝ他、近來人力の之に加はるあり。既に田中博物館成り、近く勤王館も建設せられんとす。是等諸館に陳列せらるゝ材料につき、或は各所に散在する資料につき、説明研究を載すべき機関誌を有することは、萩文化を助成する所以にして、日本精神の高揚郷土愛の叫ばるゝ今日、萩としては適切緊要なるを信す。茲に機運の稍々熟せんとするに際し、同志相図り左の要項により、萩文化研究会を設立し、小機関誌「萩文化」を発刊せんとす。大方の諸君吾人の主旨を贊同し、奮つて援助せられんことを。

昭和十三年四月

月性上人を憶ふ

月性上人は清狂と号し、周防国遠崎村妙円寺の住職である。幼時剛巧ではあつたが、書を読み、字を習ふことを好まぬので、母は督課甚だ厳なるものがあつた。清狂大に感悟し、遂に学問に専念する様になつた。かの人口に贈炎する「男子志を立てゝ郷閑を出づ、学若し成らざんば死すとも還らず、骨を埋む豈に墳墓の地のみならんや、人間到る處青山あり」の詩は郷里を出づる時に作つたものであるが、この大決意があつたればこそ、宗教家として、学者として、志士として、立派に一家をなし得たのである。

上人に就て学ぶ点は多々あるが、吾人の最も敬服するのは識見の卓抜と感化力の偉大である。宗教的に儒学的に鍛錬を経た上人は、権勢を恐れず、威武に屈せず、己が身に災害のふりかゝる事などは眼中になく、直情径行、己が言はんとする所は云ひ、思ふ所は行つて居る。例へば安政三年春には藩主に封書を上つて毛利家が勤王討幕の首唱者たるべきを切言して居る。十二ヶ年後には

錦旗は東征して幕府が亡びたのであるが、当時は尚長藩の志士達も幕府の忌諱に触るべきかゝる建言には躊躇をしたのである。又同年十月には光沢本願寺法主の需めに応じ、護法意見封事或は一大論策で、基督教が我国に害毒を流した実例を挙げ、かかる異思想に対しても、思想的に対抗策を講ずる要ありとし、当時の仏教界を革新し、仏教を以て士気を振起し、民心を強固にすべしとなして居る。時弊を匡救し、理想を顕現せんとする、その卓見熱意には自づと頭が下る。この封書に因るのであらう、文久三年には本願寺より全国末寺に、達書が發せられ、僧侶も門徒も、身分相応に、勤王報國の為め、心力を竭すべきを諭示されて居る。上人が壇上に立つて外国の侮を禦ぐべく、所謂銃後の覺悟を説くに当りては、舌端火を吐くの思ひあり、その至誠懇切、人の肺腑を貫き、萩松本妙安寺で説教のあつた時も、婦女子は争つて髪飾りを献納し、無学の獄卒すら感奮して國に報ゆるの念を起し、松陰先生をして、その法話効力の偉大なるを驚嘆せしめて居る。時難に際会して、海防僧、勤王僧と呼ばれるこの傑僧を偲ぶの情切なるものがある。

廻瀬條議

えしむるものあり、三説落涙万行袖を満たしむるものあり、その懦夫をして立たしむるのは憂國志士の壯烈なる志氣と言動となり、其の切歎扼腕せしむるものは皇室の式微に代へて幕府の專恣横暴なり、其の落涙滂沱たらしむるものは即ち概世志士が憂憤痛苦の心情なり、而して玄瑞の剛毅敢為の性情紙上に勇躍し、嚴然起ちて満天下を睥睨し、正義に弓曳くものは我敵なりとし、公義の犠牲となりて朝勅に酬ひ奉らむとする玄瑞の風姿眼前に鬱鬱たるものあり。恩師吉田松陰の節義を慕ひて義士頤彰の論を以て君公に忠諫し、殊に幕府が皇室を蔑ろにせるを憤り、その僭越より成れる國際条約を破棄して日本帝国には幕府の外に二千五百年來といふ大事を海外の諸国に知らしめ、一旦彼等を我國境より打ち壤ひ、彼等をして更に改め礼を篤ふし、以て正式の条約を約せしめなば、外夷の屈辱を免がれて國威は海外に發揚せられ、而かも世界の大勢に鑑みて彼等のために防守の位置に立たんよりは、寧ろ吾より進んで諸海外に國民を移し更に使臣の官舎を建てゝ國際外交に當り、大に國威を伸張すべしとなせるものにして、松下村塾の尊王攘夷論は即ち攘夷鎖國にあらずして、先づ我國防を完備し、然る後大に國土を開放し、我も亦進むで歐米に航すべしとすもの、實に今日の開國進取の國是こそ即ち松下村塾の定論にして、之を以て全藩の帰する處たらしめむとせるものなり、嗚呼千古の大文章とふ謂べき也。

決死の覺悟

一哉儒夫をして立たしむるものあり、再読切爾扼腕の躍るを覚

元治元年八月徳川幕府は蛤御門叛乱の罪を糺すべく征長の師を

椿水曰

第一條 本藩正邪の辨を明かにし、士風を興起し、節義を鼓舞する事、天勅を貫き夷狄を制する基本たるを論ず。
第二條 幕吏夷狄に恐嚇せられ重き勅諭に背く事、天地不可容、逆無道に付、断然明白に其の罪を糺すべきを論ず。
第三条 天皇夷狄の大恩を御宸寔被為遊候大御心を体し、午歳被仰出候勅諭稟然相貫候様何處までも尽力すべきを論ず。
第四条 午歳の天勅を貫き、幕府の奸吏を嚴刑に処し、下田条約に引戻すべきを以て、越前一橋に其の実功を督責すべきを論ず。
第五条 戊午違勅之罪明かに相成候上は、二百餘年、寅恭被為覲候事を相糺し、皇室尊崇君臣之分を正ふするを論ず。

第一条に於ては先づ藩にて勤王討幕の大策に反対するは邪論なりと断じ、邪義を唱ふるものを罰し、正論家たる松陰先生を顕彰して、その靈を厚く弔ふべきを論じて居る。全条通読の感想は福本氏がよく表現して居られ、また一指を加ふべき要がないから、茲に同氏の文を載録する。

起したが、此時毛利藩に於ては藩論が岐れて二つとなつた。一は武備恭順、二は謝罪恭順である。一は進取主義をとる正義派の唱ふるところで、大義名分に立脚し、大義の為めには二州を焦土とするも止むを得ず、天廟に対する忠節の為めには、生民悉く斃るゝに至るも止むを得ずとするもの、即ち禁闕を犯したる罪に対しても謝罪して恭順の意を表するも、尙幕府が不条理に苛酷な要求をすれば義の為め一戦を交へんとするものである。二は保守主義をとる俗論党の唱ふるところで、大義名分は立たずとも、屈辱を忍んでも、毛利家の宗廟を保全し、毛利藩を維持することが、毛利家先祖に対する忠義であるとするもの、即ち追討軍に対して勝利の見込がないから、平に謝罪し、幕府の命するまゝの条件、例へば君公父子を隠居とし、領地は長州一ヶ国に削らるゝことあるも、毛利家の家名さへ存すれば、それでよいとするものである。

藩王慶親公、世嗣元徳公は特に召し寄せた井上聞多の建議に原づき、九月二十五日午前十時より、一門家老を始め政府の諸員を悉く山口政治堂に召集し、君前で大評定を開催した。この君前會議で当職家老毛利伊勢、宍戸備前、毛利能登等は謝罪恭順を力説し井上聞多、家老格清水清太郎等は之に対抗して武備恭順を唱へた一家老が「凡そ勝算なき戦を起すは武道の本旨でない、聞多は幕軍と戦ふて勝てると思ふか」と井上に反問したのに對し、井上は毛利家の名譽の為め、御皇室の為め、我帝国将来の為めに決死の覚悟を以て、悲壯なる感概を述べて居る。甲論乙駁、一同は昼飯もとらずに会議を続け、午後四時になつた頃、敬親公は機を見て決然と「諸士の議論は克く徹底した、既往の事は繰り返して論ずるも今日の場合益ないこと、余は武備恭順を以て國是とする、一

同左様心得て呉れ」と断乎たる採決を下された。斯くして一応は大方針が決したのである。然るに其夜元徳公より賜つた晩餐を終へての帰途、井上は暴漢に襲はれ、本人も手まねで介錯を求め、兄も助からぬものなら、早く介錯をしやうと思つた程の重傷を受け、更に其翌曉、吉富邸に仮寓して居た麻田公輔の自刃があつた箇様な出来事の為めに形勢がまた一変した。

當時俗論党的壮士団は萩より大挙して山口に來り、円龍寺と平連寺に集屯し、盛んに威勢を張つて居た。十月になると正義派の鋤々たる士は全部役御免となり、要職は多数の俗論党によつて占めらるゝ様になり、文久三年山口に移された藩政府は再び萩に移され、十月二十七日藩主父子は山口を引上げ萩に帰られたが、謹慎して他出が許されぬ状況であつた。山口下関等に駐屯して居る諸隊は殆んど正義派であるが、村塾の俊豪みな外にある關係で、萩は実に俗論党的巢窟であつた。幸に高杉晋作の快挙に端を発し、俗論党が驅逐せられ、萩も正義的に覚醒し、翌元治二年二月藩論統一が指月山下に成就したのは誠にお芽出度いことであつた。

然し今日萩が俗論跋扈の地であるか、正義横溢の地であるかを思ふと、思ひ半ばに過ぐるものがある。萩人士は義の為めには斃て後止むと云ふ松陰先生の真精神をもつともつと能く奉戴せなければならぬと思ふ。

松門の猛氣

巳卯年頭の少閑、余は「東行先生遺文」を通覽し、高杉先生の面目を最もよく表現せる先生の語録を求めて二を得たり、一は萩文化第二卷第二号の巻頭に掲げたもの、二は二卷二号のものなり

するを得ざりしと雖、旧朋の感は豈一日も有朋が懷に往来せざらんや。因らざりき、一旦滄桑の変に遭際し、反つて君と旗鼓の間に相見るに至らんとは。(中略)君が平生故旧に篤きの情、空しく此壮士輩をして徒らに方向を誤つて死地に就かしめ、独り生餘を全うするに忍びず。是に於てか其事の非なるを知りつゝも、遂に壮士に奉戴せられたるに非ずや。然らば則ち今日の事たる、君は初めより一死を以て壮士に与へんと期せしに外ならざるが故に、人生の毀譽を度外に置き、復た天下後世の議論を顧みざるのみ。噫君の心事たる寔に悲しからずや。(中略)願くは君早く自ら因り、一は此擧の君が素志に非ざるを証し、一は彼の死傷を明日に救ふの計を為せよ。

(後略)

全文を通して骨肉相殺し、朋友相食む今回戦禍の忍ぶべからざるを述べ、切にその反省を促したものである。翁は頗る感激されたのであるが、今となつては如何ともし難く、翁は遂に腰脚に銃丸をうけ路傍に倒るゝに至つた。別府晋助は翁を敵手に委することを恐れ、その首を刎ね、從僕をして竊に折田正助の門前に埋めしめた。戦後掘り出された首級を丁重に取り扱つた山県元帥は怡然たる翁の顔色を凝視し、戦勝の勇将も愁然として歎息、暫らくは言葉を發し得ず、やゝあつて苦衷を吐露したのが本誌語錄に掲げた言葉である。敵を悪くんで、人を悪まず、維新の大先達に対する敬虔の念と満腔の同情をさゝげたる状況まことにゆかしく、日本武士道の精華が燐として輝くを覺ゆるのである。

武士道の精華

山県元帥は明治十年西南戦役には参軍として有栖川総督宮を輔翼し奉り、よく平定の功を奏したのであるが、城山落城前、真心をこめた左の如き長文の書を南洲翁に伝達した。

(前略)曩に君の故山に帰臥せしより、己に数年、其間声咳に接

忠義会の誓約

防長二州が維新の大業を翼賛し奉つたのは松下村塾の俊豪の力が大であつたことは勿論であるが、この他にも幾多の俊傑が時勢に貢めて賢明なる藩公父子を補佐したその功が少くなかつたことを牢記する必要がある。

破天荒の大業を成就するは、内に多くの人材があり、しかもその人材の十分なる活躍に待たなければならぬ。松陰先生と深交あつた来原良藏は相模警備の際、藩公に十一ヶ条の献策をして居るが、其中にも人材選挙の急務を切言して居る。かゝる献策をなす来原自身も進んで有用の材たるべく平素より心がけて居た。嘉永七年正月に来島又兵衛、中村百合蔵、坪井竹槌、来原良藏、井上狂太郎、郡司覚之進、赤川淡水、栗屋彦太郎の八氏が忠義会を結成し、左の誓約に血判して居るのを見ても判明する。

忠義誓約之条々

一、忠孝の道忘るべからざる事

一、武士道にはづれ候事一切致すべからざる事

一、女色は勿論忽て柔弱輕薄の談決して致すべからざる事

一、衣服飲食の華美を致すべからざる事

一、長者を敬ひ少者を憐むべき事

一、諸事礼譲を専らとすべき事

一、人にをくれを取る間敷事

一、止む事を得ざるの勢ひにて自然喧嘩口論等に及び候節は理

非を辨別し相互に始末取扱くべき事

この誓約を見てもわかるやうに、人材とは単に事務の材幹あるもの云ふのではなく、忠孝両全を尙んで節義を重んずるの本義に徹し、進んで所思を実践躬行、人後に落ちざる程の人を云ふのだ。

よつて下から盛り上つて來た思想の一つの現はれである。各職能芸能をよりよく發揮して未曾有の國難に対処せんとする熱情を有する人、或は職域によつて精神方面、生産方面的実功を挙げんと期する人達を会員として組織し、諸文化団体相互の聯繫を保ち、相励み相率ゐて国策に添ふやう出来る丈けの御奉公をせんと期して居るものである。翼賛会本部より示指せらるゝ理念とは相当距離あることゝ思ふも、吾々は諒解し得る範囲に於て活動を初め向上を期し度いと思ふ。

大政翼賛会の成立した昨年の秋頃は支那事変の見透しが少しついたかの感があり、銃後の国民として永く精神の緊張を持続するには精神的の潤ひと培ひを要するを痛感したのであつた。然し昨今は南に北に國際状勢の大變革が予想せられ、國民精神の緊迫は更に異常なものがある。此際文化と称しても餘り娛樂に偏重すれば時勢を辨へぬとの批判も生ずると思ふ。然しかるゝ時機なればこそ、眞面目なる文化問題を益々とり上げなければならぬとの理由が成立つのである。今日萩文化聯盟の設立にあたつて深く自らを戒め、将来誤りのないことを期する。

昭和十六年八月一日

思慕餘事採録に就て

「思慕餘事」は長藩士波多野子文が獄中にて詠じた漢詩三十一篇を収録したもので、親友能美子遠が私費を投じて明治十七年三月刊行したものである。

元治元年七月、所謂甲子の変が勃発し、十九日蛤門に於て久坂、来島、入江、寺嶋等長藩に於ける争々たる士を失つたのであるが、その直後七月廿二日には幕府は朝廷に請ふて、毛利氏追討の許

可を得、廿五日には長藩の江戸、京都、大阪の各邸を没収し、江戸邸在留の長藩人を拘囚した。子文はこの拘囚中の一人である。この拘囚中士分十二人、足輕以下三十人餘は同年六月十二日山口着で、再度の征長騒動勃発中を危く帰藩し、藩主敬親公はこの人達を引見し、其の困苦耐忍の勞を親しく慰撫せられた。今この詩集を見るに先づ忠孝節義を重んずる子文その人の性格がよく現はれりと思ふ。

萩市に起つた萩文化聯盟も各地のものと同じく、文化人の自覚にて居ることである。幕府の老中が長藩江戸邸の吏員を招いた時、多くの者は逡巡し、或は病と称して之を忌避せんとしたが、子文は慨然として死を決し、從容として招きに応すべく周旋した。この模様を熟知して居た綿貫貫次郎は幕吏の来邸するを見て潔よく自決した。義氣の人を感じしむる實に茲に至るのである。

次は嚙鳴社員が切磋琢磨の状を窺ひ知られる。嚙鳴社は安政三年周布政之助、来原良藏、中村道太郎等が始めたる文墨の社であつて、毎月一回相会して詩文を作り、相互に氣付を云ひ合ひ、兼て藩国に尽さんとする忠謀をめぐらしたものである。嚙鳴社の存在は維新皇謨に関して多大の意義あるを感じて居るもので、余は同社員の行動に就ては常に注意を払つて居る。子文もまた同社員であつた。文筆の雄ではなかつたやうであるも、獄中で心魂を傾けたこれ等の詩は平生の作に比して優秀のことである。

次に拘囚即現今の言葉で云ふならば捕虜の取扱ひは相当悲惨のものであつたことを語つて居る。拘囚の帰藩したのは合計七十六人計りで、二ヶ年間拘囚中の病死者は五十人で、総人員の四割に達して居る、當時の事情を想見すべきである。次に能美子遠其他友人の交情の濃くなることが知られる。以上のことを考へると吾

人は教へられる所が多い。

三二

三分の狂氣

余が私淑して居る大義木堂先生嘗て云へるあり、「思ひ切つた大事を仕遂げるには、三分の狂氣が必要である」と。是は含蓄のある言葉であると思ふので、標題に掲げ、少しく所懐を述べることにする。

常識のよく発達したと云はれる人、世故にたけたと云はれる人達は物事の見透しがよくつくため、即ち自己自家に対する利害得失の判断がよく出来るため、中々思ひ切つた事に手が出せないやうである。聖者振つて他人の非をあげつらはざなどと澄まして居れば、泰平無事ではあらうがそれでは世務の革正を阻害することもあつて、見やうに依つては勇氣のない怯懦の人と觀られぬこともない。世の所謂善人と云ふのは、悪いことをせないと云ふ意味が多く、実際思ひ切つた善事を断行し得ない種類の人とも解せられる。ある人の言を借りて云へば「善いこともしないのは即ち直に悪いことをして居るのだ」と云ふ結論にもなる。斃れて後止む生命数を投げ出してもやると云ふ氣概は凡庸の善人には出て来そうにもない。一つの確固たる信念を持し、その信念のためには万難を排してやると云ふ意気は、やはり信念に盲目となる三分の狂氣を要することと思ふ。明治維新の我が防長二州の先賢志士に就て「狂」字を名とするものに次の如きがある。

東洋一狂生、東狂、西海一狂生、穴門一狂生、以上高杉晋作。
清狂、僧月性。忠狂、伊藤博文。松菊狂生、木戸孝允。
素狂、狂介、山県有朋。

春狂、品川弥二郎。醉狂、福田快平。狂痴。空狂、山田顕義。
西山狂者、大樂源太郎。
憲狂、馬屋原二郎。空狂、寺嶋秋介。上山満之進も時には庶庵狂生と署名して居る。吉田松陰先生は「回子は猛子にして狂夫に非ざるなり」と云つて居られるが、しかし戊午幽室文稿中に「狂夫の言」と題する一文があり、家大人に奉別とある詩には狂児矩方再拝と記してあり、愛弟子入江杉藏が己が苦衷を訴へて、強硬な手紙を送つたに対し、先生は「如何、如何、僕已に狂人、孔孟流儀の忠孝仁義を以て一々責められては一句も之れなく、只だ時事切歎流涕、何事も他は暗みなり」と云ふて居られるを見ても、善意に於ける三分狂の巨魁であると思ふ。名にこそ、狂字を冠せない他の多くの門弟もその行動より見て、この部類に属するものである。来原良藏、周布政之助、松浦松洞は時事に概して自尽して居るが勿論この部に属する。一体防長人は他藩の人に比して狂氣が多いのかも知れないが、是が維新の大革新を成就した原因とも見られる。

大東亜戦争を勝ち抜く為には我々の先輩が維新当時発現したやうな熱狂振りが必要であると思ふ。他の人達もやつて居るからと云ふ自己辯護の下で、氣の弱い生活を続する事はこの際慎しまなければならない。些か感ずる所あり、強く信念に生き抜くことの重要さを高唱した次第である。

少食の習慣

食糧問題は現下の我国にとつて最も重要な問題で、その解決は農民丈けに任して置くべきでなく、国民全體が立ち上つて是に参考があると思ふ。

萩文化終刊之辞

加せなければならぬ。参加の方法は種々あると思ふが、最も簡明で主要なことは、健康を害はない程度に消費を節減することであり、言を換ふれば少食の習慣をつけることである。余は廿年も前にフレツチャード氏の咀嚼法なるものを各所の衛生講話会で紹介したことがある。その大要は次の通りである。

一、本統に腹の空いた時に食事をとること、回数は一日二回がよい。

二、固いものは口中でどろくになるまで咀嚼すること。

三、注意を口内に集めること。

四、成るべく液体、汁物を避けること。

五、食物の量を二分の一或は四分の一に減すること。

六、火或は薬品を用ひて調理したものを成るべく避くること。

七、酒、煙草、コーヒー、茶等刺激性のものを用ひぬこと。

以上の方法を実行すると食物を殆んど消化吸収し去つて其残物即糞便は非常に少くなり、三日乃至八日に一回で、しかも悪臭なく乾いた小塊になると云ふ。又此習慣がつくと歯が強くなり、顔貌が美はしく、気分も爽快、疲労が少なく、勤労の能率が増進するフレツチャードは米国の商人であるが、弱体で労務に服することが出来ず、種々治療法を講じたるも寸効なかつたのが、最後にこの法を実行するに及び、肉體的・精神的に生れかはつた如く、非常な活動家となつた。

近時木穀の配給量が稍々少なく、その悩みに原因して某地に一非劇のあつたことをきく。かゝる大事を惹起する程ではないとしても、少壯者を多く有する家庭では相當に悩んで居ることゝ思ふ。此際この咀嚼法を大衆が実行し、食事每一椀を減ずるとしても、

大東亜戦争は益々苛烈となり、我国に於ても社会機構の改変が止むなく、茲數年来人的的資材の極度の緊縮が行はれつゝある。新聞雑誌類も想像し得られなかつた程縮少廢合が行はれて來たが本誌は幸に監督官署及同志の理解ある御同情によつて、三分の一の紙数制限を受けたのみで、今日まで一月も欠かさず続刊し得たのは幸運であると、ひそかに喜んで居た。然し時局の状勢はそれも許されなくなり、本月中旬県知事を会長とする山口県文学報国会が設立せられた機会に県下の諸雑誌は一応全部廢刊し、一般的なものは将来県内で文芸雑誌一種、綜合雑誌一種のみがその発行を許可されることとなつた。我が萩文化研究会は雑誌、出版物の経営者として最後まで残つた六団体の一となり、その六団体が主導力として新に県下唯一の新出版会社を設立し、且つ本会世話人河野通毅氏、田中助一氏と余の三人が編輯員として他地方の諸君と共に綜合雑誌に關係することに略ば決定した。

顧るに余等は十一ヶ年間継続の「法鼓」誌の後を承け、昭和十三年四月に防長精神の高揚、古代文化の探究、珍魚奇貝の発見、珍草異木の探索等の抱負を揚げ、郷土萩地に存在する多くの資料頤

茲に記したのはその内より抜録したものである。

常川氏往訪の記



身邊雑錄

はしがき

「法鼓」創刊以来永らく編輯校正の実務にたづきはり、大津郡に帰られてからも熱心な寄稿者であつた常川光治郎氏は昭和九年九月軽い脳溢血に罹られた。頭をつかふ読書や筆を持つことはよろしくないので、暫時全廢せられることゝ思ふ。ここで同氏の分まで少し奮発して書かふと思ひ立ち、前月中に起きた身辺机上の出来事を本題の下で、九年十一月号より十年七月号まで掲載した。

けられ、一つには仏書、一つには一般の図書が並べられてある。よくも是だけの物を集められたと驚く許り。此の閑寂なる山上で雄大なる景色を前にして、好める読書に耽ける、将に氏の理想とする処、部屋の諸設備の未完成の如き氏の意とする処ではあるまい。奥様の心づくしの松茸飯や色々の御馳走をいたゞく。更に病床の氏に御挨拶をなし、つきぬ思ひを残しながら帰途に就く。しばらくは世事を放擲して、悠々御撰養の要あるも、更に捲土重來、出来る丈けの社会奉仕にいそしまるゝ日の速かなるをお祈りする。

おもいで

文部省体育課長岩原拓氏が十一月十日明倫校へ来られた時、全校講堂で佐伯清音先生より「おもいで」をいただいた。此は先生の愛娘文子嬢の感想文、隨筆を集めたもので、三週忌にあたつて故人を偲ぶ料として父君が贈写發行されたものである。初めの頁には魔人として風評高かりしありし昔の写真が掲げられており、先づ思ひ出の涙をそゝる。父君の序文には思ひもかけぬ愛娘の急病の模様やら、その他御不幸の数々が感想と共に誌されてある。内容は宗教といふこと、影子の追憶、感じたまゝ、母の乳房、春のコント、夏の夜、停車場で会つた男、私の顔、白い道、ボオの半生、現代女学生氣質、歳末感想、点心、泥漬、刀剣幻想、髪を断る、或る編輯者の日記、の長短十七篇を採録してある。同人の文芸雑誌「アミーバ」の編輯にあたつて居られた丈けあつて文藻豊かに、觀察が緻密であつて、しかも相当のするどさがある。余の最も感興をひいたのは母の乳房である。終りには叔父君小島經彦

氏の「緑の尼僧」なる長歌が添へられ、薄命なる令姫の面影を描出して居る。

哀悼日

昭和九年十一月十二日はどう云ふものか、珍らしく萩地に葬式の多い日で、私の知人の内にも三つを数へた。一は転住地山口市より本年春帰萩、痼疾を養つて居られた松田善衛閣下である。二は萩中学校の元教頭で、本会に於て掌療法の話をせられた事のある伊藤徹成氏である。三は私達と共に萩電争議に關係し、又私の県議戦に特に尽力せられた花村久之進氏である。一は北古萩明円寺で午後三時より、二は吉田町三千坊で午後四時より、三は下五間町常念寺で午後四時半より儀式が始められ、その時間と場所が申し合せた様に都合よく配置されてあつたので、三ヶ所とも参列することが出来て、哀悼の意を表し得たのは本懐であつた。

「煎じつめて」と題する序文に於て、氏が俳句に対する抱負、主張が見らるゝこだはりのない、さつぱりした著述である。余が好む句六七を摘録する。

山の町の二階すまるや星涼し

爽に槌の音する日なりけり
野田神社
敷蘚に木沓の音や春浅し
道と岐れて町をはなれぬ春の水
夢の径廻りくづされて稻晴る
鮎かけの暮れ行く影ぞ涼しけれ
三男尋一入学試験にバスす
おばつかなくもお玉杓子の泳ぎけり

満鮮百話再頒布

十月十七日の中外日報で、私の旧著「満鮮百話」の紹介を得たので、その残本を頒与したいとの意を更に同紙上を通じて発表した。朝鮮は勿論北は秋田県より南は台湾に至るまで忽ち六十二名の申し込みに接した。些か古くなつた小著ではあるが、卒読や熟読の上、種々の讀辭をつらねて多くの礼状に接した。満鮮の紹介を是までの知己以外に更に広範囲になし得た事を喜んで居る。

遺徳

去る一月廿五日余は両親の七回忌を菩提寺で行ふ為めに和歌山市に帰つた。大寒の内とはいへ、葬儀の日も三回忌も此度の七回忌も好天気に恵まれて餘り寒くはなく、法要に集つた者も誠に仕合せた、社会に対し、周囲の人々に対し、よくつとめられた親の遺徳によるものと思はれる。

野に山に親の慈光や残る雪

清水寺の鐘

昨秋の狂風に後山の綠樹は痛ましくも一掃されて物のあはれを止めた清水寺も堂塔伽藍は先づ大破をまぬがれて、旧態を存して居る。山門を入れば左側に鐘楼があつて、その大鉄鐘には文明十年の銘がある。即ち今より五百十四年前の鋸造である。一月の本会例会で鐘の話を聴いた許りであるので、乳の間の乳を数へて見た四段七列で四箇所計百十二個百八煩惱の数より尙多い。

鐘の乳數ふる寺や冬日和

ホテルの結婚式

一月廿八日京都ホテルで行はれた姪の結婚式に列した、身仕度より儀式披露宴と引きつき凡てがよく行届き新夫や親戚の人とも談笑する機会もあり、頗る心地よく感じた。今は二人の男の子の母となつて居る娘の結婚式もやはり此處で挙げた事を思ひ出して微笑を禁じ得ない。今更ながら結婚は崇敬神聖なりとの感を深うした。

うまし二人契りの神に護られて
かゞやき立てり天の御中に

現代生活と仏教

「現代生活と仏教」は高神覺昇師が昨年九月十五日中の島公会堂に於て、大阪毎日新聞社主催の仏教講演会でやられた講演の速記録である。船木町の知友黒瀬三如兄は一説三嘆、余に送つて何においても直ちに読みとの事なり。余等夫妻直に卒読、その要領のよさを感じたので、兼て仏教を簡明に説明せる良書を求められて

早古い伝統的の信仰では満足し得ない事になつて、求道者は古い型から脱し、新しき何物かを求めてゐる」と現代人の心理を観ずることも同感だ。同氏は近頃「仏教の正しい見方」と云ふ書物を博文館から発行された。図書は從来各誌に掲載した意見を集めたもので、同氏の仏教的信念を窺知するのに恰好の良書である。

乾島略史

乾島略史は見島に駐在した軍用主事新山政辰氏が安政五年に漢文を以て記した見島史で見島に關する史書として唯一の良書である。見島村治に偉功を建てられた厚東毅一翁より借り得たのは安藤紀一先生が淨書して評語と訓点を加へられたもので、通説に便なる本写本の如きものはあるまい。考古学的見島に興味を有する余は四月上旬桜花を餘所にして静に机に寄り之を写した。

二大講演

萩市で四月五日より開かれた史蹟産業博覽会と防長勤王史料展覽会は五月十五日盛況裡に終つた、此期間本県に於ける諸行事は殆んど凡て萩で開かれ、その応接に暇が無かつた。講演会として盛会であつたものは四月二十三日徳富蘇峰先生が「教育と歴史」と題し、五月四日黒板勝美博士が「史蹟と産業」と題せるものが明倫館であつた、殊に前者は館外に拡声機を備へ、大講堂に入り得ぬ聽講者に満足を与へた。

貝の王者

元萩中学校教諭田中市郎先生は昭和十年三月、明倫校に於ける講話会で翁戎（長者貝）と云ふ貝の王者を示された。此貝は古世代に於ては非常に沢山居り、化石として残つて居るのが千数百種に及んで居る。然るに現在生存するものは極めて少く、世界中僅かに六種類を見る。日本産にはその内オキナエビス、ベニオキナコシタカオキナの三種類がある。是等は皆深海産のもので、完全な色艶のよい貝殻なれば七十円から百円にも売却されて居る珍品で、生きた化石とも云ふべきものだ。見島沖でもとれた事がありその貝殻が見島海岸で拾はれて居る、是であると实物を供覧せられた。形は一寸「にな」に似て二寸位の大きさである。

仏教の正しい見方

いち早く僧籍をかなぐり捨て、「去年の暦は今年はもう役に立たない如く、過去の時代によく衆生済度の力をもつた祖師の言葉と雖も、それが無修正の儘でいつも役立つとは思へない。自分はかう云ふ意味に於て、常に自由信仰の立場から、既成教團の境外に居つて、仏教を正しく見直すことに努めて居る者である」と云つて居らるゝ宮沢英心師の心事は私の大に共鳴する所である。「最

滿鮮百話

本山魁編著



滿鮮の風物 はしがき

余は元来旅行は好きであるが、壯年時業務に追はれ、悠々たる旅程を楽しむと云ふ機会が少なかつた。唯県議在任中、滿洲國成立後一ヶ年餘の昭和八年五、六月の交、同職十余名と共に約一ヶ月間、滿蒙鮮を旅行し、軍隊の慰問及び産業の視察をした。余にとつて是が最大の旅行であつた。帰郷後視察した風物を滿鮮百話と題して上梓し、知己に配ばつた。同書には百二十則の短章と旅行日記を載せたが、茲には其内より二十八則を選抜して、當時を偲ぶ資料とした。

旅大道路と山縣公

我等が親しみ深き郷土の偉人、素空山縣公が往年関東都督として任地に在りし時、旅順大連間の大道路を設計せられたり。當時その規模大に失すとて、世論囂々たりしと云ふ。時移り世変はり、今日に於ては公の達眼に服し、その恩恵を謝するもの比々皆然り道中トンネルの洞口に刻せる公の題字は好箇の記念となれり。

たり。その埋葬地点に建てられたる記念碑は関係深き閉塞船朝顔丸の推進機を利用せるものなり。

塩問答

大石橋より營口へ向ひし日の早晩、列車の窓より眺むれば地上白くして恰も霜の降れるが如し。霜なりと云ふ人、滿洲に曹達地帯あれば曹達なるべしと云ふ人、いや塩なりと云ふ人あり。レールや屋根も少しく白きにあらずや、塩なりとは考へられず。今頃霜の降る筈など、交々意見を戦はせしも決せず、營口に着すこの事を出迎へる人に語れば、清林館前の地上を指して、かく白きは塩の為めなりと。軍配は塩説にあがる。

小鳥飼ひ

當口に於ける支那人家庭を見学すべく、富豪張松伯邸を訪ぶ。主人の部屋には卓上の置物の他、四壁に夥しき書画の軸物を掛け廻らす。家族の人々も夫々部屋を定め、陶磁器、時計、筆筒など美々しく装飾す、使傭人家族も夫々棟を異にして廓内にあり、卷煙草をしきりにすゝめ、マツチにて火をつけ呉る。かくするが珍客をもてなす所以なりと、後にきかさる。立派なる門の側に一青年あり、小鳥に紐をつけて手にとまらす。支那人は愛鳥の観念必ずしも日本人より勝れりと云ふに非ざれども、家畜小禽を馴致同化する点に就ては、天稟の技能を有す。

捨子引受所

朝鮮満洲の都市に於ては社会的施設の稍々見るべきものあり、その内最も奇抜なるは奉天同善堂の諸事業の内、捨子を引受くる設

永久築城を施せる堡壘に対しては、攻略の困難想像に餘るものあり、雞冠山北堡壘などは一尺二尺と隧道を造りて壘壁を爆破したるなり。時には爆揚せる岩石の為め、突撃に移らんとする身方をも埋めたりと云ふ惨話あり。堡壘壁下の隧道内の銃砲射撃により地下に戦ふ兵士の鼓膜は悉く破れたりとの事なり、壁面の弾痕を見ても、激戦の程察せらる。

旅順堡壘戦

三八

白玉山より港内を俯瞰するに意外に狭き感あり。汽船数隻碇泊し居るも二三千噸級のものなるべし。説明者の云ふ所によると、近年此の附近の土地隆起するによるか、港湾浅くなり、昔は一万三千噸の大船入りたるも、今日は八千噸位が精々なるべし、港内に注ぐ龍河も軍艦邇れりと云ふに、今は見らるゝ如きあはれる浅瀬となりしと。将来の旅順は政治の中心地としても、港湾としての価値も漸次薄らぎ行き、史蹟或は遊覽本位の市街地と化し去るに非ずや。

閉塞船の石

我が忠勇の将士により、明治三十七年二月より五月に至るまで、三回に涉りて旅順口の閉塞が決行せられたり。その壮烈無比、燐として海軍史上に光を放つ。白玉山表忠塔の周囲にある石垣の石は、實に閉塞船内のものを引上げて用ひたるものなり。石も亦匠を得て欣然たるものあらむ。第三回閉塞に当り、湯浅少佐以下三十二名が敵地に上陸戦死したるを、露軍は礼を以て厚く之を葬りにゆくものもないと云ふ。些か便利なる施設と感心する人もあるべし。

水を汲む馬

北に向ふに從ひ満洲の夜は益々明け易く當口に到る車中、三時半には已に曉天白み初むるを経験し、明るき日中野に働き得る時間の餘りに永きを感じたるものなり。田畑にやる為なるべし、満洲人が井戸の周りを歩まして馬に水を汲まする光景はのどかなるものなり。灰暮洞に於ては鮮人が驥馬に駄白をひかし居るを見る、但し布をもて眼かくしをなしあり。

水を汲む馬に日永き広野かな

當口を去る四百糺の地点にある公主嶺の分水高地も、その高標僅に旅順の二〇三高地と同様なる位なれば、同所より内蒙古に向つて流るゝ遼河の河水の緩くなるは想像に難からず降雨の多くは流れ去らずして地中に吸水せらる。是が為め炭酸ソーダは地被に滞積し、白色を呈するに到る。胃病の良薬なるソーダも用ひ過ぐれば人をして胃弱を起し、瘠瘦せしむ。大地も亦葉量多くして却つ

三九

て地味を痩せしめ、植物栽培に適せずといふ。

玻 璃 山 の 伝 説

玻瓈山は玻瓈山駅より遙か南方の地平線上に蒼笠を伏せたる如く夢の如くに浮ぶ。一望千里荒漠として何等の変化もなき所へ、天より降りしか、地より湧きしか恰も島の如き感じが与へらる。是に類する山が尙他に六つあり、蒙古の人々は北斗七星が地上に落ちて、是等の山となれりと伝ふ。

赤い夕日

匪賊襲来の跡、焼き払はれたる部落の残壁など、荒涼たる蒙古の野辺にも、自然の美はしさは色香ゆかしき草花と咲き出で、羊山羊等放牧さるゝ畜獸は云ふも更なり、湿地の水鳥、草原の兔、雉子は数知らず姿を現はし、時に狐、山鳥なども出で、恰も天然の動物園を行く如く、あれよ／＼と指しながら車中の老人皆小児の如く喜び合ふ。曇りの為め見得ぬとあきらめ居りし夕日も束の間なれど、赤々と地平線上に燐かしさを現はす、思ひ出深き車窓なりき。

物の價值

需給關係によりて物の価値は自ら定まる。奇らしきを貴しとなし美はしきを貴しとなし、強きを貴しとなし、実益あるを貴しとなす。猫に小判と云へる如く、物の価値は自ら主觀によりて決す。胡地に於て仁丹十粒と牛一頭とを換へたるなど、その無智によると雖、徒に笑ふことを要せじ。

趣味の友

後の盛況想像に餘りあるものあり。

一流の人物と風光

新興の氣満溢する新京に於て、図らずも鄭総理及謝外交總長に面接の機を得たり。兩氏共大抱負の一端を吐露し、為に余等の心境頓に拓くものあり。更に静寂なる古都吉林郭外北山の曠亭に登れば、雄大秀麗なる風光八方に拡がる。松花の大江に沿ひたる市街を中心いて、遠山疊々その姿態千変萬化なし、山紫水明實に満洲第一の景勝なり。数日の間人物の粹と風光の絶勝と、合せ接するを得、余等は眞に慶福の厚きを思へり。

蛇とブト

吉林地方材木を取扱ふ人の語る處に依れば、夏期は蛇とブトの為に悩されて、全く森林に入り作業をなす能はず、漸く十月より山に入つて、固屋掛け道開きをなし、十一月伐採、十二月十日頃より搬出にかかり、四月以後は休業状態にして、僅に水利のある所に流築する位なり。尙一般商業も冬が盛んにして、夏は閑散なりと云ふ。冬は冬眠状態にて夏期に働くかと思はゞ、大なる見当違ひなり。

匪賊と脱線

此度通過せる線路中、馬賊に対し最も警戒の厳重なりしは吉林と敦化との間に於て、各駅に鐵条網等の防備ある他、列車には兵士乗組み、機関銃二台を備ふ。拉法站に於ては乗降客の服装検査まで行ひ居たり。鉄道事故の最も多きは敦國線なり。是は今尚仮営業中に於て発着時間の予定もなし難し、本営業は八月以降なりと

チ、ハルに於て塚本青山氏に会ひ、勧めらるゝ儘その寓居を訪づれ、軍務の餘暇集められたる古夷に關し清談數時間、その温情に身は故国を去る万里の外に在るを忘れしめたり。京城の骨董店にてゆくりなく逢ひたる西吉慶鮮齋氏も是非来れよと云はるゝまゝ訪問し、夜間約二時間、氏が苦心して蒐集せられたる古夷及その保存法などを見、得る所少からず。余は兩氏共に雑誌の上にて名を知るのみなりしが、今や一見旧知の如し。同じ趣味の世界に生くるものは、近き親戚にも喻ふべきものか。

無改札乗車

滿洲の鐵道は列車の中にて切符を改め、改札口にては別に改めず切符さへ所持すれば、何処からでも構内に入りてよし。中東駅昂々溪に於ては数日前の炎熱にひきかへ、細雨霏々として烈風寒さを送る、少しにても近道すべしと急ぎ足の一行は駅の向ひ側より三列の貨物列車の下を、一つ／＼くざりて構内に入る、かかる事は未だ嘗て経験せざりことなり。

伸びゆく新京

昨年三月九日溥儀執政を迎へたる三千万民衆は新滿洲國の首都として、長春をその名もふきはしき新京と改む。爾來濛渾たる意氣と、偉大なる抱負を以て、著々として諸般の計画を実行し、新興の前途光明に輝くものあり。その大都市計画の如き、現在の地域の約五倍を標準とし、第一期五ヶ年計画としては、約二倍大的都市となし、現今の人口を二十万と概算すれば、十ヶ年後には五十万に達すべしと観測せらる。今日執政府も國務院も其の外観内容云ふに足らざるも、目下大建築物は続々として建設せられ、数年

云ふ。余等の列車は他の列車脱線せし為め二回許り少時間待ち合せたる他、幸に何等の故障もなく、旅程を進め得たり。是れ全く軍隊と鉄道当事者の驕旋の賜なり。

娘々（ニヤム）祭

滿洲にては各地とも娘々祭とて旧四月廿七日を中心て三・五日間大変なるお祭騒ぎをなす。最も著名なるは大石橋の海雲寺に於けるものにて人出十万と称せられ、見世物露店夥しく、參詣者は馬車に乗りて來り、その中に寝泊りをなすと云ふ珍風景を現出す。余等は當口にて西大廟と云ふ寺院の雜踏するに會したり。吉林北山の皇玉閣もこの祭礼にて有名なる所なり、閣内に入りて見るにば／＼しき色彩を施せる本尊仏像に天仙聖母神と書かれたる木牌あり、右側には送生娘々神位、胎娘娘々神位、崖生娘娘位、左側には送子孫老、眼光聖母、天花娘娘々神位（痘疹娘娘位）との木牌を併列す。是によりて考ふるに娘娘神とは縁結びより受胎、安産、眼病、疫病除け、一家安全、福祿長寿と結構づくめのことをかなへて呉れる、最も滿洲人向の仏にて、此の祭の繁昌する所以も判知せらる。

世界の穀倉

滿洲の大平原は人類を養ふ糧を供給するが為め、母なる土地と呼ばれるゝナイル河（アフリカ）の沃野に比すべく、殊に松花江の流域は滿洲耕地の半分以上を領し、豊饒無比なり。僅か六月より九月に到る四ヶ月間なれども、湿氣と高温に恵まれたる此地は夥しき穀物を産す。大豆高粱等の出盛り期には各駅の内外、野天に穀囊の山を築き、その盛況想像以上なりと云ふ。滿洲は世界の穀倉

なりと云ふも決して過言に非るなり。

岩蓮華

黒田京城大學教授を尋ねたる際、旅行先にて書籍の間に草花を挟み押すも、好記念なりと語らる。行程僅か数日を残す今日となりては、気付くことの遅かりしを悔ゆ。唯敦國線明月溝站に於て、停車時間の永さまゝ、程近き小山にのぼり、菖蒲の黄なる、紫なる、其他名を知らぬ草花及岩蓮華を採取す、前者は車中に眺めんが為め、後者は持ち帰らんが為めなり。記念のためとて各處に石瓦などを拾ひたる人ありしも、生物を土産としたるは余の岩蓮華のみなり。移し植えて満洲の花速かに開くを待つ。

北鮮の良港雄基

宿泊熱望の飛信しきりにして、吾等もその芳志に酬ゆるべく日程を変更して雄基に一泊す。港湾の状況、木材貯蔵に適する湖水の存在等、開港場としては申分なき地勢なり。僅か六、七年にして大成功を贏ち得たる紳商あり、朝鮮に於て二三を争ふ貿易商の擡頭するあり、満洲に対する副玄関として新興の氣横溢す。在来北鮮に雄基ありとは存外未知の人多く、數年前佐賀市商工会議所の事務員が台湾の基隆と絶えず間違ひ居りしなどの話あり、雄基の名を速に且つ広く認めしめんとの、地方人の願望さもあるべし。

昌德宮秘苑

昌慶苑内の昌徳宮秘苑は山中にあり、奇巖峙てる側には清冽なる薬泉の遊るあり、或は大樹齋者として天を摩し、栗鼠は樹間に遊び、鶯は高枝に巢を営みてしきりに鳴く、全く幽邃なる別天地なり。阿房宮の賦に五歩に一楼、十步に一閣と云ふ句あるが、宇宙躍動する趣あり、誠に朝鮮第一の靈場と云ふべし。

石窟庵

石窟庵は慶州仏国寺の後に聳ゆる吐含山の頂に在り、新羅景德王時代の創建にして、仏龕を模して作らる。中央に丈六釈迦の石刻像を据え、周壁及入口には觀音、羅漢、維摩居士等三十餘の仏像刻まれ、仏教芸術が燦然たる輝を放つ。曉天日本海より上る旭光、釈尊の眉間に射る時、壯重にして雄勁なる此の諸仏像は生々躍動する趣あり、誠に朝鮮第一の靈場と云ふべし。

河川港の惱み

鎮南浦駅にて内地より帰り来れりと云ふ福田茂穂氏に遭ひ、同氏の好意によりて、同地の大要を忽卒の間に視察するを得たり。米と林檎を重に輸出する同港も冬季二ヶ月は流水の為め航海を絶つと云はるゝにより、鮮北の雄基羅津にして尙不凍港なるといふかれば、是は塩分少なき河川港なればなりと。尙日本海に面する諸港の干満の差少きに比し、南鮮諸港はこの差多きを憾みとすと成立一ヶ年半、大なる動乱は治まりたりと雖、人心の平靜を來たすは尙遠遠なり。この重大時機に際し、朝にあると野にあるとを

樓の附近、全く此の趣あり。靈室、女官の居室等比較的質素なる所も存すれども、樓門亭閣に映花堂、漁水門、長樂門、逍遙亭、太極亭等優美清艶の名称を存するに見ても、宮邸の秘奥巫山の雲深うして、水声松籟皆長夜の宴を擾くる雅樂なりしを思はしむ。

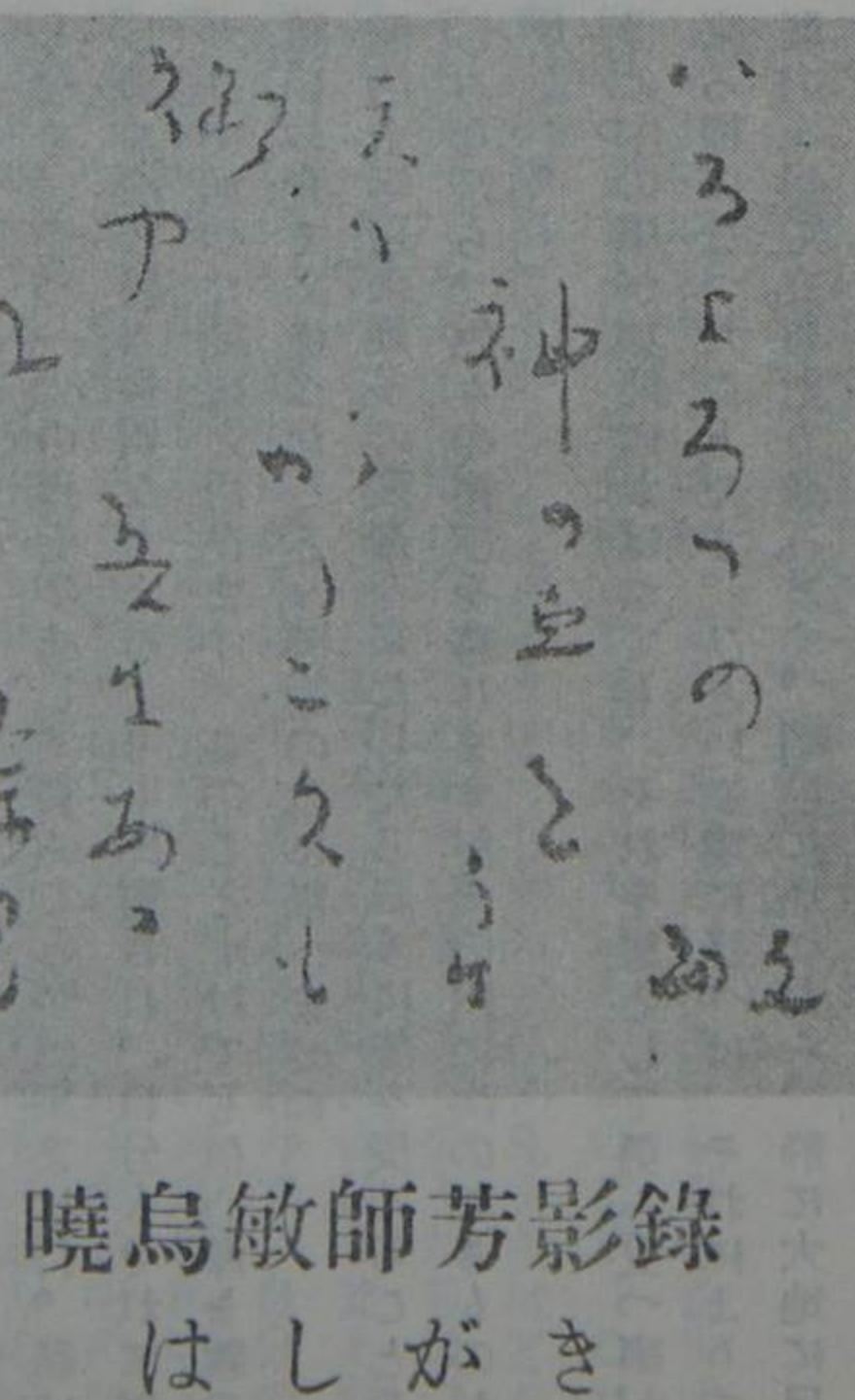
樂浪の瓦

土城里の樂浪郡治址は平壤の対岸大同江の下流一里の所に在り、此處より東西約二里、南北約一里的地域には千三百八十六基の古墳が散在す、樂浪と呼ぶは此の地方の汎称なり。樂浪郡とは前漢の武帝が朝鮮半島に支那直轄の四郡を置きたる時の郡の名にして、此の郡領政治は四百二十一年の持続を見る。

金冠塚

金冠塚は大正九年慶州の市街地に於て、陋屋の後庭より団らも發見せらる。名に負ふ王冠は金色燐然、嗣々たる二百の小瑠璃は妙なる光の幻樂を奏で、点綴せる翡翠の勾玉は色彩配合の極致を現はし、意匠裝飾全く類例なきものなり。是は貴重にして數多き副葬品と共に、慶州博物館内特別建築物中に陳列せらる。是等は学者の推定に依れば、西暦四百五十年より約百年間に於ける国王の佩用したるものなりといふ。其後金鈴塚より第二の小金冠瑞鳳塚より第三の金冠發見さる。彼の樂浪の古墳が支那漢代の美影を憚ぶことにする。

問はず、在滿邦人は恩威並び行ひて、日滿融和に努めざるべからず。豈鮮満のみならんや、我神國が建国の理想は皇威と王道を八紘に輝かすにありと。万民一如、我等が信ずる釈迦の理想も實に茲に在り。



曉鳥先生は絶えず全国を巡遊して居られるが萩も仏教研究会が御縁となり、その御巡錫をお待ちする仲間に入れていたぐことになつた。即ち昭和五年三月、同六年四月、同九年三月、同十二年五月と四回の御来萩である。經典を身読されてゐる先生の御教化威力は甚大で、到る所信者からなつかしみ慕はれることが当然であるを知つた。先生の御訓話は其都度「法鼓」に連載したが、茲には同志が感嘆してゐる例として、平瀬大平少将の一文を先づ記し、次で先生談片の一部、次で余が回想文を加へ、永く先生の芳影を憚ぶことにする。

暁鳥師の話を聴きて

平瀬大平

つた様な気がいたします。

下略

四四

自分 の 生立

此度師の無量寿經の御話を聞く事が出来ましたのは誠にうれしき事でありました。これ迄一二經文を見もし聞もしましたが、其經の主なる点の外は只無闇に飾り立てたる美文で、餘り重要なものでなく、一種の劇的文章に過ぎない様に思ひ、之を細密に注意せなんだのですが、此度師の御話を聞きますと、道を教へんとする釈尊と之を聞かんとする弟子共との間の心の通じてゐる点や、師弟の間の温き情、釈尊が道を説き出さざるを得ざるに到る途行の具合を紙外に味ひて、いかにもなつかしみある様子がわかり、心の通じ解け合つた大比丘衆菩薩が、光顔巍々として自然に口許に語が出て来さうな釈尊と対し、又法藏菩薩が願を述べんとして先づ世自在王仏の徳を讃嘆する其第一声を発する時は、已に業に菩薩は仏心になり居ると明つて見れば、一面其巧妙なる文芸美術に打たれると同時に、私は思はず成程々と合点し、何時の間にか其弟子共の一人になり、今遠き昔の經文を見てゐるのではなく何んだか釈尊が今自分の前で話されて居る様な気持になつて居つたのであります。之が暁鳥師の能く説かれる味ふといふ事なるべく、左すれば今迄は味ふ事を知らなんだ事が明つて來た次第です。此度は無量寿經の最初の一部を聞たに過ぎませんが、其此を聞きました時の愉快味は何処から来たか、師の此經に対する十五ヶ年の蘊蓄と、毫も四邊に縛られて居らぬ何ともいへぬ其態度、無碍の辯才、自分の信ずる儘に何の畏れ氣もなく其主張を対者の胸に落着かせねば止まぬ其熱情振り、是が斯様に入を動かすので、私は經文の為め許りでなく、是が為め気がせい／＼して身が軽くな

私は真宗の寺に生れ、信仰の厚い両親の下に育ち、幼少より仏を拝むことを教へられました。十一歳のとき父の死去に逢ひ、為に住職となりました。中学を卒へて専門学校に入りました時自分で心の見苦しさ、眼の穢れを感じ、僧として立つ資格のなきもの、様にも思ひましたが、仏のお慈悲によりて、悪人を助ける仏の心を味はして貰ひました。学校の卒業が明治三十三年二十四歳、その後雑誌に筆をとり、講話巡教をなすこと三十四ヶ年になります。此間多くの友人はあちこちで奉職をしましたが、自分はそんな事もなく、先づ一つの道を歩まして貰ふことが出来ました。私は熱し易く冷め易き性質なりと母よりも注意され、自分もそれに気をつけ居つた結果と思ひます。このことすけでも信心厚き親の有難いお育てに逢つたこと、感謝の念に堪へませぬ。

明治十年以来幾多の変遷を來たしたる日本に生を受くることお楽しみながら、色々の喜びを感じますがその内に次の如きものがあります。

諸 行 無 常

吾人にも、諸行無常の言葉に対する如き、誤想があることを思へば、一宗一派に固執し、所謂罐詰の信仰を持つて居る人々の内には、釈尊の真意を正解し得ない人が多かろうと思はれる。先づ同師によりて啓蒙せられたる一端を誌す。

眞宗の綱格に就て

この度暁鳥師を萩地に迎へて、六回の講演と再度の座談に於て、無量寿經の見方、仏教の見方に就て、啓發せらるゝ處が多かつたが、諸行無常に就ても左の通り話された。常なしとは諸行が常に変化するの意であつて、是は人間が生きて行く姿を云ふのである。人間の思想でも、智恵でも、信仰でも、ある一定の程度に停滞して進まぬ様では、甚だつまらぬ。信仰に就て云ふても、死んだ信仰で、罐詰の信仰と云ふべきだ。釈尊はもつと生きた道教を宣べられたので、智恵でも信仰でも生ある限りは、向上發展せなければならぬ。正信さへあれば、日々の変化は必ずよい方へ向ふのである。諸行無常とは厭世悲觀的のものではなく、頗る活動的に此世を悟つた言葉である。

同師の心境は平瀬氏等に書き与へられたる、左の和歌によりても窺ふことが出来る。

命あればなすべき事のさはにあり

なさで死なんもまたうらみなし

他力の信仰と云つても、遊惰放縱に居つて、而も救はるべく仏を念するなどの、得手勝手なものでは絶対にく、自己を向上せしめんと努力し、証悟の域に到着すべく、終生修業を怠つてはならぬ事は明かである。

特別の經典に囚はれずに公平に、仏教を見て行かうと努めて居る

らるべきものぢやない。

先づ自己の改善より

我々は、積尊の進まれた道に努力して精進する外ないのである。しかるに多くの人は、今の社会組織を変へなければ人間は幸福にはならないとのみ考へてをります。それは一種の夢であります。勿論私は社会組織を変へるなどはいひはしない。かわらないものとも思つてゐない。実際は、なんと云つても變りつゝあるのである。或人は現在の資本主義が破壊されつゝある時代であるといつてをる。さうかも知れない。とにかく變つて行きつゝあることはたしかである。しかし、私は、變つてしまふから第二の世界をいうてをるのではなくて、この世の中をどうすれば良いか、革命は何処から始めるかといふことをいうてをるのである。私は、最初に自己から踏出すべしであると思ふ。私自身その道をとりつづるのである。自己が立派になるときに、自己の環境も立派になつて来る。自分は一步一歩に自分の國を建て行くのである。今の社會を少しばかり變へたところで、ほんとうなものは生れはせぬ。初めからやり直す覺悟をもつて踏み出すべきである。先づ自分から踏み出す。さうして新しい社會を作る。新しい世界を拓へる。そこに、私のこの願、私の衷心のこの願が見出されるのである。

托鉢供養のすがた

昨春（昭和二年）セイロン島へ行つたをりに、托鉢の僧侶に食物を供養してをる貴婦人の姿を見た。家を出た貴婦人は、門前に立

立つやうな喜びといふよりも、むしろ静かな、しつとりしたものであります。一時の感激に、躍りあがり狂ひ廻る、それはまだ自力の臭ひが取れぬであります。いはゆる信心の境界は幕一枚です。その信心の境界を越えると、こんどはそんな飛立つやうな気狂染みた喜びではなうて、しつとりした静かな喜びが出る。ですから、そこから見れば信心があるのか無いのか判らぬほどの相であります。さうして、そこには根強い力が潜んでをります。

特別に信心といふんではなしに、一切の生活全体の上に信心の光が現はれて来る。さうして一切の生活の上に漏尽比丘のやうな静かな、物に動かない証が得られる。これがお淨土の楽しみであります。お淨土の楽しみは心を落付ける。独りになつて、静かなにつくりしたほほゑみが出ることです。につくりと笑ひが出る、独りでにつくり笑へる喜びです。さういふ楽しみ、独りゐて喜ばれ思ひ出しては独り喜びが出るのはお淨土の楽しみです。いらいらとした氣狂染みた楽しみや喜びをもつてをる間は、まだ混り物があるのであるのです。

不斷の聽聞

わしはこれで解つたから聞かぬといふぢやない。たくさんの仏のお説きになる法を聞きたいと聴聞に骨折らにやならぬ。解つたら、わしはもう聞かぬといふのはまだ解らぬのである。今日の坊さんの多くは、説教をし、講釈はするが、自ら書物を読まない、又自ら聴聞もしないといふのは、まだ信心のない証拠である。信心が出来てくると、聞かずにをれない。読まずにをれない、法を求めずにをられないのです。わしは真宗の信心を得たから、他の

つてをる僧侶の前にすんで恭しく食物を鉢の中に入れ、食物を入れて行つた器を下に置いて恭しく合掌してこの僧を拝んだ。僧は默念として去つた。彼女は、その僧の後姿を恭しく合掌して拝んでゐた。私は、この姿を見て非常に尊い感を得た。食物を布施して、そして合掌する、これでこそ供養である。それを黙して受けて行く僧侶の姿も氣高い。かうした二人の間には、物が大切ではなくして、物を超えた徳が第一の価値とせられてゐるのだ。物をさきげつゝ、しかも合掌する心には、尊嚴なる存在の認識が宿つてゐるのである。

信心の味ひ

信心を得た者は身も心も柔ぐ。信心を得た者で頑固な人間はない何もかも柔ぎます。ゆたかさが出来る。何となう明るい味が加はりまたあたか味が加はるのであります。信心を喜ぶ人の傍へゆくと、何となう温かいものです。所謂地位の高い人でも、信心のない人があります。さういふ人の傍へゆくと何か圧迫されるやうな気がするものです。けれども、信心の人の傍へゆくと柔かい綿で包まれるやうな尊い気に打たれます。仏様が、わしの光を身に触れる者は身も心も柔ぐといふ誓を立てられたといふことは、尊いことであります。

静かな樂み

お淨土へ行つて、娑婆のやうな楽しみをするんではないのです。信心を得た者は身も心も柔ぐ。信心を得た者で頑固な人間はない絶対にないのです。漏尽比丘のやうな、静かな楽しみをするのです。ですから、この世においても、信心の喜びといふものは、飛きたいんぢやありませんぞ。法の声を聞いて聞いて聞き止らな心を得るといふことが、不退の転を得るといふことです。

徳川家康は民心を得る方便として、僧侶を優遇し、寺院を保護し宗門帳をつくりて民衆所属の宗教を明らかにし、寺の証明なれば旅行も出来ぬことゝなす。仏滅後の印度に於ても、国王が僧侶を優遇し、仏教を保護し過ぎたことあり。かくして仏教は内部の腐敗を來たし、教祖宗祖の眞意を没却して、教化の有様は空中の樓閣の如く、實際の生活に即せないものとなり、各宗本山は徒に名勝遊覽地と化し去り、立派な伽藍の住み家となり、僧侶の内にも鼠の如く恩飯を囁じつて居るものが多くなつたのである。私は現今政府のとりつゝある寺院財産の保護政策を思ひ切つて放棄せば、敗滅に向ひつゝある寺院は直に消滅するし、その代はりに力ある仏教が興り来ると考ふ。人間の心の内に生きて活く仏教は別に本山と云ふが如きものはないが、今日既に興隆しつゝありと思ふ。

人を感化誘導するには、説得よりは自らの行為が肝要である。彼の阿育王を感奮せしめたるは、黙々泰然として死に就ける一僧侶の態度に他ならず。

余が知人朝鮮へ帰省したる際、父は遠方まで法話をきゝに行きて

不在なりしが、父のこの行動は直にその子をして宗教に向ふの縁

をつくりしが如きを見ても明かである。

衣食住の節制

現代の社会を清めて行くに最も大切なのは、爆弾ではなくて、自治の精神であり、独立者となることあります。しかし現代の社会において、独立者たり自治の人たるには、衣食住に対する欲望を節制せねばならぬ。人並にうまいものを食ひ、人並の家に住みの奴隸となつてまで、人並の生活をして行くことが果して幸福であらうか。魂を生かすためには、衣食住の三つを簡素にして行きたいと避けねばならぬ。人が自動車に乗れば自分も自動車に乗り、人が洋食を食ふからとて自分も食ひ、人が遊ぶからとて自分も遊ぶといふやうではいかぬ。もしどしても衣食住に対する欲望を節することが出来ないなら、資本家の前に屈従し、物を持った人の前に尾を振つて、その人の奴隸となつて行くより外はない。さうした奴隸に堪へられないならば、欲望に打ち克つて、唯一つの道である備はれないやうにすればよいのである。

尊重礼拝

私はこの頃、切に人を尊む人が尊いのであるといふことを思ひます。私共は何がなくとも尊い物がほしいのです。今日では何でも平等ちや平等ちやといふて、尊い物をもつてゐない人が多いやうになつた。人の前に頭を下げるのはつまらぬことぢやと、皆が思つてゐるやうだ。そして誰でも互格ぢやといふて、誰をも敬ふこ

とを知らない。さういふ人はほんたうに不幸なんです。勿論、金のために、利益のために、べこべこ頭を下げるのにはいけない。これは、ほんたうに心から頭を下げるのではないからである。頭を下げれば利益があるからといふので頭を下げるのには尊む心からではないのである。ほんたうの心から物を尊むならば、その対象は、たとへば鯛の頭でもいいのである。何でもいいが、頭の下がるものを持つてゐる人は尊い。それは誰でもいい、何でもいい。内の親父でもいい。妻でもいい。娘如来といつて、妻を拝んでいる人があるが、それも結構である。妻を如來として拝めば自分も如來になる。他に求むるところなく尊むのが尊いのである。しかし妻を如來として拝むものは、玩具として弄んで見るとは違ふ子供でも、これを尊むものはよいが、玩具とするときには、自らをも玩具にするのであつて墮落である。何處にも何等の求めるところもなしに、それを尊んで、それに頭を下げる、それが尊い。そこに宗教の生命があるのである。

永遠の生命

本気による。ぐづぐづしてはをらない。何をやつても、どんなことをやつても、ほんたうの仕事は命を押出して行くところにあるのであります。吾々がこの肉体の生命に恋々してゐるといふところには、永遠の生命の輝きがないのであります。永遠の生命の世界に生きて行くときには、常にこの肉体を差し出して行くのであります。この肉体を愛護して、肉体の食慾や、欲望に心を握はれてゐるときに、われわれのこの大和魂の活躍は見えないのであります。普通にかうして魂の相を「犠牲的精神」といふやうな言葉

ことではないかも知れませぬ。然しながら其處に日本の國体といふことを、閑却されてゐると思ひます。日本の國体は今のソヴェトロシアが邪魔物にしたロマノフ王朝のやうなものではありません。日本の國体は鏡を以て照し給ふ國体である。我々は常にその照鏡の下に自覚者として生きて行くのであります。ですから若し日本にあつて、それがどういふ形によつて現はれて來ようとも、少數者の團体として現はれて來ようとも、また多數者の團体として現はれて來ようとも、いやしくもそれが劍をもつて、私共に臨んで來た時には、私共は彼等に対して、逆賊の名を与へなくてはならないのです。劍の力は常に鏡の支配の下にあつてこそ、それはならないのです。劍の力は常に鏡の支配の下にあつてこそ、それがに価値があります。無論日本人には鋭い劍はあります。その劍は場合によつては、自分を刺す覺悟のある劍であります。然し人を刺し自分を刺す劍は、常に鏡の照鏡の下にあつて、その輝きをなすものであります。常に鏡の生命の上に、躍動してゐるといふのが、日本の万世一系の天皇であります。

無自覺な労働者

病人が出来た時に、病院を建てるといふことも大事であります。又飢ゑたる者にパンを与へるといふことも大事なことです。職の無いものに職を得せしめるといふ施設をすることも大切であります。がしかしさういふことによつて人間の心が腐らないやうに自覺の道に誘ふといふことが一層大事なことです。私がかうしたことを云ひますと、或人は「お釈迦さんがさういふことを云ふてから二千五百年になるが、さう云ふことが実行されたことは無いではないか。何年経つても無自覺の人間が多いでは

ないか、だから、さう云ふことは駄目だ。二千五百年かかつてもちつとも実行出来ぬやうな道は駄目な道だ。それよりもやはり社会全体の革命といふものによらなければならない。」とかういひます。しかし今まで何遍社会組織を変へたつて、何が出来たか。「それで今新しう変へて行くのだ」といひます。しかしくら新しう変へて見たつて、その中に居る無自覚の者には何にもならないのです。自覚の者にとつては、どちらにしても大したことではないのです。

たとへばこゝに労働者がくる。労働時間が多くて賃銀が少い。気の毒だ。かういふことで、或人がその労働者の労働時間を短縮して給料を餘計やることにした。さうしたら、その労働者は給料を餘計貰つて、労働時間が短くなつたので、餘裕のある時間が出来た。さうすると、その時間を遊ぶことに使ふ。勿論研究するといふやうなことはしない。遊ぶには金が餘計要る。酒を飲むことを覚えた。博奕を覚えた。さあさうなると幾ら金があつても足らない。餘つた時間が却つて精力を消耗するために費される。かういふ具合になつたならば、さうした無自覚な労働者に時間を与へることも、労働者自身のためにはならないのです。

仏子の自覺

自分を尊ぶとはどういふことか。私たちはみんな神です。だからみんな偉いのです。自分自身くだらない者だと卑下してはいけませぬ。自分自らを卑下したりするから所謂自暴自棄に陥るやうなことになるのです。自分を大事にし、自分自らを尊ぶやうになれば、うかうかしてをれませぬ。勉強もし、仕事にも励むやうになります。

識は自分の生活に対し、又他人の生活に対して頗在意識より以上に影響を与へるものである。我々の内省の力が弱い時には、頗在意的のものゝ上にのみ自分を考へて、潜在的の自分を考へる力を缺いてゐる時がある。他人から思はぬ批評などをせらるゝ場合に、頗在的にこれを考へる場合、一向当らぬことでも、潜在意識で内省する時には、きつと當つてゐるのである。この点で善しろ悪にしろ、自分に対する他人の批評は、凡て自分自身の真相を曝露しないものはないのである。ところが内省の力の弱いものは他人の批評することが頗在的に當つて居らぬ場合に、怒つたり、果なんたりするのである。深く内省してみると、我が潜在意識の中には、凡て批評されるだけの事が、蘊蓄されて居る事に気づくのであります。

暁鳥先生に近侍して

山本勉弥

僅かの飯粒

先生朝食の後、飯茶碗を出して茶を求められたるに、給仕の者茶碗を受けとる、その意は別の湯呑茶碗を持ち来らんとするが如し先生その様子に気付き、特に前の飯茶碗に茶を入れ来るべしと注意する。茶碗に附着しある数粒の飯粒をも粗末にせじとの御心なり。此は唯一例に過ぎずと雖、凡て事物に対して勿体なしとの御態度の見ゆるは有難くも尊し。

病氣見舞

前二回萩に来られし時、八道弥七氏は先生の紹介演説をなすなど

るのです。そして自分が神であるばかりでなく、他人も皆神様であることを忘れてはなりません。だから自分を尊ぶと同時に他人をも尊ばねばなりません。昔神代の時代には人を呼ぶのにミコトと申しました。ミコトといふ字は尊又は命といふ字を書きます。この世の中にはつまらぬものは一つもないのです。みんな尊いのです。人ばかりではありません。山も川も草も木もみんな神様のお産みになつたものです。みんな尊いものです。我々人間も勿論神様のお産になつたものです。だから私たち人間は神の子です。お互に神の血を受けた兄弟です。そして天照大神の直き直きの現れとして齋きまつた生きたお姿が天皇陛下なのです。我々は神の子であつて、そして神を祭るのです。神様が神様を祭るのです。これによつて日本の天皇陛下と人民とは同心一体なのです。教育勅語は即ちこの事を教へて下さるので「億兆心ヨーニシテ」と仰せられたのはこの味ひです。仏教では「一切衆生」といふことを申します。これも「億兆心ヨーニシテ」と云ふ味ひであります。仏教では万人の心が一つになることを信心と申します。万人の心が一つになるといふのは、身体は一人一人別々ではあるが互の心が一つに融け合うた相をいふのです。これが即ち教育勅語の御精神であるのであります。

潛在意識の内省

近來の心理学では潛在意識といふことに考を及ぼすことになつた我々の言ふことやすることは頗在的のものである。考へることも頗在的のものである。此の頗在的の思想及び行為の外に、我々自身が考へつかない潛在意識が存在してゐるのである。その潜在意識が考へべきことなり。

入浴の模様

先生の入浴は先づかゝり湯をなし、石鹼を用ひてよく洗はれ、洗ひ流されて初めて浴槽に這入らるゝ由、お風邪を召さずと気遣はるゝ許りなりと浴室に侍したる人語る。もとより時候により、場合によりて、その模様は一様ならざるべきも、入浴の為め成る丈け湯を汚さぬこの細心の注意を払はるゝものなるべし。用ひたる石鹼をろくろく流し去りもせず浴槽にとび込む者など、往々にして見受くるが、公徳を重んずる先生の態度に鑑みられ度きものなり。

大自覺

先生の講話の中に私は無量寿なりとのお言葉あり。已が生命の永遠を確信し、縱横無凝に人間の大道を潤歩し得る先生の心境は羨ましき限りなり。

無邪氣

萩御出立の朝、予て御昵懇の尾篠女史は「お伴もあり私は御送りせずともよろしかるべし」と申したるに先生は直に「昨夜は送つて行くと云つたぢやないか、ヤエ」と無邪氣なる大声を発せらる、これには尾篠女史忽ち敗亡、直ぐ様用意をとゝのへ、美祢

郡の正隆寺まで御供をし、重ねて有難き法話に浴して帰る。

研学の意氣

松陰先生の俳句、高杉東行の手紙、伊藤公爵の書簡等を豊田市長の宅で見られた先生は、その内容を自分のものとし、又人にも知らしめんとの御心持ちで描写を依頼せらる。その智識の旺盛にして、青年の志氣衰へざるは、吾々の範とすべく、時間と資力と能力と努力とを持ちながら悠々たる日暮しをして居る人々に対しても沈黙の内に教訓を垂るゝと云ふべきだ。

すまへ

海野鏡圓師印象錄

しがき

美祢郡秋吉村村田凱一少将の御紹介で、萩仏教研究会及萩求道舎との連絡がついた海野師は昭和八年九月と昭和九年九月の両度來萩せられ、萩公会堂萩中学校萩商業学校などで御講話があつた。その内特異な会台としては萩警察署長駕旋の下に住吉座で、芸妓



姫妓女給其他特志婦人達百五十名が御訓話を拝聴した。此種の人々を中心とした講演会は一寸珍らしい。又河添真行寺の会では七歳位の少女が第二席の初めから訓話を終はるまで泣きシャクリを続けながらお話をきゝ入つた。こんな事は余も経験したことなく一般聽者に感動を与へたことは言ふを待たない。余は先生より感得したことを印象録として「法鼓」に連載したが、更にそれより抜録し、読者と共に感激を新にするこゝする。最初の一文は先生が初めて萩に来られた時の講演会の宣伝ビニ中に刷り込んだものであるが、先生の為人経歴を知るに便宜があるので採録した。

屑拾ひの聖者来る

空に聳ゆる殿堂伽藍には教典黄軸徒に死藏せられ、錦織を纏へる僧侶は高座に上りて傲然として民衆に仏恩の鴻大を説けども、更に人を化するの力なきは現代教界の通弊なり。海野鏡圓師は裕福なる連枝格の寺院長野県康樂寺に住職たりしも、深く教界の現状に鑑み、化導無力の来る所を察し、斷然自ら寺を去り、名古屋の貧民窟に膝に入るゝ計りの陋居を構へ、屑拾ひの業に従ひ、粗衣粗食貧民と共に共存共榮の生活を営みながら身を以て衆を率ゐ、眞に御同行としての実を挙げ教化に専念せらる。誰か師の慈恩の深きに感泣せざらんや。壇上に立つ屑拾ひの正装印半天の笠容は紙子姿の親鸞の崇高さと乞食姿の釈尊の尊さを髣髴たらしむるものあるべく、其の獅子吼は行学一致の靈火に燃えて、悚々として吾人に衝動を与へずんば止まざるべし。師の高風に逢ひ難く、然も今此機会に遭逢す、老幼男女来つて仏德の慈雨に浴せられよ。尊き御心持ちなり。

包み紙

萩市に於て公会堂への參集者は下駄を預くるよりも、帰途の混雑を考へ自ら新聞紙に包みて持ち込む習慣の者多し。廿六日夜の講話をきゝたる一人、物を粗末にしてはならぬと氣付き、何時もは下駄を包みたる新聞を路傍に捨つるに係らず、丁寧に疊みて持ち帰りたるに、是を見たる数名も是に習ひたり。廿七日夜の座談中その人が是を語り出で、語る者も聞く者も感慨深かりき。その為めその夜の聽衆は殆んど悉く新聞紙を持ち帰りしと云ふ。一小事とは云ひながら、一事が万事、かくなりゆけばその國家的効果の著大なるを思ふ、又更に先生が感化の大なるを思ふ。

宝の山

商業学校の講演を終へられたる海野師は藤本氏の案内にて明倫館碑、煙硝池、十一烈士の墓に詣で、更に弘法寺裏の塵埃捨場を视察す。從ふ者八道氏篠原氏山本等なり。多くの小丘をなす塵埃は異臭鼻を突くものあるも、先生は頗る愉快げに各所を歩きまはり中々よいものがありますねと云ひながら、モスの布片をとりあけ之は布の内に最もよく一貫十九夷の価値あり、撰別し拾ひ取り得るものは五十三種あり、此處は日々運び来る車の数より割り出だし、一日六円位のものを選り出だし得べしなど語らる。最も不潔不快なる処なるに係らず、職業柄先生には宝の山とも見ゆるなるべし。

商買は金儲けの爲ならず

高松中学の配属将校なりし井上少佐は次の話をさる。氏が丸龜に居りし時新兵掛をなす、隊中見覚えある一人あり、お前は何と云ふか。秋山と云ひます。見た事があるが何處の者か。金比羅社の下で、中隊長殿は演習の際私の家に泊られました。然らばお前は盆屋の息子だ、私によき盆を作つて呉れるか。よろしい然しあれば、帰りて家族と共に煎じて頂かんと思ふ。尙相成るべくは早く老母と妻を萩に伴ひ、同神社に参拝せしめ度しと海野師語らる。尊き御心持ちなり。

遊学と云ふ言葉あり、帝都へ或は欧米へゆく学徒など此の言葉通り遊び学ぶらしきも、余は此の言葉を甚だ面白からず思ふ。面白

く者驚いて眼をみはる。中隊長は一同に氣をつけ、眼をつぶれと号令し、よく落ちついて考へよと附言す。沈黙少時、秋山は泣きそうな声を出して叫び、中隊長殿お約束はしましたが、私にはどうも出来そうにありませぬ。どうかお許し下さい。よし止むを得ぬ。然らばお前は金儲けの為に職をすると云ひきつたが、そうではなかつたか。ハイ。中隊長一同に向ひよくきけ、凡ての職業をなすは金の為めではないぞ。造つたものを人や社会の為めにお役に立てんが為で、金儲けは末の話だ。金よりは魂が大事だ。この心持になつてこそ眞の日本男子だ。戦場に出かける軍人は此の精神を忘れてはならぬと厳しく訓誡した。以上は海野師が力強く語り出でられたる處で、滔々として拝金宗に赴きつゝある現代の人心には空谷の跫音とも響くのである。

簡易なる実行要目

海野師は老幼を問はず、食事の前後に合掌して感謝の至念をなすこと、己が食事に用ひたる器具を洗ふことを力説勧奨せらる。是は頗る簡易なる実行要目なるも、是によりて自己を知り、社会の恩恵を感じ、労働の神聖を味ひ、驕慢に陥らんとする凡腸を浄化するを得べく。先生自らも諸行願現の第一歩として、実践せらるゝ処なり。

出征軍人の見送

某村に於て出征軍人を見送るべく、一同氏神さまの社前に会合す激励の辞を述べる人もありしが、村長は自分はこの際何も云はねたゞ是だと両手を合せて一行を拝みたり。後に兵士の語る処に依

れば村長の態度には非常に感激し、一死國恩に報ぜんと心中に誓ひたりと云ふ。

凱戦して帰りたる時、旗を振り万歳を唱ふるは、歓喜の情を現はすに、誠によろしきも、出征の際は多數の見送り人が悉く合掌して、無言に軍隊を送らば、如何許り強き感動を与ふる事ならん。若き妻君娘達が化粧を凝らし、美服を纏ひて万歳／＼などやりては、戦場にゆく人も少しく後髪引かるゝ思を起さずとも限らず。

塵埃箱哲学

海野師と共に新堀を歩む。某家の前に在る埃箱の中に飯粒のあるのを見られたる師は勿体ない事だ、大凡埃箱を見れば、その家の家風が明瞭となる。よき家はいよ／＼廃れ物のみを捨てゝありと余は此處は芸妓置屋業町なりと云へば、此の種の家は最もよろしからずと云はる。生活状態が凡て浮き／＼したるに因るべし。

無駄防止

海野師曰く、私達は職業柄、拾ふことをのみ人に勧める様、誤解せらるゝも、決して然らず、如何なる小物をも勿体なく思ふ事を勧めんとするなり。此の意味より云へば、拾ふ事よりも寧ろ捨てぬ事を提倡するものなり。最近満洲だよりの内に近時兵士の弾丸が割にあたらずとあり。此は練習の如何によるべきも、ゆ／＼しき大事なり。平生一粒の飯、一片の小紙をも大事にあつかう信念の人は、動作落ちつき、万事入念に、弾丸の如きも自然にその効果を多からしむることゝなるべし。

文化住宅

永年住み慣れたる大伽藍を去り、己が三疊の陋室に安居して悔ゆるの色なきは、在來の習俗に執着し易き者姫としては、實に稀有のことにして、師に対するよりは更に一層の敬虔の念を起さざることを得ず。師が今日所信に勇往突進し得るは全く母堂の悲恩によることゝ思ふ。

尊さとえらさ

現代の教育は学問技能才幹の秀づる人物を作るに熱中す。即ちえらき人を作ることに没頭するも、静に思をめぐらせば、此の英才教育方針は多くの人に適用すべきものならず、寧ろ尊き人を作るこことの更に緊要なるを感ず。不具の者も病身の者も貧窮の者にてても、己が修養一つにては尊きとなり得るものにて、是は主に宗教によりて達せらるゝ道なり。近來宗教の必要が力説せらるゝは、此の間の消息を物語るものなり。彼の俊髦にして然も尊からざる人の多く存するは、社会を益々不淨化する所以にして、物質文化の弊なりと思ふ。

伴天姿

海野師曰く、余の服装に関しては色々珍談奇話あり、一二の例を挙ぐれば尾道市に行きたる時、警察署長は駅に出来へられ好遇せられたるに、その後余と同行を避くるが如き態度あり、いぶかしく思ひ居りしに、是は出迎の際大きい盗人がつかまつて行くと私語するをきゝたるによるなり。愛知県庁に招かれてゆきたる際も社会課長に面会に来りたりと云ふを信ぜざる玄関子の為め追ひかへされたることあり、かかる幾多の出来事あるも余は少しも意に

無筆の書

文化生活とは何事も簡易にして、用事が運び易く、器物も二重三重の要をなすにあるべし。私は妻と共に二疊の部屋に住む、一疊の押入より、蒲団を出せば押入も寝室の一部となり、長身の余が足は此處におさまる。家中の掃除は五分もあれば出来、年中大掃除なり。狭き所に居るなれば、何等の秘密も生ぜず、家庭は頗る円満なりと師は笑はる。師又曰く、私の家は安心立命の家なり、地震ありても棟木が落ちて、压殺されゝ恐れなし、崩れかゝりても下より手を出せば、屋根位は楽に支へらる。旅行中故郷に火事ありときゝても、別に心配せず、焼けて借りと思ふ物もなく、焼けた處で、再建築は、大抵拾ひ物ですみ、二三十円もあれば住居が出来上ればなりと。誠に気楽なことなり。心に足るを知る、何處か富楽安穏の処ならざらむやである。

廣大なる悲恩

熱烈なる求道の旅中、海野師は岐阜に於て終に無上の道を得、歡喜湧躍、自米己が得たる仮の慈恩を大衆に分たんとして、その理想に邁進せらる。師にとつて世路の艱難少しも苦と感ぜられぬは至当なりと評し得るも、母堂がその愛子の進む所をよく諒解して

介せず、軍人が軍服を着る如く、肩拾ひとしては、是が正当の服装なりと思ふ。百姓労働者の多くは此の服装にて日本人中最も多くの人の着る所なれば、数の上より論じても、決して卑むべきものにあらず。ある人は問ふて如何なる高官の前へもそのままにして行くかとのことなりし故、然りと答ふ、もつとも私は用事の為め先方より面会を求めらるゝ處へのみ行くことにして居る故、是にちつとも差し支へずと云へば、その人あつさりして居るねと云ふ。

取ると頂く

言少しく奇なるも、世の中を盗人と乞食との二つに見る見方もあらべし。言葉の上にて嫁をとる、月給をとると盗的に言ひ習はずも、是は月給を頂く、嫁をいたゞくと云ふ風に乞食的に解釈すれば、一家社会も円満、嫁と姑との不和、小作人と地主の不調も直に解消すべし。娘を嫁にやることを片付けると云ふも、是は娘が如何にも邪魔物でありし如く感ぜられ、よき言葉に非ず、貰つていたゞきましたと、言ひ習はし度きものなり。

羨ましがらるゝ人

世間の人が、あの人は結構な身分だ、えらい人だと云ふ方々を如何なる人かと見るに働きもせず、遊んで暮してゆける人を指す事多く、私が康樂寺に住職をして居る時など、将にこの立場で、人から羨ましがられたに違ひない。然し働いて居る人よりお米を頂いて居りながら、一向努力もせずに遊んで居ては、それこそ地獄へゆくより他に道がない。私が寺を見捨た理由はいくつもあるが

、その一つは正に是だ。富豪を羨しがる人もあるが、かの吉屋刃の高莊なる別荘が外門より玄関に到るまで幾ヶ所も戸締りがありて、暴漢の闖入に備へ、多くの強迫文に怯えて居る人の多きを思へば、思ひ半ばに過ぐるものがある。日々意義ある活動をするのが真の幸福なので、自分達が今日の心の平安さは、以前に比し、その衣食住のまづさと反比例して、全く極楽へ解放されたが如き感じがするのである。ともかく労働なき宗教、宗教なき労働はいつも欠陥のあるものである。

お白粉による厚顔

拾ふて來たキュー・ピーの頭や、仏具のかけらを陳列してある粗末なる余が二疊の居室を見て、浄土宗信者である某学校の先生が感心し、翌日何かの参考とせしめんと、その妻君を伴ふて再び来られたが、妻君は辛苦しく簡粗な模様を見て、一向感服をなされず、仏頂面をして居る姿は全く恐ろしくなる。成程妻君は奇魔な服装に金の指輪をはめ、お白粉がこてこて厚く塗られて居る。お白粉の防弾装置厚きが為めか、夫君が感じられた万分为の最も感興をひかないのみならず、寧ろ反感を持つた様だ。

信仰と生活

仏さまは常不輕菩薩の行為をもつて万人皆礼拝すべきものなるを教へられた。仏教各宗は實に此の拝むに統一せらるべきものなりと考へらる。処が信仰ありと称せらる多くの人を見るに、その信仰と生活とはバラードになり、唯だ口で題目念佛を唱ふるも、日々の生活の上に、職業の上に仏の精神が少しも現はれぬことありひたるに、分会長は暫時して、私は戦争に行つて居つた時の真剣な気持ちを忘れて居ましたと涙を流して云はれた。即ち誰でもほんとうに、己が職業に覚めて、その存在的価値を知れば、その服装の如き如何に粗末でも少しも恥かしいことはない。皆さんも正しく有意義に働けば私は帝國在郷の芸者であります、と広言して大道を闊歩し得る筈だ。卑屈な不合理な生活をして居つては、道を歩くにも何だか気がひける思ひがするであらう。

自力更生

不具であるとか、頭が遲鈍だとか、無学であるとか、職業に就た者とかは、えらくなる事は先づ六つかしい。然し何も悲觀するのではない、自分の心がけ一つでは人から感心などほめらるゝ尊い人にはなり得るのである。現代は悪く賢く、えらい人が多過ぎる、健全な社会を構成するには、寧ろ愚直な人の多數を必要とするのである。

南州翁

私は西郷南州に似て居るそなと、生徒を笑はせながら、南州翁は名譽、女、金、生命のいらぬものでなければ眞の人間にになれぬと云はれた。処が私はこの四つのものが皆欲しい、是ではいけぬと気がついて心の鍛錬には餘程苦心をした。皆さんも此の金言をよくよく詫味して凡ての執着をとり去る様に心がけねばならぬ。御飯を拌がめと云はれても、始めのうちは何だか恥かしい思ひがするかも知れぬ。然し自分がよいと気がつけば人がどう思ふとか、駄裁が悪いとか云ふ様なことは全くとり去つて、所信に突進

。岐阜県大垣市大橋家の五歳になる男の子が、こぼした一粒の御飯を拾ひ、いたゞいて食べたのを見、その母は海野先生の御教訓によること、非常に喜んだ。落ちた食べ物を拾ふてすぐ口に持つて行くのは非衛生で、しかも吝嗇家のなすことだ。拾ふたものを一度額の処にいたゞけば、是で消毒が出来たわけで、食べても決してあたらないと先生は云はる。後半の如き理屈はないと一応は思はれるが、頂くと云ふ処に、その心は感謝に満ち、凡ての物がおいしく味はれ、かかる人に限つて心は落ちつき、腸胃も丈夫であるから、少し位ひ不潔のものがはいつても滋養になる許りで、決してあたらない。是は先生が日々の経験による大なる自信であると思はれる。胃腸が丈夫であれば、コレラ菌を嚥下しても大したことがないとすむのと同じ事だ。余は是を精神的消毒と称へ度い。

自覺と服装

岐阜県である在郷軍人分會長が私の神天姿をいぶかしむので、あなたは何故軍服を着て居ますかと反問したるに、姿勢を正して私は帝国の在郷軍人であります、依つて軍服を着て居りますと答ふ。余は直に声に力をこめて私は帝国在郷の肩拾ひでありますと云

せなければならぬ。右を見左を見て氣兼ねをする様では、とても南州翁の様な大人物にはなれない。

厳肅簡素な結婚式

私の結婚式に当り、母は長いもの（紋付のこと）を着ますかと問はれますので、やはり是でやり通しますと答へた処、破談になりますが、母上は色々調査の上、よいと決心されたのであります。はせぬかと気遣ひ、少しは難色があつたが、終によく私を諒解して呉れました。花嫁は真白の衣装、私は真黒の袴、それでも儀式は頗る厳肅に行はれ、列席の親戚はその厳肅さに涙を催し、而して葬式の様であつたと附言しました。生れ代つて新生活に入る此際葬式と云はれても不吉ではなく、寧ろ適切な言葉の様に思はれた。披露の宴もかきませ鮓に少しの物をとり合せ、一人前十三両五厘ですんだ。私が康楽寺の住職として結婚式を挙ぐるとすれば一万円位の費用を遣ふことでしようが、今はこの簡素で事が足り、心中は却つて一種の安らかさを覚えました。

母上まかせ

私は妻選びを母上に全くおまかせしてありました。母上のお気に入りの者が見付からなければ、それなりでよいと思つて居ましたがある候補者に就て母上は五日程一つ家に住み、様子を見ましたが、結局気に入らぬと云はれる、それはある朝、顔を洗ふのに手拭を肩に掛けて居たと云ふのです。たゞ手拭の持ち様だけの事です。何だか向ふ鼻息が強すぎて、特殊な私の家庭に融け容れられる氣質でないと見られたのです。現在の妻に就て、母上はよいと思ふから貰うとしようと云はれますので、私は承諾しました。何

處に居るときますと、朝鮮のこと、逢つたことがありますかと云へば、ないと云ふ、家庭の宗教はと問へば日蓮宗、年まはりは丙午との事です、如何なる容貌かと写真を見ると、当世向の頗るハイカラです。真宗の家筋である私へ、選りも選つて日蓮宗の家から、しかも強い干支の丙午の娘、何だか不似合ひの様であります。母上は色々調査の上、よいと決心されたのであります。信頼する母上への絶対のおまかせ、此は私の信仰の小さい姿であります。母上の御心尽しの悪からうこともなく、自分で云ふのはをかしくあります。家庭は頗る円満であります。

御勅語

北条時敬先生が広島高等師範学校の校長をして居られた時、一日学生を講堂に集め、教育勅語の感説をせられた。その際數人の学生に向つて「汝臣民」とは如何なる意味であるかと尋ねられたるに悉く「汝臣民」とは我々日本国民のことでありますと答ふ。左様に思ふ者は手を挙げよと云はれたが、唯一人山田と云ふ生徒が手を挙げぬ。先生は山田へ、おまへは何と考へるかと尋ねたるに、直立不動の姿勢をとり、「汝臣民」とは私の事であります。私はかく感じますが為に、お勅語を挙します毎に、誠にもつたないな。有難さが身にしみますと答ふ。先生は喜んで云はるゝには、その通りだ。自分はこの返答をするものを求めて居たのだ。よく云つて呉れたと感激の涙を流された。「汝臣民」を複数に考へずには、たゞ自分の為めに仰せ下さるゝと氣付てこそ実感が高まるのである。

は別著があるので茲には触れない。

萩自彌会 趣意書

本会は岩田博藏、岡村勇二、小倉信恭、北川為吉、山本勉弥の五名が発起し、左の趣意書綱領のもとに大正八年七月廿一日萩商業学校講堂で創立総会を催した。民力涵養の声の高かつた當時としては適切のものと認め中川望山口県知事は祝辞を寄せられた。



序言

余の萩に帰着するや、壯年の情熱ほとばしるところ、興趣の赴くところ、小理念の実現を計り、自由奔放に事を企て、因循姑息に傾く当時の萩には不相応の存在であつた。三、四の例を挙ぐれば正月には山本道場と称し加苗多会の本陣を備へ、隆盛十数年に及んだ。又友人と共に巴城俱樂部をつくり（初めは東田町後には西田町）撞球台を据え、碁、将棋の盤を備へ、十数年持続し、後には読書会を設け、読み得たることを話し合つた。尙医事関係のことの他には仏教研究会を同志先輩と共に組織し、機関誌「萩文化」を発刊すること八ヶ年に達した。今茲にこれら行動の一部で、発起人の一人として些か忌憚した萩自彌会、萩護国少年団、自警会の三会のことを誌することにする。只憾むらくは記録の完備したものがなく、多少の参考資料と余の記憶に原づいたものであるから、隔靴搔痒の感あるを免がれない。尙余が社会運動として牢記すべきは「萩電争議」であるが、これに就て

し、大にしては国家社会の為、大に努力貢献する所あらんとするに他ならず。冀くは同感の士奮つて入会せられんことを。謹白。

大正八年七月

発起人

岡村 勇二

山本 勉弥

河名 謙雄

萩自彌会綱領

一、外来の思想を咀嚼同化し、以て益々我國体の精華を發揚すること。

一、日新的修養を積み、自彌不息、以て向上發展に努力すること。

一、沈衰退變に傾ける地方の氣分を一新し、以て民力の伸張を企劃すること。

一、偏見陋習を打破し、進取の氣象を振作し、以て世界の大勢に順應すること。

一、一斉蹶起、万難を排し、以て吾人理想の實現に奮闘すること。

本会員は九十六名に達し、萩に於ける知名の士は殆んど網羅した。会場は多くは商業學校の講堂であった。例会は三、四ヶ月に一回開き、会員は夫々得意の演題の下で講話を続けた。其一般を知るため講師及び演題の一部を記すことにする。

一、教育政策より見たる萩地方の長所及短所と之が救済策の一端

堀田 断藏

大橋 明治

三上 純象

福谷朝太郎

豊田 鑑

小倉 信恭

一、口腔衛生に就て

一、教育上より見たる地方の教育設備

一、京阪勸業視察談

一、東北日本の天地人

一、輕鉄問題に就て

大正八年十月 発起人 八名署名

綱領
一、大日本建国の理想を領会し、以て公正雄大なる興國の氣風を養成すること。

一、健実なる宗教心の涵養に努め、以て個性の靈能を發揮すること。

一、時代の進運に鑑み日進の修養を積み、以て護國の大任を自覺すること。

團規

一、本團は當分萩町北古秋妙蓮寺内に設く。
一、本團は毎日曜午前九時より約二時間少年少女を集会せしめ、本團の趣意に従つて訓育を施す。

一、本團は健実なる宗教心の啓發に努むと雖、何等宗教的儀礼を用ゐず。

一、本團に入團するとも何等の團費を要せず。

萩護國少年團々歌

一、我が日本の本は かしこくも 国うち建てし 始めより
天地の闇 照らすべく 旭日を國の 象徵とす
二、万代易へぬ 天皇の あらゆる國を 統べべく
あらゆる民を 救ふべき 使命おひたる 神國ぞ
三、神の恵に 生ひ立ちし 我等は神の 御子なれば
神のみ国に 相應しき 雄々しき宗教 身に受けむ
四、かくて幼き 心をも 劍の如く 鐵ひ上げ
神國おかす ものあらば 命を楯に 守らなむ

この團歌は山本が草案をつくり、香川氏が校正添削したものであ

- 一、民力共進会の施設と萩町の将来
一、鷗寄生虫駆除問題
一、宗教我觀
本会は余り永く繼續し得なかつた、先づ三ヶ年位と思ふ。

萩護國少年團

萩日蓮主義研議会の紀野俊耀師、山本勉弥、村田清熊、世良捨松、二階栄の五氏は香川政一、佐伯清音、原実亮の三先生と共に発起人となり、萩護國少年團を創設し、十月三十一日発團式を妙蓮寺で挙行した。趣意書綱領團規團歌は左の通りである。

趣意書

今や外世界の列強は我を圧し、内思想界の混亂極りなく、二千六百年來、国歩の艱難今日より甚しきはなし。赫々たる建国の理想と無比の国軸を有する我大和民族、將に一齊に蹶起して国家的に自覺せざる可からざるの秋なり。

見よ、各地には壯年團青年團等新に組織せられ、以て國力涵養に努めつゝに非ずや。而も國家的道念と健実なる宗教的信念は幼少時に於て、其萌芽を育成するの必要なは火を賜るよりも明かなれども、未だ此理想を表現する少年團の創設せらるゝをきかず。從来萩地方一、二少年會の存するありと雖、現下の國状に鑑み、興國の大氣魄を喚起せしめんとする吾人の理想を去ること遠し。茲に於てか吾人一片、憂國の情禁ずる能はず、同志の贊助を得て萩護國少年團を設立し、左記三大綱領に拠りて児童の育成に努めんとす。願はくは時事に感奮せらるゝの士は奮つて子女を托し、又吾人の拳を助けて一臂の労を惜む勿らんことを。謹白。



自警

余は和歌山中学校に在学中、上級生の驥尾に附して精神修養会の

一員となり、孟子の語録などを説述したこともあつた。又福岡医科大学在学中には同志と共に木曜会と云ふ修養団体を作り、富豪渡辺与八氏の特志により、建設せられた木曜会館に寄宿し、会誌「木曜」を発行した際、会の幹事をつとめたこともあつた。かかる経験により、学生時代、修養に志すことの意義頗る大なるを感じ得し居れば、萩中学校の校医となるや同感の生徒あれば、外護の役を買って出でたしと思ひ、岩田校長、北川大佐に協力を依頼し、偶々来校せる國士福本日南先生の激励を受け、自警会を起すことをなつた。日南先生は前記木曜会館の開館式に臨席し、祝辞訓言を与へられた方である。生徒控室に換わられた次の会員募集の檄文は實に先生の校正に成るものである。

創立趣意書

足を揚げて英雄とならんか、歩を停めて凡夫に終らんか、進んで右せんと欲するか、退いて左せんと欲するか、卿等は方に分路の岐頭に立てり。諸子それ自重せよ。卿等は卿等の校是に鑑みて、松陰先生の大精神を躰得し、一人興國の意義を發揮するに非ずんば千古不回の悔恨を青苔の下に貽さんのみ。余等私に此に感あり、茲に卿等の為に本会を創設し、先輩の芳躅を追ふて、前路の荊棘を驅き、自強自立、大有為の素地を建造し來らんとする。若し其会規の条章に至りては、行々卿等と慎重圖議し、万機公論に決すべきのみ。在郷青襟の諸子請ふ、奮ひ起つて是に会同せよ。

大正九年五月一日免会式兼第一回例会を山本宅に開く、來聽者三

会合の場所は主として山本宅であつたが、松陰神社々司の特別の配慮で、松下村塾四回、幽囚室のある杉氏邸二回などがある。例会の模様は会員の思想談、苗穂録等松陰伝の輪読、静座法の練習、「心の力」朗誦、会友及び紀野俊耀師、夏原由三郎先生、京大生弘田義助君などの所感談があつた。特殊な催しとしては贋写しと吟誦録を携へ、井上茂氏を先導として指月山上の詩吟会を大正十年二月にやり、山田村の奥で兎狩を大正十一年三月にやつたことである。田中義一大将は吾々の拳をきかれ、獎励の意味で二回も記念写真に臨まれた。会誌「自警」は、大正十年四月に第一号、大正十一年三月に第二号、大正十二年四月に第三号を出し、好記念となつて居る、「自警」表紙の文字は安藤紀一先生の筆、図は宮内謙吉君の考案である。以上会合のことは大正十一年十一月例会までのことで、其後尙一年余りは会を継続したのであるが記録がないので、不明である。参考の為め会員と会友の名を記す。

大正十年度卒業生 柴田美稻、桜井武三、金子栄一、篠原智雄、鈴木博。

大正十一年度卒業生 宮内謙吉、高田良雄、柴田敏夫、井原師郎、仁尾重視。

大正十二年度卒業生 藤井勝三郎、木原秀雄、岡村斌、香川義信、波多野義貫、羽鳥弥救、鳥居勝、山本公輔。

大正十三年度卒業生 福田幹雄、杉丙三、井上亮介。

大正十四年度卒業生 福田幸雄、山本斌、岩田貞夫、藤村五郎、山本浩、倉重達郎、三原清治。会友岩田博蔵、北川為吉、山木勉弥、石川修三、安藤紀一、原田貞男(儒者)、樽屋町住。)

十三名、岩田、北川の兩氏は所感を述べ、山本は本会の趣旨として左記七項の修養目標を説く。

一、生死の間に處して惑はざる底の大悟大勇猛心を養ふこと。
二、静座工夫以て靈格を養ふこと。

三、必死の覚悟を以て事に當ること。

四、浮華形式を去り、内容の充実を計ること。

五、自尊自主、独立不羈の精神を養ふこと。

六、先輩遺烈を追ひ、防長の精華を發揮すること。

七、高尚なる趣味を涵養すること。
(自警第一号参照)

会規は桜井、柴田、金子、高田、宮内、福田、岡村の諸君が大正十年一月十五日山本宅に集り、草案を作り、一月廿二日の例会で

討議、多少の修正を加へて可決した。

自警会規約

第一条 精神修養に志し、品性の陶冶に努むること。

第二条 情誼を厚うし、親睦を計ること。

第三条 本会は山口県秋中学校生徒及び卒業生の有志者を以て組織す。

第四条 本会は功労ある先輩を会友となすことを得。

第五条 本会は一学期数回例会を開き、会員は進んで感想を交換し、時に先輩の講話を乞ふこと。

第六条 遠足会を催し、雑誌を発行することあるべし。

第七条 三、四、五年より二名宛の幹事を互選し、会務の責に任せしむ。但し其任期は一ヶ年とし、再選をなすことを得。

第八条 入会せんとするものは会員二名以上の紹介を要す。

萩町長林勇輔氏退職の経緯

林町長重任反対町民大会

昭和六年九月一日午後八時より萩町公会堂で標記の大会が開かれ、左の演説と決議が行はれた。

林町長に対する私的交渉の顧末

萩町ファシズム化の吟味

暴政を葬れ

郷土町長を要望す

林町長排撃の要旨

町政の危機

一回目大

計画的専任運動

決議文「吾人は林町長を信認せず、依つて速に自決すべし。」

実行委員、八道弥七、山本勉弥、吉松毅章、藤井頼三、村木五一郎、藤山清太郎、三輪音吉、末岡周介、藤道藤太郎、田坂信一、吉田理、椿敏彦、松本雅楽。会衆約三千名非常な盛会であつた。十二時閉会後、実行委員は打揃ひ、江向の町長宅に至り、決議文を突きつけ、交々其自決を促した。聴衆中約五十名は実行委員の跡を追ひ、町長宅に來り、玄関などに頑張り、交渉の結果を待つた。町長は六日に回答する由を答へたので、一回は一時廿分退散したが、一時は同邸附近は騒々しかつた。

町長の不評判

右のやうな騒動が勃発するに至つた原因を概説すれば左の通りである。

昭和二年八月林勇輔氏は四坪内合併後の大萩を治めるには事務練達の人として、好評を以て町長に迎へられたのであるが、それ等事務的の事項が一通り始末が付いた今日では、少しく物足らず、積極的政事手腕のある人を次期には迎へ度しとの空気が有志の間に起りつゝあつた。斯様な時林氏にとつては不運にも色々面倒な問題が起きて來た。

その第一に数ふべき事柄は助役金子清一氏が三月二日に死去したことである。後任を推挙すべきであるも、町長自身が半歳先きに再選されるゝや否やが不確定である為め、人選難となり、選定を町会に委ねんとの話しもあつたが、結局町長は宮崎宗十郎氏を推挙して五月十五日漸くその決定を見た。次に林町長が町会を無視した越権行為（特別戸数割条令の違法設定）が曝露し、町会内の空気が俄然悪化した。町長はこの責任を部下の者に転嫁し、部下の謝罪によつて問題を糊塗したが、町長の其態度がまた攻撃の目標となつた。六月に入つて町の有力者八道、末岡、小林作平の三氏が町長を訪問し、町長には重任の意思なきことを確めた。また町長は六月廿六日町会議員列席の所で吉松議員の質問に応じ、自分は任期満了後重任の意思なく、満了前二十日頃に正式に町会に自分の意思表示をすると答へた。

八月十七日町会の席上で、自分は引退して静養したいと思ふから、再選せぬ様お願ひするとの町長の挨拶があつた。議員はそこで

第三者の仲裁と吾人の態度

山本 勉弥

椿 敏彦

田坂 信一

戦の重点は移る

不可解なる林町長の態度

決議文は山本勉弥を座長に推して之を決し、実行委員十名を追加推選した。決議、新委員は次の通り。

決議 文

現下萩町政ノ紛糾ハ人ヲ欺キ己ヲ欺ク林町長ノ不信ニ基因ス此ノ

上尚躊躇遂巡徒ニ其ノ椅子ニ恋々タルニ於テハ萩町政ハ益々紛糾

シ風教ヲ害シ思想ヲ悪化セシメ終ニ町政上ニ一大汚点ヲ印スルニ

至ルコト明カナリ須フク萩町将来ノ為メ速カニ自決スベシ

右車ネテ決議ス

昭和六年九月六日

第二回萩町民大会

追加実行委員。来島谷藏、森田伊代蔵、高屋芳一、山本宇一、渡

辺筆助、村岡新吉、榎谷孫一、有田経七、長嶺源一、村岡喜代植

午後十一時半大会終了後、実行委員全部は別室日本室に集合し、

決議又手交方法に就き協議の結果、山本勉弥、村木吾一郎（当日

事故缺席）、田坂信一、松本雅楽の四名を選んだ。以上三名は八

日朝秋発自動車にて県庁を訪ひて陳情、更に帰省中の林氏を熊毛

郡島田村に尋ね、決議文を手交し、同日午後七時帰萩した。

林町長及町長擁護反対

兩派議員の行動

林町長は九月一日実行委員に約したる通り、九月六日宮崎助役の手を経て、左の回答書を山本勉弥宅に午後九時十分持参し、山本に手交した。

直に協議会を開き、詮衡委員として山本勉弥、田中太郎吉、大田民藏、福田一良、土井幸穂の五名を選んだ。詮衡委員はその多數意見により町長重任懇請の議をまとめ、其旨を町長に伝へた。十九日初の内は固辞せるも委員の懇請に対し、回答の保留を申し出で、次で廿八日承諾の返答をした。廿九日の町会に委員より報告あり、賛否を起立に問ひ、二三対五にて可決した。但し此の選挙手続に違法あり、無効なること判明、翌卅日更に選挙をやり直す。結果は林勇輔一九票土井市之進五票福田茂穂一票にて林氏が当選した。林町長は自己の意思で重任を謝絶し得るに却らず、其挙に出でざるは、老練人を欺けるものなりと、有志を激怒せしむるに至つたのである。

林町長排撃第一回町民大会

標記の大会を九月六日午後八時より萩公会堂で開催、聴衆約二千五百名、当日は民衆の排撃気分高潮に達し、萩署よりは田坂署長自ら臨監する他、所在地勤務者全部を召集し、会場の内外を警戒した。辯士演題左の通り。

開会の辞

萩町政の内幕に就て

排斥の理由

危機を孕める萩町政

弱者の声

林町長回答報告並所感

自治制の破壊を奈何せん

末岡 圭介

藤道藤太郎

村木吾一郎

吉松 裕章

来島 谷藏

松本 雅樂

八道 弥七

（松本代読）

萩町長自決御勧告に対する回答裏ニ本職ニ對シ自決ヲ求メラレタルコトハ己ノ立場トシテハ眞ニ感謝ニ堪ヘザル所ニ候モ萩町ノ代議機関タル萩町会ニ於テ選挙ノ結果町長ニ重任シタル關係上公人トシテハ町会多数ノ意思ヲ尊重スルヲ以テ正当ノコトナリト信シ候ニ付乍遺憾御勧告ニ応ジ兼ヌル様ニ存候右御諒承被下度及回答候也

昭和六年九月六日

萩町長 林 勉輔

実行委員各位

又町長擁護派廿三名（反対派議員五名は全部欠席）は六日午前九時町衙楼上に集合し、満場一致、次の決議文を可決して是を林町長に手交した。決議、吾等は町会の大多数に依り再選せる萩町長林勇輔氏を信任す。萩町会議員二十三名連署（九月八日付長州新聞参照）

この日萩町政界の長老國重元代議士、寺島貴族院議員の兩氏は両派の調停を試みたるも、事態硬化の際とて不調に終はつた。九月十六日附長州新聞の報する所によると、擁護派議員は声明書を発して、氣勢を擧げんとの議があつたのを、自重して見合はすこととなつたので、反対派に於ても町議間の紛糾を軽減する意味で用意の出来て居つた声明書を差し控へ、暫時静観する旨を発表した。余は九月十九日県会議員に立候補し、反対派の者はそれに専念する内情もあつた。余は多数同志の熱烈な応援と久原、渡辺両先輩の推挙のお蔭で、幸ひに当選することが出来た。一部の人はこの戦勝の勢に乘じ、排斥の狼火を擧ぐれば目的達成は易々たりと論じたが、静観聲明の手前、差し控ゆることゝし、町長が自發的に善処するの餘地を与ふることゝした。

余は数個の理由を以て、十一月九日決然町会議員の職を辞した。その理由の一つは町長の自決を促すの意を含めたのである。而して余の辞任により、町会に四名の欠員を生じたので、此際補欠選舉を行ひ、町長排斥と擁護の孰れが現下の町民の意思なるかを確むる資料とせられ度しと提言した。町長は補欠選舉施行の権限が自己に存するに却らず、十一月廿七日の町会に可否を諮り、挙行せぬ責任を卑怯にも擁護議員に転嫁し去つた。余はこの状況を聞き、憤激に堪へず、唯一人にも静観を打破、排斥に突進せんとし、林氏を訪ひて決意を告げ、速かに自決せんことを勧告した。余の同志も期せずして余と感を同うし、共に蹶起して町民大会を催すこととなつた。

萩町政革新町民大会

昭和六年十二月二十四日午後七時寒雨そば降る歳末の夜、第三回

林町長排撃町民大会を開き、左の演説及び決議をなす。

静観打破

萩町会の清算時機

子供の火遊びと萩町政

挙町一致を妨ぐる町政の瘤を去れ

今日の萩町会

次に山本勉弥座長となり次の決議文を可決す。

決議 吾人は町政の刷新を図らんが為め無責任なる林長を排斥

し有力なる郷土市長の擁立を期す

第三回町民大会

田坂 信一
藤原藤太郎
吉田 理
山本 勉弥

山本勉弥の紙上言論

余は第三回町民大会に引続き一月中には五回、長周日々新聞紙上町長排撃の筆を振つた。標題等左の通り。

静観を打破して再び起つ、保身の術に浮き身をやつす林町長、

(一月九日)

静観を打破して再び起つ、尙仮死を装ふて萩を毒すか、(一月十日)

日本人ならば速に自決すべし、忘年会は宗旨破りの懷柔策、(一月十四日)

戸数割問題と萩町長の不誠実、(一月十九日)

青年指導の能立なき萩町長、青年諸君の奮起を要望す。(一月廿六日)

この日の一文には偶感新詩一篇を添へた。

汚吏追放の歌

一、起てよ青壯年

我等が鉄腕鳴るとき

曼天覆へり

傲然と虚位を擁し

地軸裂けん。

二、起てよ青壯年

我等が心血凝るとき

晋作と燃えて

回天の業は成れり。

三、無恥の一人物

清風松陰の

靈地をけがす。

衆議院議員選舉と土井市之進氏町長擁立説

一月下旬郷土の偉人久原房之助氏の衆議院議員立候補が略ば定まつた。この際吾々の行動を如何にすべきかを協議すべく、実行委員は山本宅に一月廿七日集まつた。一部の人は萩区政友会役員の多くは吾々と反対の立場にあるから、此機に一矢酬ゆべしとの説をなしたが、山本等は林排撃と選舉とは結び付くべき筋合のものでなく、寧ろ排斥運動は其手をゆるめるべしとなし、その態度をとることゝした。この選舉は珍らしき異例として二月廿一の選舉会で、政友系の久原、保良、庄、松岡、西村、児玉、窪井の七氏と民政系の藤井、沢本の二氏が無投票当選となつた。選挙もすんだので二月廿五日実行委員はまた山本宅に集合し、今後の方針に就て協議した。林町長提出の萩町昭和七年度予算案は三月上旬には町会を通過すべく、その機に林氏は愈々自決を遂行すると思はれるので、尙暫時静観を持続することゝした。而して予期がはづれた場合は實質は同じだが、少しく目先を変へ、町長に土井市之進氏擁立の旗印を立つべしとの説が唱へられた。

市制実施問題の突發

林氏は前年山陰本線全通の機（昭和八年三月の予定）に萩に市制

を施行すべしとの説を発表したが、當時は尙早論者が多く、問題ともならなかつた。然るに自己の立場を有利にすべく、急な思ひ付きかどかは忖度の限りでないが、林氏及び一部の町会議員は近來熱心に本問題を取り上げ、突如として三月一日の町会に持ち出した。其結果七名の調査委員を選び、二班に別れて中国及、九州の先進地を視察することにした。町会議員改選期等の関係で七月一日より施行しやうとするので、誠に忙がしいことである。三月十四日の町会で視察委員の報告があり、市制案を可決した。其後諸手続がトントン拍子に進行した。

五月廿六日実行委員はまた山本宅に集り種々協議したが、市制の施行は一同も賛成であるので、此問題を阻害せぬやう、林氏排撃の行動は少しく慎むことゝした。従つて排斥熱が下火になつたやうに見えたが、内実はさにあらず、市制革新市政研究などを標榜し、市制施行直後に行はるべき市会議員選舉に々数の同志を送り、一挙に吾人の目的を貫徹すべく申し合せた。この席で急進論者は即時町民大会を催し、氣勢を擧ぐべしと唱へたが、山本は何か感得する處があつたのか、數日間待つて貴ひ度いと其説を抑へた。

林町長辭表提出

林氏は五月廿八日突然辭表を宮崎助役の手許まで提出し、同時に議員一同にも挨拶状を発送した。その理由は健康勝れず劇務に堪へぬと云ふのである。これに驚いた町会議員は廿九日緊急協議会を開き、年長議員山下登氏を仮議長とし、大田田中太郎吉氏等七名の出仕勧告委員を選び。山下氏も加はり、町長宅に至り極力出仕を勧告した処、初めは辭意強固らしく見へたが、結局数日間の

回答猶予を申し出でた。六月一日宮崎助役に稍長文の書面を以て當任する旨を正式に回答した。同日議員協議会に是が報告され、辞表提出騒ぎは呆氣なく閉幕した。

林町長辞表徹回眞相發表

彈劫大演說會

前述の如き林氏の辞表提出劇を見せられた实行委員は激怒し、且つ此儘放置すれば初代市長にも選出される恐れありとし、六月四日午後七時より萩町公会堂で、標記の大演說會を開いた。辯士演題左の通り。

開会の挨拶	森田伊代藏
萩町の高等暴民を葬れ	野村善輔
醜弄さるゝ三万町民	吉田理
醜惡の連鎖劇	椿敏彦
萩町民各位に告ぐ	田坂信一

聴衆一千名非常な盛会で、十一時閉会した。

臨時萩市長代理に關する

兩派の陳情

市制実施の初めには県知事が市長代理を任命するのが常例である。公約無視、素行上の不始末ある林氏が是に任命せらるゝは、郷土のため誠に面白からず、願はくば紛糾せる萩政界に關係なき県高官を特任せられ度しと、実行委員は三回に涉りて岡田知事に陳情した。第一回は六月四日八道、山本県議、田坂の三氏出山、第二回は六月二十日五百三十四名の署名調印書を携へて山本、末岡、田坂の三氏出山。第三回は六月廿九日山本、末岡、野村の三氏出山。是に対し擁護派よりは六月四日八道氏等の跡を追ふて厚東県議、林元県議が出山。六月廿九日には厚東、大田、福田の三氏出山林氏の為めに陳情した。結局知事は市制施行の実務をとつた林氏を任命した。

戸籍法違反の件にて 林氏告發さる

萩町某氏は六月二十日附を以て戸籍法違反の件で林勇輔氏を告発した。こは林氏の私行に渉るものであるから、其説明は差し控ゆるが、六月四日の弾劫演說會広告ビラに掲げた十スローガンの中に「この白頭狸に風教指導の資格ありや」「彼は尙厚顔にも処女に貞操の使命を説くか」とあるは、是に關聯するものである。

初代萩市会議員

萩市会議員の選舉は七月十八日に行はれ、翌十九日開票、立候補四十名の内次の三十名が當選した。

世良捨松、井町松三郎、中村聞輔、末永光蔵、藤山清太郎、福田一良、石川利吉、藤田隆治、岩崎市太郎、並川宗一、大田民藏、岸田雪城、瀧河繁治郎、山村次郎、佐伯宇槌、土井市之進、山村弥助、吉山謙助、吉賀要作、佐伯静馬、山本百合熊、榎敬之助、齋藤寿福、平川正道、幸坂好蔵、中谷長藏、末岡周介、西山和一、山根鉄藏、山本詩教。

た。殊に佐伯副議長は大田、福田の両議員と共に厚狭駅まで見送った。以上事件の筋道を簡略に記したが、近頃のやうにリコールと云ふ法的手段のなかつ時代の社会の一断面を知る一資料とした次第である。

萩上水道鉄管問題

初代萩市長豊田勝藏氏によりて計画せられた萩上水道敷設工事は順調に進行しつゝあつたところ、市会議員福田一良氏は昭和十年七月十九日と二十日の萩地の新聞に次のやうな特別広告を出だし、一般市民を驚かした。「萩市民各位に告ぐ。不良品鉄管を実見御希望の方は小生方へ申し込まれ度し、案内して実見に供す。」
「福出一良」又同年七月十七日免職させられた元市上水道技手京谷太一氏は椿敏彦氏発行の防長日報に萩上水道鉄管中に不良品ありとの声明書を掲げた。これに刺激せられた市役所側は二十日午前九時水道委員会を市衙楼上に催し、協議の結果、直に良不良を確かめることとなり、豊田市長、羽仁水道課長、藤村水道課主事、石川技師、山本土木課長、山根、大田、佐伯、石川、世良の五水道委員、萩署貞滝部長、在萩新聞記者は東田町にあるものを始めとし、浜崎鉄管置場にあるものを入念に検査し、不正品のなきことを確めたのか、皆々稍安堵の面持で十一時廿分頃引揚げた。石川技師は帰厅後次の通り新聞記者に話した。「世間の疑惑を除去するため今日水道委員達と共に態々実地検査を行つた次第であるが、諸君も見られた通り、不良品といふて取あげて言ふほどのものはない、云々」

此報道に対し福田市議は直に石川主任に立会検査を申し込んだが拒絶せられた。そこで福田氏は吾々原告の者を差し置いての検査は正確なものとは見られぬとの意見書を二十二日市へ提出した。

又京谷氏は自分の長き経験によると今回用ひられた検査機では三ミリ位誤差を生ずることがあるから、今回の検査は正確なものとは自分は信じ得ないとの意見を二十二日の新聞紙に発表し、且つ市長を告発し、助役兼水道課長其他技師等を告訴した。

鉄管再検査問題の萩市会

福田一良氏は原告側が立会する鉄管再検査説を成立せしめんとし、表面は鉄管問題研究のためと称し、自分の他石川、並川、平川等九名の議員署名の下に緊急市会を要求した。因つて七月廿四日萩市会が開かれ、席上福田氏は唯一人にて市長水道委員達と応酬大に努めたが、結局京谷氏の人格問題其他諸種の事情は闡明せられたが、福田氏の強調する原告者と共に再検査の要求は福田氏を除く全部議員の反対に依り不成立に終り、市会としては鉄管に不良品なしと決定するに至つた。此日は酷暑にもかゝわらず傍聴人が殺到し、近來珍らしく緊張した市会であつた。傍聴の石井駿馬氏が福田議員に拍手を送つたところ、土井議長から誰何されたので、手をうつたのではない、蚊を打つたのだと答へたなどのナンセンスもとび出した。

萩市上水道鉄管報告演説会

福田一良氏主催長野一馬氏後援の標記の会が七月廿八日午後八時萩市公会堂で催され、両氏は過日の市会の模様など本題の経過をし出したと云ふことに、多大の意義を感じるもので、受け納めるか、突き返すかは大なる意味なしと思ひ居れば決議文は柔順に持て引き下つた。

後記に依つて知らるゝやうに、頑強に再検査を拒否し続けた市側も判検事等多数の立会のもとに再検査を施行せざるを得ぬ破目に立ち至り、不良成績を白日の下に曝したるは是非もなや。

市会の面目保持に関する

急施市会

大田民藏氏他十名の市会議員は左の理由により急施市会開催の件を請求したので、九月十六日標記の市会が開催せられた。傍聴多数、議場は頗る緊張した。

(理由) 過般来萩市上水道布設工事其の他市制に関し、巷間種々浮説を為すものあり。此の儘之を黙過するときは市会の威信に關するのみならず、一般市民の疑惑を招く虞なしとせず。依つて市会の面目を保持する為め、之が対策を決定せんとするにあり。

午前中は質問応答頻発し、午後に至り福田議員の退場を求め、議長指名の五名の意見書起草委員は別室にて案文を起草、之を本会議に附し、満場一致左の三文を可決した。

福田一良君。萩市会議員の職にある君の言動は議場の内外により所説を異にする点多々あるは市会の神聖を汚し、決議の重要性を損すること甚大なるを認む。因つて市会は其決議により君の反省を促し自決を要望す。

萩市会。

山口県議員山本勉弥君。萩市発展の為め緊急なる上水道敷設に關し一二攬乱的言辞を弄するものあるに當り、何等其真相を確か

報告し、重ねて再検査を高調した。傍聴者の中には賛否両論あり、一時喧騒を呈した。

山本県議の聲明書と勧告書

山本は防長日報に声明書を掲げ、本問題を拡大せしめざる調停案としては羽仁水道課長の退職と京谷技手の復職が可なるに非ざるやとの意見を発表した。これが行はれるを知るや、八月十二日市長に勧告書を送り、自分も鉄管に就て疑惑を抱く者であるから、福田、京谷両氏立会の上で、再検査をされ度しと申達した。

上水道市民大会と其決議文

通達

福田一良氏は七月廿四日の市会、七月廿八日の演説会に於て、再検査を高唱したが、市側はとりあげず、山本県議も勧告書を送つて同じ要求をしたが、意に介せず頑として態度をかへざるを以て九月十一日午後八時より市公会堂で市民大会を開き、山本勉弥野村善植長野馬風福田一良の四氏は演壇に立ち、山本座長の下で萩上水道鉄管再検査を市当局に要求し、若し其成績が不良の時は市長は責任をとるべきとの決議をした。この間反対派の者は多く退出するなど場内は混乱した。

翌十二日午前十時山本野村の両名は市衙樓上で市長に面会し、右決議文を差し出した。市長は両側に海軍大佐陸軍大佐の両助役を椅子によらしめ、水道関係吏員を傍らに立たしめ、威儀頗る凜然意見書。本市会は其決議により別紙のとほり、萩市治安維持に對し切に反省を促がし、自決を要望す。

萩市会

むることなく、之に附和雷同し、且又その言動は萩市選出の県会議員として市を思ふの念ありとは認め難し、茲に君の辭職妄動に對し切に反省を促がし、自決を要望す。

萩市会

前記通り山本前県議の起したる訴訟を裁断するには当然嚴重なる鉄管規格検査が必要なれば、山本の証拠保全の申立により十一月二日午前十時より午後に涉り、市内浜崎鉄管置場で鉄管検査が左の面々立会の上で行はれた。

山口地方裁判所民事岡田判事、林書記、山口水道課西川技師、小河虎彦辯護士、山本勉弥、福田一良、京谷太一、豊田市長、羽仁

助役、水道課藤村主事、同石川技師、水道委員を始め、市議、土井県議、市嘱託土井幸穂の諸氏。此日は市側の人々には從来のやうな元気はなく、憂色がたゞよつた。検査成績の一部は次の通り。

萩市上水道用鉄管検査成績表

(昭和十年十一月二日)

号符	種別	管壁厚	最底管壁厚	管壁薄	成績	摘要	插口ヨリ測定ノ深サ	
							標準管厚	ノ厚キ部
チ一 直	公称内径二百ミリ 鐵管	100	8.5	2.2	不合格	一 正更 セミ	100	4.4
チ二 直	同 三百五十ミリ 鐵管	300	10.5	5.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ三 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 二五〇、〇	100	8.5
チ四 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ五 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ六 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ七 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ八 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5
チ九 直	同 五百五十ミリ 鐵管	500	15.5	10.5	不合格	同 一〇二、〇	90	6.5

合計	チ十三 同		チ十二 直		チ十 ミリ 直	
	九〇七五	九〇	九〇	九〇	一〇九、〇	一〇九、〇
九本						

備考
本表ハ山口地方裁判所指定ノ鑑定人西川武氏ニ依リ慎重ニ検厚セラレタル鑑定報告書ノ内本邦上水道協議会規定ノ水道用高級鉄管規格ニ適合セザルモノノミヲ抜萃セルモノニシテ検査鉄管數二十八本ニ対シ尙不良ト認メラルモノ此外ニ三本アルモ此レハ更正管厚ニ依リ辛シテ合格ト認メラレ居ルヲ以テ除外セリ

應訴決定市会及其後の應訴手続

山本前県議の訴訟に對し、萩市は應訴せんとし、市長は十一月八日の市会に其旨を提案した。議場で福田議員は大田議員等と激論したが、福田氏を除く他、全員の起立で可決し、訴訟委員は五名の水道委員をあつることとなつた。

十一月九日萩商工會長副会長及相談役等十四、五名は西田町事務所に集合。水道鉄管に関し、紛糾の絶え間なく相争ふは、萩市の發展を阻害するもので、憂慮に堪えないから、円満解決の策を講ずることゝした。更に同会幹部は十一月廿日集会し、久原氏に調停を依頼せんとの説も出た。

三回目 鉄管問題解消対策萩市民大会

吉松毅章、藤田栄吉、村木五一郎の三民主唱の下に十二月廿四日午後七時より萩市公会堂で、標記の市民大会が開かれ、諸氏の演説の後國重前代議士を座長として次の決議をした。

決議文。萩市上水道鉄管問題の紛擾は市の發展上憂慮に堪えず。依つて茲に市民大会を開き、是が解決善處の方法に就き、郷土の大先輩久原房之助閣下に助力を懇請するものとす。

この決議文を携へて、吉松、藤田、村木の三氏は上京し、西村代議士、藤田前代議士同席の席上久原氏に陳情した。吉田潤一氏が近日帰郷するから事情をよく調査して貰つた上善處するとの久原氏の回答を得て三十日夜帰着、此旨直に国重氏に報告した。因みに云ふ、吉田氏は正月早々來萩、九日発帰京せられた。

吉田氏等は議会解散に依る総選挙が目前に迫りつゝある今日、この問題に入れるため、少しでも久原氏の選挙に悪影響を及ぼすことがあつてはならぬとの説を抱いたやうであつた。斯くて旧暦廿四日の大会決議も表面的には結実するには至らなかつた。

豊田市長辭意表明

来年七月まで任期があるに却らず、近來萩の地に嫌気がさして居

法廷戦の展開

十一月十五日金谷大満宮祭礼の日、一部の人々の怨恨の的となつて居た京谷氏は唐橋町群集雜沓の中で殴打された。

萩有志者直接内務省に陳情す

十一月廿六日には第一回準備手続が山口地方裁判所で行はれ、岡田判事が双方の審理に當る。市側は羽仁助役等原告側は山本等数名が出頭した。

昭和十一年二月五日佐賀県唐津町地方裁判所で、第二回準備手続が行はれた。唐津で行はれたのは萩で鉄管検査をした裁判所指定の鑑定人山口水道課西川武技師は其後唐津に転任されたからである。山本は田坂信一、松本雅楽の二氏を伴ひ同地に赴き、西川氏と共に出廷した。

萩商工会幹部の調停協議

た豊田氏はかねて辞職の機会を待つて居たが十一月末上京し、其帰任後愈々決意を固め、来る市会には辞意表明するらしく而して辞職後は久原氏の心配で日産系会社に入るとの噂が廿三日頃立ち始めた。果して一月廿五日の市会に市川助役から、豊田市長は辞表を提出されたとの報告あり、次で市長は左の意味の挨拶をされた、「私は今回辞任したいので市川助役の手許まで、昨年十二月廿一日附で辞表を提出して置きました。昨年八、九月頃に背任罪があるとして告訴を受け而してそれが郷土に於てなされたといふことは真に遺憾に思ふ。仕懸りの諸問題が何うやら片付いたので、苦慮の結果今回お暇を頂くことにした。気持よく御承認下さい。尙市川羽仁の両助役も辞表を私の手許に出して居るが、一時に辞職するのはよくないので、私の手許に預かって居る。云々」大田議員の緊急動議により、市会は市長の留任懇請委員五名を設くることとなつた。又萩市民の有志、大正会の諸氏は二十五日午後二時四千五百の署名ある市長留任嘆願書を土井議長に手交した。尙区長集会の留任懇請、阿武郡町村長集会の留任勧告があつた。かかる嘆願勧告があつたにも却らず、市長は二月十二日の市会に左の意味の辞職概要を文書で発表し、辞意の動かし難きを訴へた。

立ち、昭和十一年度の予算も編成を終へて置いたのであります。今日私が職を去りましても、決して本市に御迷惑を掛けるものでないと考へます。残任期数ヶ月に過ぎませぬが、先輩友人の切なき情誼ももだし難く、而して夫は時期の遷延を許さぬのであります。その上茲に一考すべきは所謂水道問題の紛議であります、是は真に市民の一部者の意見であり、何等ともに足らぬことゝは信じますが、然し斯る事態を惹起したことは私の不徳の致す所であり、而して私が依然としてその職に止まるることは断じて本市の利益でないとの結論に到達したのであります。私の退職によつて本問題のみならず一切の市政が明朗平和に進展するならば私の本懐是に過ぎませぬ。何卒御諒承を得たいと思ひます。」

斯くして十二日の市会で豊田市長及羽仁助役の辞職を満場一致で承認、退職慰労金を可決、市長代理は市川現助役に決定した。種々の事情の伏在もあつたであらうが、先年の林勇輔町長のねばり強い退職状態とは雲泥の差で、さすがに潔きよき名士の進退振りである。

鉄管問題第一回口頭辯論

「市会代表者より再度の懇請をうけ、市民有志四千六百余戸の方々、其他諸方より熱烈な嘆願勧告を受けましたのは不敏な私として誠に感激光榮に堪へませぬ。私は昭和七年七月市会満場一致の御推薦により就任致しましたが、当時の事情は余り長く職に止まり得ないのでありました。然るに在任三年七ヶ月、立市当時の必要措置も略整理を了し、多年の懸案である上水道も完成の見込が

豊田前市長の送別会と
萩出發

三月二十一日午前十一時萩市公会堂で官民合同の送別会が開かれ
た、来会者約千名、市川市長は送別の辞を朗読し、豊田氏は懃勤
な謝辞を述べた。尙同日午後六時より唐橋町高大亭にて、萩無名

かれた
豊田氏は三月廿四日午後三時数千の見送り人堵列の裡を自動車で
、市衙前を出発帰京された

第二回 口頭辯論と和解問題 の擡頭

四月六日午前十時山口地方裁判所で、第二回口頭辯論が西巻裁判長係りで開かれた。出廷者は土井幸植氏の他第一回の時と略同様であつた。閉廷の後西巻判事は別室に山本を呼んで、現下の萩政情を正視し、君達も紛擾を一掃してはどうかと力強い和解の勧告があつた。山本は一応同志と相談の上貴意に添ひ度い旨を答へた。帰途萩市開業の武田弦介辯護士と防長バスに同車したところ、武田氏は山口裁判所内の空気を和つて居たらしく、余等をなだめて善処方を要望した。四月八日武田氏は態々余の宅に来られたので懇談を重ねた。元來この訴訟は賠償金が欲しいと云ふ主旨ではなく、嚴重な鉄管再検査を強行する手段であつたので、折合がつけば訴訟は取下げてもよいと考へたので、市側の模様を見ることに

三月六日午前十時山口地方裁判所で本問題第一回公聴審議が西卷裁判長係りで開かれた。原告側小河、被告側弘中辯護士立会、原告側山本、被告側市会議員代表大田他三名、藤村主事、石川技師が出廷した。被告側より申請した証人の羽仁前助役は裁判長の尋問に対し、鉄管購入に不正事実なしと大声、被告側に有利な陳述をした。更に被告側より萩市嘱託機関大佐土井幸植を証人に申請、採用となり。正午閉廷、次回は四月六日と発表された。

した。

武田氏は和解調停に関し市側に連絡したので、四月十日市では水道委員会を開き、種々協議の結果、原告が無条件で訴訟をとり下

武田氏は和解調停に關し市側に連絡したので、四月十日市では水道委員会を開き、種々協議の結果、原告が無条件で訴訟をとり下げるならば、和解を認めようと云ふことになった。

和解成立の模様ご直後の

和解に關し武田氏の仲介斡旋で、西卷判事原告被告三者の内訌が纏まつたので、司会者として西卷判事、原告側山本田坂氏松本氏、被告側市川市長土井議長大田氏が五月八日山口地方裁判所の一室に集まり、新聞紙に發表する左の声明書を是認し、同文中にあるが如き挨拶を互に交換し、今後は相共に提携して明朗平和な萩市を建設することを誓ひ、さしも紛擾を極めた事件も芽出度納つた。

訴訟取下の顛末。原告山本勉彌氏は萩市使用の上水道鉄管問題に端を発し、萩市及全市会議員を相手取り山口地方裁判所に名誉毀損を理由として損害賠償の訴訟を提起し、現に数回の審理を経たる処、山本氏は感するところあり、訴訟取下の意思を表示し、久しく世間注目の的たりし該事件も本八日芽出度円満に解決したり。訴訟取下後原告山本氏は「本件に対し市側に御迷惑をかけたることは遺憾なり」と挨拶したるに対し、被告市側は「市会に於て山本氏の自決を促すが如き決議をなすに至りたるを遺憾とする」との挨拶を交換し、今後は互に相携へて平和の萩市を建設することに邁進すべきことを誓ひ、頗る平和裡に終局したり。尙市会議長土井氏は個人として本事件の端をなしたる鉄管は萩市に於ても之

を使用せざることになり居れりと語り、山本氏も之を諒とした

り。

鉄管問題と余が環境の大転換

余は壯年二十六才にして両親の郷里である萩に帰り、栗屋、能美の二少将、小倉半井の二大佐の撫護を受けて医業に従事した。更に小倉大佐の町長在任中、町長の意を躊躇し、政友会入党し、同党地方幹事を勤むるなど、年齢の割に早く萩の政界に馳騒することとなつた。其後阿武郡医師会長、萩市医師会長、町會議員、県会議員となり、政界医界の両面に将来尙驥足を伸ばし得る礎地が出来つゝあつた。然るに昭和十年突発した鉄管問題は元來余が発端を起したものではなく、深入りするには及ばなかつたのであるが、正義観に燃ゆる性癖と當時県会にも編紀肅正を高唱しつゝあつた行懸り上、その渦中に投じ、最後には余が最も大なる役割を勤むるに至つた。當時萩には豊田市長に同調する者多く余の行動に対し、事の善惡を問はず、余を責むるの声起り、余等の目的は實質的には貫徹したるにも却らず、市民の信頼は從前の如くならず、殊に余波として起つた理不尽な医師会長排撃（別記参照）の為め、医界に於ける信用は一朝にして破碎せられ、市会方面とも表面上和解した事となつたが、感情のわだかまりはとり拭ふべくもなく、實際は萩の政界より駆逐されたこととなつた。

かかる境遇の大変転に一時は不快の思ひをなしたるも、時怡かも萩の瓦の蒐集、研究と云ふ新趣味に恵まれ、猛然として其の方向に没頭したので、不遇悶々の情は著しく緩和された。次で萩陶磁器の研究となり、萩碑石の探査となり、萩俳諧の調査となつた

。これ等の業績は旧来研究し來つた萩の史実と共に上梓し、萩文化叢書の大半が成就した。此行路は前年は少しも予期しないものであつて、全く環境転換による賜物である。世上よりもその勞を認められ、市よりは二回、県より一回、県医師会より一回文化功労者として選奨を受くるに至つた。余は自分の性情をつくづく顧るに、些か潔癖に過ぎ、清濁合せ呑むべき政党人としての素質を缺いて居る。唯コツノヽとして事物を研究し、新知識を欲求する學究的態度こそ本来の面目で、今この奇縁により幸ひに天分に立ちかへされ、而も些かこの方面に貢献し、萩の小天地ではあるが、自分を不朽のものたらしめたのは、何としても有難いことである。転縁為福、一時の不遇は起死回生の妙薬であつた。

以上後記として所懐を誌す。

鉄管問題の余波

山本萩医師会長辞職を逼らる

萩上水道鉄管問題の渦中に投じて奮闘する県議山本勉彌が昭和十一年九月十六日の急施市会で、「前文略、輕舉妄動に対し、反省を促がし、自決を要望す」との決議を突きつけらるゝや、市水道委員の世良氏を始めとし、市長、土井議長、山根議員達と共に親密な医師会員の主唱により、医師会中に山本会長排撃の声が澎湃として起つて来た。其鋭鋒は九月十八日午後二時開会の医師会例会で村田副会長辞職問題をキツカケとして爆發した。村田氏は云ふ「最近山本会長は萩市会より自決の決議文を突きつけられた、其他山本氏の種々の行動に関し、自分は会長を補佐すべき副会長の時五十五分再会、

議長山本、読会の解釈に就て諸君は私と見解を異にする様であります、依つて先刻は三読会を宣しましたが、後もどりをすることとし、只今より二読会を開きます。御意見のある方は御発言を願ひます。和田世良・増野三氏より意見あり、結局本案を撤回することとなる。この間臨席せる木原理事、松岡警部の挨拶あり、共に円満なる議事の進行を希望せらる。統いて議長は第二号議案と第三号議案とを一括して議題とすることを謀りたるも、和田氏は日程を変更して直に建議案を上程する様緊急動議を出し、多数の賛成により動議成立、議長は一身上に關する議案であるから、席を年長理事である世良氏にゆずり、一番の議席に就く、世良議長は村田副会長辞表提出中なれば暫時この席を汚すと挨拶し、建議案を上程す。

建 議 案 会長不信任に関する件

本会々長山本勉彌氏近時の言動は動もすれば常規を逸し、その非紳士的態度は著しく吾人の信頼を失墜し、且つ一般有識者間の撻撻と嘲笑とを買ひたるは苟も本会長の要職にある君の行為として萩市医師会の威信を損ふこと甚大なり。斯くの如きは内は会員相互の円満統制を危うして会の發展を阻止し、医風の向上を妨げ、外は医師会の品位を傷けて社会的眞面を汚辱せしものと認め、会長として之を信任せず。

右建議候也

昭和十年十一月一日

中村剛太郎他二十一名

中村氏は提出理由を詳細説明し、増野純亮氏は腹藏なき意見を吐露して賛成演説をなす。（臨時総会議事録参照）山本会長はこの両氏の所説に対し、次の通り駁駁す。（こは別記鉄管問題の書中に記載せざる事項もあり、余の熱意を比較的よく表現しあれば長文なるも記載することにする）

第一番山本。先づ増野氏のお説に対する辯明を致します。増野氏は自分は公平なる第三者の立場に在る様云はるゝも、私は不幸にしてそれを肯定することが出来ませぬ。氏は明かに市長派で、市長派の云ふことを一点誤りなきものと信じ、鉄管問題を惹起した京谷氏は不人格者で、その言は少しも信を置くことが出来ないとして居ます。然しながら此の觀察には根本的に誤りがあります。此の誤まれる觀察を以て一般市民は全く偽瞞せられて居る。その傍証とも云ふべき一事を挙げます。実は明二日の午前十時を期して浜崎鉄管置場にある鉄管を検査することになります。而して市側が嘘言家であると云ふ京谷氏を鑑定人三人中の一人として裁判所が採用して居るのである。即ち管厚を測定する相当の技能ありと認めて居るのである。市側の認識の程度は思ひ半ばに過ぐるものゝあることがわかります。私は去る二十九日南片河町の路上に置かれてある七十六本の鉄管検査に立会ひ、七本の不良品あるを知り、其旨発表しました。中村増野両氏は共に本不信任案は鉄管の良否に原因するのではない、従つてその良否如何によつて提出を左右するものでないと云はれましたが、それは今日の状勢より見て左様に云ひ繕ろはるゝので、些か卑怯であります。

田町で福田氏の鉄管検査を手伝つたことにあるので、此意味を強調して書いたのである。

中村氏は私が如何にも非紳士的言動をなし、社会的に非難と嘲笑的となつて居ると云はますが、成程市長一派の人は私に対し甚しき憎惡の感を抱き、悪罵嘲笑をなすのであります。然し私への同情者声援者も相当多数にあるのであります。今回の県議選挙には土井派即市長派は多くの団体の勢力を利用し、甚しきは小学生まで使役して狂奔せられたのでありますが、是に対しても正々堂々の戦をした私の方は千七百餘票を獲得し、意外の数に識者を驚歎せしめたのであります。此の結果を見ましても私は必ずしも医師会の面目を失墜して居るものでないと考ふのであります。鉄管問題が解決しますと、存外賞讃の嵐が私を迎る時がないとも云へぬと思ふのであります。又私が如何にも品性の陶冶を怠つて居るかの様な言葉もありました。私は御承知の如く、修養方面には相當意を用ひて居るので、人格に暗き影を有するとは自分で思つて居ないのであります。中村氏増野氏は相当吾々が御注意を仕度いと思ふことすら過去にはあつたのであります。又本会制裁内規に触れて居る会員もないではないのであります。斯様な事は等閑に附せられ、而してかゝる人により鉄管問題と云ふ医師会以外の問題によつて弾劾を受け、人格を云々せらるゝのは些か其の意を得ないと考へるのであります。今回の事諸君がやるとすれば、先づ会則を変更して然る後にやるのが当然であるのを、諸君は多數を頼んで会則違反を敢てせんとするのである。諸君の行動こそ本会々員として軽舉妄動であると思ふので、切に御反省を乞ふのである。以上の考へを持つて居ますので諸君が如何様に

七八

先月十三日の例会では世良氏は鉄管に不良品なしと主張し、其他の諸君も鉄管問題を以て終始私を攻撃せられたのであります。

私が市側と京谷氏との間に始めは調停に立ち、それが破るれば直ちに反対行動を取つたのは其の動機が不純であると云ひ、或は京谷氏が誠首せらるゝや、福田氏と共に私の所に会合し、市長排斥を策したらうと云はれますが、それは不純の動機を以て私を傷けんとする人々が自分達の心を以て、他を憶測せらるゝのであると考へられます。私は京谷氏に逢つたのは八月廿九日福田氏報告演説会の翌日で、同じ日に市の水道課石川技師にも此問題で始めて逢ふたのであります。此二人の意見を比較して見ると、京谷氏の云ひ分の方が正しいと感じたので、漸々深入をしたのであります。京谷氏の性格にはいくらか欠点のあることは私も否定するものではない。然しながら鉄管に不良品ありと確言し、それを根拠とし、市長を背任罪を以て検事局に告発すると云ふのは、餘程の自信がなければ出来るものではない。私は此の点より市側に不正確があると直感したのであります。従つて調停と申しても、多く市側の方を責めて鉄管の再検査をなし、過を改めしめんとしたのり、此の調停に少しも応ぜぬとすれば、市当局を攻撃する態度に出づることは当然の成行であります。浜崎鉄管置場に於ける鉄条網云々に就ては、先月の例会にても辯じて置きました通り、文章の書き様が善くなく、鉄条網のことゝ京谷氏のことゝが一緒になつて京谷氏が浜崎鉄管置場に近づいたとなつて居るが、事実は京谷氏は吉田町の鉄管に触れたのである。京谷氏が誠首された直接の原因は履歴書偽造問題であると羽仁助役は云つて居るも、遠因ではあらうが断じて直接の原因ではないのである。直接の原因は吉

決議されても、私は直にお受けすることが出来ないのを遺憾とします。又諸君の出様によつては私は相当思ひ切つた態度処置をとるべきことを予め申し上げて置きます。

この後に田中清人氏は九月十一日の市民大会時の会長の態度につき攻撃的質問をなしたるに対し、会長は次の通り答辯した。市民大会のことに関するては先月例会で、私より稍々詳しく辯駁致した通りである。当夜は約二千の会衆があり、反対するものは市吏員魚市場関係者等略見当がついて居ました。吾々の見る所では勿論大多数が賛成であり再検査要求市長排斥の議を決しても何等不当のことならざるを確信するのであります。

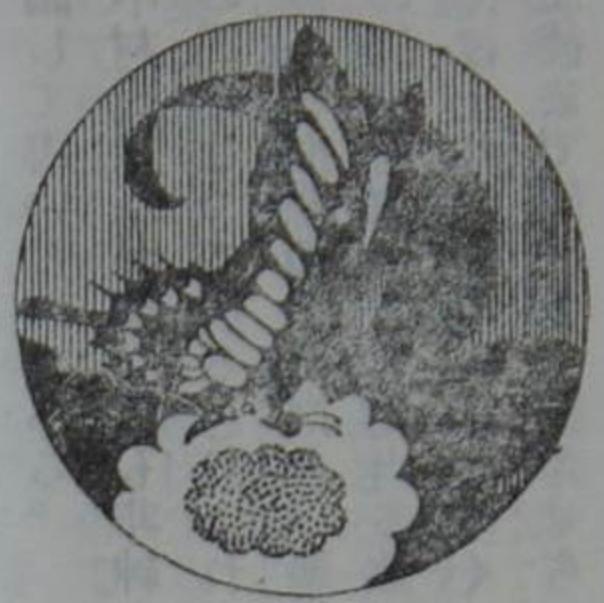
次で木原理事は再び立つて、諸君の御意見を諱聴しますと医師会総会に附議すべきこと以外市政問題等のことが多かつたのを遺憾とします。医師会には附議すべきことを定めてある筈です云々。建議案が終了したので世良氏は山本氏に席を譲る。山本議長は残りの四議案を経めて提案したいと思ひますと述べたるも種々の意見出で、更に和田氏より直に閉会すべしとの動議出で、賛成者多数にてそれに決す。

臨時総会後の萩市医師会

評議員中村剛太郎氏は十一月二日附で辞任届を提出した。理事世

はしがき

良捨松及久保常美、評議員芳野愛介及小高與吉の諸氏は十一月六日附で辞任届を提出した。山本会長は十二月九日附で臨時総会の議事録を県知事及県医師会長宛送出した。臨時総会の不信任案提出はその理由より見て明かに会則違反であり、從つて其決議も不当のもので、それによつて直ちに辞職の要なしとの見解を山本は持し、依然会務をとり、臨時総会の議事録も唯一人にて編輯を了したるも、他の役員が全部居らぬとすれば、今後の会務運行に支障を来たすことなれば、会長も愈々辞職を決意し居るところに、比較的温和主義なる芳野愛介氏は一月廿九日会長を訪問し、互譲的精神を以つて行きつまれる医師会の現状打破策を協議し、村田氏他五名の辞任届と村田副会長宛にしたゝめたる山本会長の辞任届を預りて帰る。二月廿日村田氏宅にて役員辞任処理に関する役員会を開き、山本会長の辞表は受理すること、他の役員の辞表は撤回せしむることゝなす。三月一日村田副会長によりて招集されたる第五次総会の席上、正式に会長辞任承認の件を可決し、茲に会長排斥劇は漸く終局した。



追補萩八十

何時頃から始まつたかは不明であるが、萩には從来八十八ヶ所の札所があつて、特志者は連れ立つて巡拝して居たのである。然るに年月を経るに従ひ、漸次欠所を生じたので、昭和七年春同行の世話をしてゐた永林寺住職達の配慮により、欠所を補ひ、所謂新八十八ヶ所が定められた。場所は数を揃へたが、其所に御詠歌の残つてゐるのが僅か十ヶ所に過ぎない。そこで余は弘法大師毫千百年の大遠忌を機とし、昭和九年に是等御詠歌の不足分を新作しやうとの意願を起した。実はかかる企をする柄ではないのであるが、幸ひ同志河野通毅氏の協力（主に椿東方面）を得たので完備することが出来た。

○第一番札所

青海 獅の観音 本堂
本尊 觀世音菩薩

○第二番札所

青海 獅の観音 本堂
本尊 駱迦如來

○第三番札所

小松江のみどりや花の桜江に八千代を照す月ぞさやけき
（新）
本尊 十一面觀世音菩薩、藥師如來（坂中の藥師堂より移したるもの）

○第十番札所

沖原 下南明寺 本堂
本尊 聖觀世音菩薩

○第十一番札所

沖原 日輪山南明寺 本堂
本尊 不動明王

○第十二番札所

沖原 日輪山南明寺 本堂
本尊 不動明王

○第十三番札所

沖原 田村芳行氏畑地内路傍
本尊 弘法大師

○第十四番札所

沖原は花橋の原にして薰りゆかしき法のいし室
（新）
本尊 弘法大師

○第十五番札所

松風もたかきしらべをかなでつゝ和光同塵朱の玉垣
（新）
本尊 弘法大師

○第九番札所

金谷 尼僧院
本尊 弘法大師

大谷川流るゝ水の絶ゆるとも法の泉はつきじとぞ思ふ
（新）
○第八番札所
千坊師 佐々木清一氏隣地
本尊 弘法大師
み仏の心のまゝにまかせあるわが行先は光福寺かな
（旧）
○第七番札所
鶯谷 齋藤万寿一氏地内路傍
本尊 弘法大師
大谷川流るゝ水の絶ゆるとも法の泉はつきじとぞ思ふ
（新）
○第八番札所
千坊師 佐々木清一氏隣地
本尊 弘法大師
平等にへだてのなきときく時はあら頬もしき仏とぞ見る
（新）
○第九番札所
沖原 下南明寺境内
本尊 弘法大師

○第九番札所

沖原 下南明寺境内
本尊 弘法大師

本尊 観世音菩薩
ねぎごとはいとゞたやすくな谷原たゞ一心に仏たのめば (新)

○第十六番札所

川島土堤下 藤山初弥氏庭前

本尊 弘法大師

川島天王の鼻 宮川教信氏方 大師堂

本尊 弘法大師

まんだらげ咲く野はゆかしせせらぎにうつる姿は法の花かな(新)

○第十八番札所

川島 善福寺門内 観音堂

本尊 聖觀世音菩薩

ふだらくや峰にひとしき指月山ぐせいの船にのる心地せよ (旧)

○第十九番札所

川島 善福寺門内 地藏堂

本尊 地藏菩薩

百年の契りを結ぶ宴にも攝取の光り放つみ仏 (新)

○第二十番札所

中津江 白牛山龍藏寺境内

本尊 弘法大師

老の足よしおそくとも山の名の牛にひかれてまたも詣でん (新)

○第二十一番札所

中津江 龍藏寺 観音堂

本尊 観世音菩薩

○第二十八番札所

上野 通心寺 観音堂

本尊 観世音菩薩 弘法大師

たまゆらに通ふ心ぞあはれるなたゞみ仏の慈悲にすがりて (新)

○第二十九番札所

上野台 久保川友吉氏隣地路傍

本尊 地藏菩薩 弘法大師

めぐり來ていつか吾身の上野台無常の風は処きらはず (新)

○第三十番札所

松本清水口 中村フキ氏門前

本尊 弘法大師

清水口名に負ふ水の清ければ心の垢をいざや洗はむ (新)

○第三十一番札所

椎原 岩本芳松氏地内路傍 (松陰先生誕生地の下)

本尊 弘法大師

まごころはとはにみ国を護るらむ身は武蔵野の露ときゆとも(新)

○第三十二番札所

椎原 円福院 本堂

本尊 観世音菩薩

ともし火の清き光をたよりにてそのあかつきをまつ本の寺(旧)

○第三十三番札所

春の野を轡ならべて語りけむ国の柱となりし人々 (新)

○第三十四番札所

利生えて浮世を夢とさとりつゝういてんべんを知るぞ嬉しき(旧)

○第二十二番札所

下目代 山根兼藏氏山地内

本尊 弘法大師

上野 伊藤久吉氏宅より約二丁の山中 観音堂

本尊 弘法大師

阿武の川世を浮き雲のあともなく真如の月の澄めるみな底 (新)

○第二十四番札所

上野 中尾原正志氏山林地内

本尊 弘法大師

海山の眺めうるはしみ仏のゐます淨土をさながらにして (新)

○第二十七番札所

上野 荒神社々殿側 大師堂

本尊 弘法大師

せゝらぎの音にまじりて讚仏の声もきこゆるみ社の森 (新)

○第二十八番札所

上野 通心寺 本堂

本尊 祚迦如来

み仏と共にしあれば冬の日もたえず心に春風ぞ吹く (新)

○第二十九番札所

松本上市 小南寺 本堂

本尊 弘法大師

南無大師同行二人のみ誓に一人の旅もたのもしきかな (新)

○第三十六番札所

松本上市 小南寺 本堂

本尊 不動明王

我もまた心のまなこ暗くして幾度まよふ人の世の道 (新)

○第三十七番札所

松本上市 小南寺 大師堂

本尊 弘法大師

いろは歌色は匂へど散りぬると世のはかなさを教へたまへり (新)

○第三十八番札所

中倉 県道より小畑越新道の分岐点

本尊 弘法大師

人のため道をひらきてたゆまぬは昔も今もかはらざりけり (新)

○第三十九番札所

松本上市 広嚴寺門外 葬師堂

本尊 葬師如来

眼にかかる雲もおのづと晴るゝらむ心の内の光りましなば (新)

○第四十番札所

松本上市 広嚴寺門外 葬師堂

本尊 弘法大師

み仏の光りはさゝぬくまもなしこの世は広くはてしなけれど(新)

○第四十一番札所
中の倉 武久ヒデ氏隣地

本尊 弘法大師

巡礼の登るみ坂のはしきを我が世のさまと思ひてぞ行く (新)

○第四十二番札所
中の倉 如意ヶ嶽附近県道

本尊 弘法大師

心さへ身さへ静かになりにけり我が煩惱も滻にうたれて (新)

○第四十三番札所
後小畠 金子清次郎氏前路傍 大師堂

本尊 弘法大師

かぐはしき柑子の烟におはしまし

○第四十四番札所
後小畠 岡清熊氏側 観音堂

本尊 觀世音菩薩

のりのはなぶるかと見えて足曳のやまの小畠のしろたえの雪(旧) (新)

○第四十五番札所
越ヶ浜 中禪寺門内 地藏堂

本尊 地藏菩薩

六道の一切衆生を化すといふ大慈大悲を何にたとへん (新)

○第四十六番札所
越ヶ浜 中禪寺 本堂

本尊 地藏菩薩

小畠富士はや朝霧のはれゆけば地藏菩薩の露にぬれけり (新)

○第五十三番札所
香川津渡場 大師堂

本尊 弘法大師

世の闇に迷へる人をやすらげく彼岸へおくる渡し守かな (新)

○第五十四番札所
鶴江 観音堂

本尊 十一面觀世音菩薩

千年ふる鶴江の波のしづかにてわたりもやすきお波岸の船 (旧) (新)

○第五十五番札所
鶴江 観音堂

本尊 弘法大師

そのかみは鶴や群れむ浦波も人の心もなごやかにして (新)

○第五十六番札所
土原浮島 寄船山弘法寺 本堂

本尊 弘法大師

吹く風も心しにけむ千歳経ていよゝあかるき法の燈火 (新)

○第五十七番札所
土原浮島 弘法寺境内

本尊 辨財天

たをやめの調も高き琵琶の音か世を浮き島の松風の音 (新)

○第五十八番札所
土原浮島 弘法寺境内

本尊 慈眼天

み仏は今や着きけむ柴の雲たなびける天の浮島 (新)

本尊 十一面觀世音菩薩

火に焼けず水におぼれぬみ力は念彼觀音と教へられけり (新)

○第四十七番札所
嫁泣一丁目 地藏堂

本尊 地藏菩薩

見渡せば大海原の一つ船仏の胸に抱かるゝごと (新)

○第四十八番札所
明神池南 大師堂

本尊 弘法大師

わびしげのみ堂にませどおん姿常にかわらで尊げに見ゆ (新)

○第四十九番札所
中小畠 松龍院背後 穴觀音

本尊 觀世音菩薩

尊しや慈眼視衆生海のごと浮世の幸を授け給へば (新)

○第五十番札所
中小畠 松龍院 本堂

本尊 十一面觀世音菩薩

海原を眺めて遠き思ひかな西のみ空は夕映のする (新)

○第五十一番札所
前小畠 觀音山東麓 大師堂

本尊 弘法大師

南無大師身を擲ちつひれふしつひたすら任すその御慈悲に (新)

○第五十二番札所
前小畠 阿武貞一氏前路傍 地藏堂

本尊 地藏菩薩

阿古の海吹く春風も静かにて弘誓の船の帰へる浜崎 (新)

○第六十番札所
浜崎新町上ノ丁 野村平蔵氏宅

本尊 弘法大師

信心の燈芯明かしみ仏のさしそう慈悲の油ゆたかに み仏のみ足の跡か湧く水も葉となりて世には流るゝ (新)

○第六十一番札所
浜崎新町上ノ丁 西村彦藏氏宅

本尊 弘法大師

阿古の海吹く春風も静かにて弘誓の船の帰へる浜崎 世の人の眠りをさますみ仏の声ともひびく浪の音かな (新)

○第六十二番札所
北古萩 地藏堂

本尊 地藏菩薩 弘法大師

浜千鳥咲く音も寒き大空に真如の月のさえ渡るなり み仏の姿かはれど諸人を救ふ心はかはらざりけり (新)

○第六十三番札所
北古萩 住吉屋関藏氏宅

本尊 弘法大師

浜千鳥咲く音も寒き大空に真如の月のさえ渡るなり み仏の姿かはれど諸人を救ふ心はかはらざりけり (新)

○第六十四番札所
北古萩 亨徳寺門内 稲荷堂

本尊 豊川稻荷

み仏は今や着きけむ柴の雲たなびける天の浮島 (新)

北古萩 亨徳寺門内 達摩堂

本尊 達摩大師

幾とせも壁に向ひて座りなば隻手の声もきこえそむらむ

(新)

○第六十六番札所

北古萩 保福寺 地藏堂

本尊 地藏菩薩

たらちねの親の思ひをそのままに子をいつくしむみ仏の慈悲(新)

(新)

○第六十七番札所

北古萩 保福寺 地藏堂

本尊 地藏菩薩

開け行くみ国の春にさきがけて外国までも行かんとはせし

(新)

○第六十八番札所

御弓町 墓地内

本尊 弘法大師

くろがねの御弓の的は何ならん破邪のいくさは顕正のため

(新)

○第六十九番札所

米屋町 長寿寺門内 不動堂

本尊 不動明王

剣もて心にひそむ魔の群をはらひ給へや不動明王

(新)

○第七十番札所

下五間町 常念寺門内(山門に左甚五郎作と称せらる彫刻あり)

本尊 地藏菩薩(俗称味噌付地藏)

今も尚出て遊ぶらん名工が魂こめし山門の猫

(新)

○第七十一番札所

唐槌町 公会堂側(旧龍福寺跡) 地藏堂(現今溝部横丁)

本尊 弘法大師

法の雨降る度ごとに面影の山の若葉は色まさりけり

(新)

○第七十八番札所

瓦町 蓮池院門内

本尊 紛財天

ちりの世の濁りに染まぬ心をば池のはちすにたぐへてぞ見る(新)

(新)

○第七十九番札所

瓦町 蓮池院門内(境内に山田原欽の墓あり)

本尊 弘法大師

玉の緒をたちても君を諫めにし人の誠は神ぞ知るらむ

(新)

○第八十番札所

新堀 円政寺境内 地藏堂

(同寺境内に三札所の他金比羅社、稻荷大明神、愛染堂

本尊 足尾權現あり)

八百万神も仏も集ふかないづれ本地かいづれ垂跡

(新)

○第八十一番札所

本尊 地藏菩薩

雪の日も風の朝も二孝子は凍えはつまで詣で来しかな

(新)

○第八十二番札所

新堀 円政寺境内 菩薩堂

本尊 菩薩師如來

み仏のみ名唱ふればいたつきもたちまちとけん春の淡雪

(新)

○第八十三番札所

本尊 地藏菩薩 弘法大師

稻田吹く秋風寒しとぼくと手甲脚絆の巡礼のゆく

(新)

○第七十二番札所

御許町 正妙院跡 地藏堂

本尊 地藏菩薩 弘法大師

夕立はあとなく晴れて月清く蓮田を渡る風の涼しさ

(新)

○第七十三番札所

御許町 永林寺 本堂

本尊 聖觀世音菩薩(俗称子安觀音)

有難や心のまゝの安産は此世のみならで弥陀の国へも

(旧)

○第七十四番札所

霧口 公会堂前

本尊 弘法大師 観世音菩薩

もろこしの人さへ君をたゞへけりならぶものなき筆の神わざ(新)

(新)

○第七十五番札所

江向 德隣寺門外角 地藏堂

本尊 地藏菩薩 観世音菩薩 弘法大師

むすばれし胸の思ひも德隣寺仏の教きゝそめしより

(新)

○第七十六番札所

中渡 杉山卯一氏隣地

本尊 弘法大師

韓國にたてしいさをぞしのばるゝ其名ゆかしき隆景寺跡

(新)

○第八十四番札所

平安古 安養寺門内 地蔵堂

本尊 延命地藏 福地藏

安養の樂土は此處か平安古なる地藏の慈悲に救はるゝ世は

(新)

○第八十五番札所

河添中島 小沢庄吉氏隣地(隆景寺跡)

本尊 弘法大師

韓國にたてしいさをぞしのばるゝ其名ゆかしき隆景寺跡

(新)

○第八十六番札所

濁淵 長藏寺本堂側 位牌堂

本尊 十一面觀世音菩薩 弘法大師

濁り江の濁りに染まぬ心もて蓮のうてなに生れんとぞ思ふ

(新)

○第八十七番札所

玉江 觀音院 本堂

本尊 弘法大師

玉藻かる玉江の浦のあまをとめ幾代おがみぬ奇しきみ仏

(新)

○第八十八番札所

玉江 觀音院 觀音堂

本尊 聖觀世音菩薩

返り来て二世をたのみし諸人をたすけ給へや飼音の慈悲

(旧)

あとがき



新 舟 詩 及 雜 文

迷 ひ 児

(事実は小説よりも更に奇なるものあり、此度故郷に帰りて余が縁につながる静子と呼ぶ少女の一小話をきき感興そぞろに湧く、夜汽車の眠り安からざるまゝ久方振に新体詩をものせる、この迷児一編なり)

巡歴の札所は多く参拝の便ある所であるが、中には頗る不適当な所がある。又由緒ある御堂があつて昔は札所であつた所に御札のない箇所もある。是等は他の不適地と共に、改変する必要があると思ふ。

又出来るならば一堂一札主義にしたいと思ふ。札拝すべきお大師さまや、仏像の数が多いと云ふので、一堂に二札も三札も打たれた所があるが、少しく妙に感ぜられるから、重複札は適当に按配されることが望ましい。

札所の番号順は大体巡拝順になつて居るが、後に取捨した為めか、とびくになつてゐるのがある。是等もある時機に順序よく、番号の変更をするがよいと思ふ。

新札所の中に昔の札所の番号と御詠歌が共に記されてあるのを気付いた。是は大した意味もないが、参考のために二、三を誌す。新第一番には第六十八番とあり、新の第八番には第二十二番となり、新の第九番には第五十九番とある。

この度の巡歴で今更ながら私の感じたのは、萩地風光の秀麗明眉なことである。菊ヶ浜海水浴に来る都会人士が景色の美はしきにみとれるが、萩を閉む周りの山麓を歩いて見ると、菊ヶ浜よりもよい所が沢山ある。巡拝に事寄せて是等の風光を天下に紹介し、併せて貴重な史蹟を顕彰するは萩地として徒爾のことではないと考へる。風光のみを云ふならば、玉江観音院、猿観音、南明寺、第二十二番下目代、第二十四番上野、第二十五番上野、第四十四番後小畑観音堂、第五十四番鶴江観音堂などが其優なものである。尙此度小生等が場所番号を変更した理由などに就ては法鼓第七卷の一、二、四号を参照されたい。

琴の浦わの松風の
○
声もかなしくひびくなり

三里の道に足疲れ
○
きらめく波に沈まむず

小さき胸ははり裂けて
○
いやしからざるみめ形

もと亡き父はなにがしの
ただ行先是東京と
人もせん方つきはてゝ

こたび見しらぬ人のため
などゝおぼろに署の人には
語るをきけば連れて來し
されば今より六年前
ゆかりありつる少女子か

奇しきは是にとどまらず
主人はいつになく夢の
立つ偉丈夫の姿をば、

夢か現か知らねども
あはれかなき少女子の
ゑなさを情ある

○
其夜少女をともなひし
国に遊びで枕辺に
おぼろげに見て眼さめぬと

○
迷ふ少女をかくばかり
やがてまことの母のもと
愛子誘ふ亡き父の

にごりにしまぬ少女子の
誰か心の内にして
精靈の奇しき力をば

○
この運命を思ふ時
至誠の強き力をば
思はぬ人やなかるらん

(大正九年夏作)

仏のヒタキ

小鳥を籠に飼ひてそのよき音、美はしき姿を間近に賞づるは、と
もすればさみ勝らなる人の心を和らぐるよすがとなり、数ある
樂みの内にても優にやさしきものなりと思へど、はて知らぬ青空
を怨ふ小鳥の性をおもへば、罪なきに囚はれの身となり、小さき
ながらも一生をいけにえに捧ぐるかと思へば、いとほしの心の起
らざらめや。願くは彼にも自由の翼を許し、吾等も枝にとびかふ
自然の姿、さゝ鳴くよき音に親しむを得ば、これこそ愛鳥の至樂
を極めたれと言ひつべしなど、空だのみしたことのありしか。
よもあり得ぬと思ひ定めたることの、いさゝか眼のあたりに現は
れ來りたるぞ嬉しき。はや五十日にもなりぬべし、墨染の羽袖に
大なる白き紋をつけたるヒンカチと呼ぶ黄色の小鳥、余が家の南
の庭に来鳴きて遊ぶに心づけり、余が許には小鳥捕る荒くれの男
もあれど、こればかりは驚かなかれと、言ひ含めて心くばり居
たるに、いくしむ余等の心の通じたるにや、餌を投げて与ふる
にもあらざれど、こゝかしこひもじからぬ迄の虫けらもありぬら
む、貧生の庭のたゞまひ、もとより称すべき程のものとてあ
らざれど、尙小鳥にはあかぬ眺めとも見ゆらんか。あるは近き處
に眼じろ、山がらなどの鳥籠あり、それなつかしき音にさそは
れて、此處を谿間と思ひつらんか。この二十日餘りはいよ／＼人
慣れのしてひねもすこの庭を離れず、軒近き岩の上、松樹の枝は
おろか、ガラス障子に羽ばたきをよせては、その様にとまり、或
は縁端をこきざみに走せまはるなど、その姿態の愛らしさ言はん
方なし、枝をかへてはヒツ／＼と鳴く音のゆかしく、文よむ眼を

外の面にそらし、口笛もてその音に和すれば、鳥も心ありてか、
静かにきゝ耳立つらしきもうれし。二羽の雀もこの鳥に親しみ、
時々は傍に飛びかかるも、立居振舞とも言ふべき飛騰の型の
異なるがをかし。

余が友に百千の小鳥飼ふ大蔵と呼ぶ主あり、さる宴の席にて余は

この話をなし、ヒンカチと呼ぶ小鳥には何かよき別名あらずやと

たゞしたるに、そは辞典にも載せられてありつべし、仏のヒタキ

と呼ぶとぞ。

余等は昨年七月より我身人の身のため、仏の教をしらべてんとの
会をつくり、余が家はその友人の集ふ所となり、又この庭につ
き出でたる明るき部屋には、さる高徳の筆になれる彌動仮性の類
もかゝれり、今まで庭に来住める小鳥さへ、仏の名を冠り居るは
、何か大なる力の加ふるありてのことなるかと、推しはかられて
忝なし。

ある大徳が日頃のやさしき行ひに似もやらず、釐の庵の庭に来遊

べる鹿を容赦もあらず、むごたらしく追ひたてたるは、なまじひ

に人に馴れ、村里に近づき、里にては猶人より命とられんことを

慮りてのまことの慈悲の顕はれなりしと、物語りにきゝつれど、

小鳥の生ひ先を思ひやる誠の足らはぬにやあらむ、かくいじらし

くも人馴れのせるものを、静かに危うげなきこの小庭より、荒風

すさぶ深山へと追ひ立つるに忍びず、はかなくもかく和らぎある

(昭和三年十二月廿三日記)

高野山

記

又高野は山上なれど伐採を許されざれば、薪木より米穀まで下よ
り運ぶ由にて、是は一種険坂用の牛車による。為めに不動坂には
到る所に牛糞散在し、糞廐者と共に先づ不快なる感を与ふ。虎穴
に入らずんば虎兎を得ずとか、靈場に入らんとするには、先づこ
の見苦しき場所を過ぐべきこと、天意に出づるか。

女人堂を経て所縁坊受付に立寄る。普通納骨の場合は此処にて現
住の府県を云へば、その府県所属の寺院に案内せられ、ニこにて
一応読經を受けて後、奥の院の納骨堂へ案内されるなりと。され
ど余は始めより中継ぎの寺院にたち寄らず、直接奥の院にて手厚
き法要をなし度きが如何と、尋ねたるに、それでもよろしと云
ふ。後にきゝたる所によれば、寺院にたち寄れば永、その寺との
因縁つき、現在或は将来とも寄附金の勧説を受くること有り勝ち
なりと云ふ。高野の町には郵便局、警察署、裁判所の出張所あり
、数町のあいだ道の両側に人家あり、主として土産品販売店な
り。当山は再々火災を起こし、寺院の焼失せるもの名けれども、
尙残存するもの金剛峰寺は云ふも更なり、一般に建氣壮大雅趣に
富む。一の橋より奥の院まで十八町の間は殆んど平々坦々なる道
路にて三百諸大名の墓石、近時建設の記念供養塔、觀音像、納骨
碑など所せまきまで立ちならび、奥の院へ向つて左には幾代かの
御皇室の御墓表、向つて右には昭憲皇太后的御墓石も拝せらる。
その他各宮家の御墓所、豊臣家の墓所、石田三成、明智光秀の墓
、最も大なるは駿河大納言が母の為めに建立したるもの高さ三丈
なり、尙史蹟記念物として指定せられたるに島津義弘が敵味
方菩提の為め建つる所の朝鮮陣の碑、康永三年建つる所の仏号板
碑等あり、海内無比の靈場と云ひつべし。案内し與る、某数珠店

仏法僧をきかずやと云ふ

の若者が声高かに、是等墓碑の説明をなし與るゝも嬉し。黑白黄の羽衣ついたる鳩ほどの大きさの鳥、墓石にとまりて人恐らせぬも、此処ならでは見られぬことなるべし。一の橋中の橋及玉川に架せる御廟橋の三橋のほとりに記念写真をとりまさすやと写真師の路傍に居るも、他の名勝地には見られぬ様なり。

奥の院前の礼拝堂には有名なる貧者の一燈を始め、多くの不滅の燈火あり。余は納骨の趣を詰り、御布施をさし出し、両親の戒名及余の住所を告ぐ、対談の老僧は和歌山附近の人にして亡父を知ると語り出づるも嬉し。納骨堂の傍に在る仏壇の室に座し、遙に提へ來りし菓子を供へ、掌に香木の粉をすりこみ、両親の御遺骨に対する最後の読経をきく。大師か入寂の靈場を前にして、静に法要の座に瞑目すれば、ありし昔の両親が恩愛の程も懷ひ出されて万感胸に湧き出づ。

一僧侶あり、受付けの老僧より山本光三氏の遺骨を提へ來れる人ありときゝ、勉強君なるべしと思ひたりとて出で来る。是は宇田師とて余が中学時代の知友にして、余が隣家に居住し、余が両親をも熟知す、まことに奇遇なり。同師は唯一の愛娘を失ひてより身を僧籍に置くに到りしと云ふ。宇田師及読経の僧侶と共に納骨堂を前に記念の写真をとる。その僧の曰く、当山には他處には居らぬ仏法僧と名づくる鳥あり。屋間姿を現はさぬも、昨夜は鳴けるをきゝたり。今夜一夜を山寺に宿りてきかれては如何にと勧められたるも、始めより即日下山の予定なればと好意を謝す。

高野山御骨納めの堂守は

亡きたらちねの知り人にして

よべ鳴きぬ今宵一夜を山に居て

の天下無双の建造物も大正より昭和と年号を新にする夜、火災に罹り、嚴寒の候とて、近傍の大なる貯水池も堅氷に閉されて用をなさず、あたら烏有に帰したるなり。今は某請負師の手にて鉄筋コンクリート式に、大柱も打ち建てられ居る最中なり。竣成の暁輪奂の美は或は以前に増すやも計られざるも、日本固有の建築美の尊さは、また窺ふに由なかるべし。

それより靈殿に到る。高野山は大師請來の仏具写経を始め御皇室の御寄進、公卿武家の寄附にかかるる靈宝物、無数にありしも、明治の変革にて寺院の廃合行はれし際散逸し、且つ屢々火災に罹りし為め、大に減少せしも、尙現に国宝となるもの約百二十件四百六十餘点あり、就中國宝中の絶品にて世界宝と称せらるゝものあり。是等の主なるものが此館に陳列せられる、一部を採録すれば左の如し。

大師請來の諸銅器、大日如来、阿弥陀如来、矜羯羅童子、制多迦童子、波切不動尊、智証大師筆と伝ふ赤不動尊、恵心僧都筆と伝ふ阿弥陀如来、廿五菩薩來迎図、定智筆と伝ふ善女龍王、仏涅槃図、弘法大師筆と伝ふ金剛吼菩薩、珍海筆と伝ふ文殊菩薩、藥師十二神画像、大師請來の枕本尊及屏風本尊、板マンダラ、弘法大師行狀絵巻、後醍醐天皇宸筆御立願文、後白河法皇御手印起請文、大師筆と伝ふ即身成仏義及座右銘、源頼朝自筆の書状、源義經自筆の書状、西行法師自筆の書状

以上その他珍貴のもの多く、心ある人は是非參觀すべき所なり。開山毫千百年記念として建てられたる大殿堂、大師教會の前を通り、もと来し道を籠に打乗り、極楽橋に到る。電鉄により午後五時を僅に過ぎたる頃界へ帰り着く。

余頃日先輩知已と会し、談偶々「萩には近時尙幾多の異色ある人物を見る」と云ふに至り、これ等異色人物伝を編するも一興ならんと相顧みて微笑したことあり。惟ふに静浦桜井哲郎君の如きも亦この伝中の人たるを失はざるなり。

君は明治十六年医師桜井朝清の長男として東京府下五日市に生れ、七歳にして父を失ふ。明治二十四年母と共に大津郡仙崎町に転住し、萩中学校を経て東京歯科医学校を卒業す。其後君明治四十二年萩市熊谷町に開業するや、當時交通不便にして文化に遅れたる萩地は歯科医を輕視する習俗あり、創業の労少からず、加之倚頼する者の為めに却て出費の挙をすら敢てなし、財政上辛苦を味ひたりしも、刻苦勉励能く艱難を克服し、終に診療所邸宅を津守町に建設し、門戸を張るに到る。

君資性温厚篤実人に接するに謙讓なり。壯時酒杯に親み、時ありて飄然として出でゝ家を忘るゝ事ありしも、時人強いて之を咎めざりしは、その徳の然らしむる所といふべし。君読書を好み、文芸宗教哲学に関する書籍を耽読す。當時県立萩図書館に最も多く出入したるは實に君なり。嘗て余と共に西田町巴城俱楽部内に読書会を創設し、新知識の交換に努めたることあり。又英学の素養豈かにして好んで英書を読み、英語科中等教員の試験を受けんと企てしこともありたり。

君が糟糠の夫人痼疾医し難きこと数年に涉るや、君病床に侍し、看護愛撫至らざるなかりしも、昭和四年秋遂に君に先つて長逝す。幾許もなくして君同業の開業医現未亡人を娶る。琴〇相和し

、歎寒去つて人生の春蘇へる感あり。且つ昭和九年始めて愛兒を儲け、その喜び譬ふるに物なく、春風春水一時に至る。然るに天何ぞ無情なる、新家庭漸く八ヶ年、一朝にして君が天命を奪ひ去らんとは。

君文芸の趣味深く、和歌俳句に堪能なりしも、そはもとより餘技に過ぎず。今この集を発刊するも、徒に文藻の華麗を推称せんとするものにあらず。これによりて吟懷を恣にせる風貌、寂しみを味へるその性格、同情心の厚く自然美にあこがれしたこと、妻子に対する愛情の切なりしこと等、君が面目を偲ばんことを希ふに過ぎざるなり。茲に些か所感と君の経歴とを記して以て序に代ふといふ。

昭和十六年五月八日

辱知 山本勉 弥

山本勉彌略年譜

一、明治十八年三月十二日山本光三長男として和歌山市小野町三丁目廿六番地に生る。
一、父光三是藩士林良八（旧名半之進）の次男として安政元年八月二十二日萩前小畠に生れ、明治四年三月當時下上野に居宅ありし藩士山本小三（旧名清右衛門）の養子となる。

一、光三是明倫校学頭小倉遜齋に学び、明治二年十六歳にして山口藩第四大隊に編入され、十八歳上京、御親兵第六大隊に編入される。其後郷土の先輩品川、野村などの高官に引立られ、紙幣局、山林局、地租改正事務局等を転勤、盛岡、仙台、新潟より南は鹿児島、琉球にまで足跡を印し、明治十七年和歌山県収税

一、大正八年七月同志と共に萩自彌会を作り、同会の事務を司どる。
一、大正八年八月同志と共に妙蓮寺住職紀野俊耀師を授けて萩護国少年団を設立す。
一、大正九年四月より昭和十五年四月まで山口県立萩中学校々医就任。
一、大正九年五月萩中生に呼びかけて自警会を起し、雑誌「自警」を発刊す。
一、大正九年七月虎列刺流行に際し、萩警察署勤務防疫員を命ぜらる。
一、大正十一年一月より大正十五年三月まで山口県立萩高等女学校々医就任。
一、大正十三年三月より大正十五年五月まで美祢線鉄道医に就任
一、大正十三年十二月萩電争議の渦中に投す。
一、大正十五年三月阿武郡学校医会創設時より昭和七年七月まで同会々長就任。
一、大正十五年四月萩町々會議員に当選。
一、昭和二年七月同志と共に萩仏教研究会を創設、昭和三年三月より昭和十三年五月まで機関誌「法鼓」を毎月発刊す。
一、昭和三年七月萩町々會議員に再選。
一、昭和六年四月より昭和七年七月まで阿武郡医師会長就任。
一、昭和六年九月林萩町長排撃運動に關係す。
一、昭和六年十月山口県会議員當選。
一、昭和七年七月より昭和十一年二月まで萩市医師会長就任。
一、満蒙鮮の旅行を終へ、昭和八年九月「満鮮百話」を刊行す。

一、昭和二十七年七月萩市制二十周年記念式に於て文化功労者と属に任官、漸次昇進して判任官四級俸を給せらる。明治廿五年五月奈良県収税属となり、約二ヶ年五条町に転住す。五条より帰和せる後紀州銀行の創立に尽力し、同行の支配人となる。同行が四十三銀行と合併するや、四十三銀行新通支店長となり、七十三歳に及ぶ。昭和四年一月二十五日歿、享年七十六。
一、母たか。齋藤平八の次女として安政六年十二月二日萩上野に生れ、明治十一年十月十五日山本家へ入籍。明治廿一年八月十日歿、享年三十。
一、姉しげ、明治十四年五月生、二十二歳の時森青胤に嫁し、二男二女あり、昭和二十二年三月歿享年六十九。
一、明治二十七年三月和歌山市湊南小学校卒業。
一、明治三十四年三月和歌山県立第一中学校卒業。
一、明治三十七年三月第七高等学校造士館卒業。（第一回生）
一、明治四十一年十二月京都帝国大学福岡医科大学卒業。
一、明治四十三年九月萩吉田町養春医院内科部長就職。
一、明治四十三年十二月萩唐樋町に開業。大正八年九月萩江向に転居。
一、妻たき、大阪府堺市近藤喜恵門二女、明治二十三年十月二十一日生、明治四十四年五月入籍。
一、明治四十五年四月より大正十二年四月まで萩町々医就任。
一、大正元年十二月より大正九年四月まで椿西小学校々医就任。
一、大正七年四月山口縣保健衛生調査委員を命ぜらる。

0



萩市立萩図書館



111468716

